愛媛大学埋蔵文化財調査室年報

── 2008年度 ──

愛媛大学埋蔵文化財調査室

2010

愛媛大学埋蔵文化財調査室年報

— 2008年度 —

愛媛大学埋蔵文化財調査室

2010

序　文

国立大学法人愛媛大学の敷地は、松山市内および愛媛県内各所に点在し、敷地総面積は464haに及ぶ。そのうち、本部事務局と４つの学部が所在する城北団地には文京遺跡、農学部と附属高等学校がある樽味団地には樽味遺跡、国際交流会館がある鷹子団地では鷹子遺跡、教職員宿舎のある北吉井団地では桑原西稲葉遺跡など、数多くの遺跡がある。これまで、愛媛大学では、埋蔵文化財調査室を設置し、校舎建設や営繕工事等の際、埋蔵文化財への影響度をはかるための試掘調査を行い、埋蔵文化財が諸工事で影響を受ける場合には、影響度に応じて全面調査、立会調査の発掘調査を実施してきた。さらに、大学構内における遺跡の有無や精度の高い分布状況を把握する確認調査を実施し、埋蔵文化財の保護に努めている。

こうした発掘調査成果を客観的に資料化し、調査報告書にまとめて公開することによって遺跡の評価が行われる。ところが、愛媛大学の場合、出土品の多さと頻繁な発掘調査によって、速やかな報告書刊行を容易に行えない状況にある。そのため、小規模調査である試掘・立会・確認調査についての報告と、本格調査の概要報告を併せた『埋蔵文化財調査室年報』を刊行している。本書は、その2008年度に実施した埋蔵文化財調査等をまとめた年報である。

また、本書Ⅳ章には、宮崎大学農学部の宇田津徹朗准教授を研究代表者として2005年度から2008年度にわたって文京遺跡で取り組まれたプラント・オパール分析の成果と研究成果が収められている。玉稿をいただいた宇田津徹朗准教授、分担研究者である皇學館大学文学部の外山秀一教授に感謝したい。そして、本書をまとめるにあたって協力いただいた多くの機関、部局、個人の方々に、深く感謝するとともに、本書が大学内外の多くの方々に利用・活用されることを祈念します。

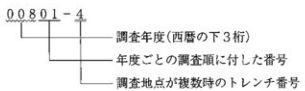
平成22年１月29日

愛媛大学埋蔵文化財調査室
室長　田崎　博之

例　言

1　本書は、愛媛大学埋蔵文化財調査室が2008年度に実施した事業、特に大学構内で実施した試掘・立会・確認形式で行った小規模調査の成果と、大規模調査の概要を報告する愛媛大学埋蔵文化財調査室年報であり、愛媛大学埋蔵文化財調査報告XXIにあたる。

2　埋蔵文化財調査室では、本格全面調査・構内遺跡確認調査については、遺跡ごとに調査次数を付しているが、同時に、1975年から始まった大学構内の発掘調査まで遡って、立会・試掘形式の小規模調査も含めて、すべての調査に調査番号を与えている。調査番号は、西暦の下3桁の後に年度ごとの調査順に01からの2桁の通し番号を加えた5桁の番号で表示している。調査番号に加えて、複数の地点（トレンチ）を調査した場合、－の後に地点番号を付して表示している。



3　本書では、遺構番号に冠して、掘立柱建物：SB、竪穴式住居：SC、溝：SD、炉・竈：SF、柵列：SA、水田：SS、土壙：SK、柱穴・小穴：SP、自然流路：SR、その他：SXの記号で遺構の種別を表している。

4　本書で表示した方位・標高数値は、本格調査においては、日本測地系（Tokyo Datum）平面直角座標系第Ⅳ系にしたがっている。ただし、試掘・立会調査・確認調査で座標系が利用できなかった場合は、調査地点周囲の平板測量成果を掲載し、磁北を表示している。

5　土色・遺物の色調は、1991年以降、小山正忠・竹原秀雄編著（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）『新版標準土色帖』に準拠しているが、本文中ではマンセル記号は省略した。

6　本書に使用した遺構図は、田崎博之・吉田広・三吉秀充・宮崎直栄・濱田美加が作成し浄写を行った。

7　本書で使用した写真は、田崎・吉田・三吉が撮影した。

8　本書は、Ⅰ～Ⅲを田崎・吉田・三吉、Ⅳを宇田津徹朗・外山秀一・田崎が執筆し、田崎の指導のもと、吉田が編集を行った。

9　本書に報告した調査に係わる記録類・出土遺物は、愛媛大学埋蔵文化財調査室において保管している。

本文目次

Ⅰ　2008年度の委員会と事業……1

1　埋蔵文化財調査委員会……1
(1) 第1回埋蔵文化財調査委員会……1
① 2007年度事業報告　② 2008年度予算・事業計画の変更について　③ その他
(2) 第2回埋蔵文化財調査委員会……1
① 2009年度事業計画　② 2009年度予算　③ その他
2　埋蔵文化財調査室の事業……3
(1) 発掘調査……3
① 発掘調査の依頼　② 発掘調査
(2) 整理作業……3
(3) 印刷物の刊行……8
(4) 広報、資料等の利活用……9
① 広報パンフレットの配布・改訂　② Webによる資料公開　③ 公開講座の開催
④ 愛媛大学ミュージアム設置準備　⑤ 資料等の利用状況

Ⅱ　2008年度の発掘調査……13

00801　城北団地総合研究棟（教育系）耐震改修その他工事計画に伴う調査……13
00802　城北団地総合教育研究棟（Ⅱ期）耐震改修その他工事計画に伴う調査……18
00803　沿岸・GRC関連施設新営工事に伴う調査－文京遺跡35次調査－……33
00804　城北団地総合教育研究棟（Ⅱ期）耐震改修その他工事に伴う調査－文京遺跡36次調査－……51
00805　城北団地総合研究棟（教育系）耐震改修その他工事に伴う調査－文京遺跡37次調査－……85
00806　愛媛大学本部車庫等取設工事に伴う調査……104

Ⅲ　構内の遺跡……108

1　構内における埋蔵文化財の把握状況……108
(1) 城北団地　(2) 持田団地　(3) 樽味団地　(4) 御幸団地　(5) 北吉井団地
(6) 鷹子団地　(7) 山越団地　(8) 重信団地　(9) その他の団地

Ⅳ　文京遺跡における縄文時代後期の稲作農耕空間の探求……122

挿図目次

図1　城北団地2008年度調査地点位置図（縮尺 1/3,500）……7
図2　調査室・調査室資料の利用推移……11
図3　00801調査地点位置図（縮尺1/500）……13
図4　00801調査1・2トレンチ実測図（縮尺1/50）……14
図5　00801調査3トレンチ実測図（縮尺1/50）……15
図6　計画工事による埋蔵文化財への影響（縮尺1/500）……17
図7　00802調査地点位置図（縮尺1/500）……19
図8　00802調査1・2トレンチ実測図（縮尺1/50）……20
図9　00802調査3・4トレンチ実測図（縮尺1/50）……22
図10　00802調査5・6トレンチ実測図（縮尺1/50）……23
図11　00802調査7トレンチ実測図（縮尺1/50）……25
図12　00802調査8トレンチ実測図（縮尺1/50）……26
図13　00802調査9・10トレンチ実測図（縮尺1/50）……27
図14　計画工事による埋蔵文化財への影響（縮尺1/500）……30
図15　00803（文京35次）調査調査区配置図（縮尺1/1,000）……34
図16　00803（文京35次）調査土層図（縮尺1/80、1/40）……35－36
図17　00803（文京35次）調査Ⅱ-3-①層上面出土遺構配置図（縮尺1/120）……39
図18　00803（文京35次）調査Ⅱ-3-①層上面出土溝断面図（縮尺1/20）……40
図19　00803（文京35次）調査Ⅱ-3-①層上面出土土壙実測図（縮尺1/40）……41
図20　00803（文京35次）調査Ⅲ層上面検出平面図（縮尺1/120）……42
図21　00803（文京35次）調査Ⅳ層上面およびⅣ層中出土遺構配置図（縮尺1/120）……45
図22　00803（文京35次）調査Ⅳ層中出土遺構実測図（縮尺1/40）……47
図23　00803（文京35次）調査Ⅱ・Ⅲ区実測図（縮尺1/50）……50
図24　00804（文京36次）調査調査区配置図（縮尺1/500）……52
図25　00804（文京36次）調査Ⅰ～Ⅲ区実測図（縮尺1/100）……55－56
図26　00804（文京36次）調査Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ区実測図（縮尺1/100）……61－62
図27　00804（文京36次）調査Ⅵ区・Ⅵ区南実測図（縮尺1/100）……65－66
図28　00804（文京36次）調査Ⅷ区・Ⅴ区北部実測図（縮尺1/100）……74
図29　00804（文京36次）調査Ⅸ・Ⅹ区実測図（縮尺1/100）……76
図30　00804（文京36次）調査ⅩⅠ・ⅩⅦ区実測図（縮尺1/100）……79
図31　00804（文京36次）調査ⅩⅡ～ⅩⅣ区実測図（縮尺1/200、1/50）……80
図32　00804（文京36次）調査ⅩⅤ・ⅩⅥ区実測図（縮尺1/200、1/50）……81
図33　00804（文京36次）調査周辺主要遺構配置図（縮尺1/500）……84
図34　00805（文京37次）調査調査地点位置図（縮尺1/500）……86
図35　00805（文京37次）調査Ⅰ区実測図（縮尺1/50）……88
図36　00805（文京37次）調査Ⅱ区実測図（縮尺1/50）……89
図37　00805（文京37次）調査Ⅲ・Ⅳ区実測図（縮尺1/50）……91－92
図38　00805（文京37次）調査Ⅴ区平面図（縮尺1/100）……95－96
図39　00805（文京37次）調査Ⅴ区南壁土層図（縮尺1/100、1/50）……97－98
図40　00806調査地点位置図（縮尺1/1,000）……104
図41　00806調査平面図および土層柱状図（縮尺1/100、1/40）……105

図42　城北団地調査地位置図
（縮尺1/2,000）……109－110
図43　持田団地調査地位置図（縮尺1/2,000）…… 111
図44　樽味団地調査地位置図（縮尺1/2,000）…… 112
図45　御幸団地調査地位置図（縮尺1/1,000）…… 113
図46　重信団地調査地位置図（縮尺1/3,000）…… 114
図47　道後平野の地形と文京遺跡の立地 …… 122
図48　イネ亜種にみられる機動細胞珪酸体の形状… 125
図49　イネ機動細胞珪酸体形状の測定部位…… 125
図50　文京遺跡周辺の微地形…… 128
図51　文京遺跡における調査地点位置図 …… 129
図52　文京遺跡11次調査平面図および土層断面図… 130
図53　文京遺跡11次調査のプラント・オパール
分析土器試料…… 131
図54　文京遺跡21・24・35次調査の縄文時代後期
および晩期末の遺構配置および21次調査区
西部の土層断面 …… 133
図55　文京遺跡21次調査SX-400の堆積状況…… 134
図56　文京遺跡21次調査SK-401・402実測図…… 135
図57　文京遺跡31次調査Ⅳ-3b層上面平面図、西
壁・南壁土層断面図、および補足ボーリン
グ調査土層柱状図…… 138
図58　文京遺跡31次調査余掘り壁面土層断面図… 139
図59　文京遺跡31次調査南壁面および西壁面№101
～121プラント・オパール定量分析結果…· 141
図60　文京遺跡31次調査余掘り壁面試料№1～24
プラント・オパール定量分析結果 …… 141
図61　文京遺跡31次補足ボーリング調査Ｐ１プラ
ント・オパール定量分析結果 …… 142
図62　文京遺跡31次補足ボーリング調査Ｐ３プラ
ント・オパール定量分析結果 …… 143
図63　文京遺跡33次調査平面図および土層断面図… 144
図64　文京遺跡33次調査Ａ地点プラント・オパー
ル定量分析結果 …… 147
図65　文京遺跡33次調査Ｂ地点プラント・オパー
ル定量分析結果 …… 147
図66　文京遺跡33次調査Ｃ地点プラント・オパー
ル定量分析結果 …… 148
図67　文京遺跡33次調査Ｄ地点プラント・オパー
ル定量分析結果 …… 149
図68　文京遺跡33次調査Ｅ地点プラント・オパー
ル定量分析結果 …… 150
図69　文京遺跡33次調査Ｆ地点プラント・オパー
ル定量分析結果 …… 151
図70　文京遺跡34次調査Ⅳ区東端部南壁土層断面
図…… 152
図71　文京遺跡34次調査Ⅳ区プラント・オパール
定量分析結果…… 153
図72　文京遺跡00707調査６トレンチ中央部～東
半部北壁土層断面図 …… 154
図73　文京遺跡00707調査６トレンチプラント・
オパール定量分析結果…… 155
図74　文京遺跡35次調査余掘り壁面土層断面図… 156
図75　文京遺跡35次調査プラント・オパール定量
分析結果…… 157
図76　文京遺跡37次調査Ⅴ区SK-101実測図…… 158
図77　文京遺跡におけるⅣ層（Ⅳ-1層）上面の地
形…… 160
図78　文京遺跡11・31・33次調査土層の対応関係… 161

写真目次

写真1　教育学生支援部西側掲示板照明設備
取設工事立会 ……4
写真2　図書館周辺雨水管他修繕工事立会……4
写真3　附属幼稚園園舎暖房設備取設工事立会……4
写真4　教育学部本館西側埋設井水管修繕
工事立会 ……4
写真5　（城北）教育系総合研究棟耐震改修
その他工事立会……4
写真6　（樽味）総合研究棟Ⅱ期耐震改修電気設備
工事立会（1）……4
写真7　（樽味）総合研究棟Ⅱ期耐震改修電気設備
工事立会（2）……4

写真８　図書館北側掲示板排水設備取設工事立会 …5
写真９　沿岸・GRC関連施設新営電気・機械設備
工事立会 …5
写真10　（樽味）総合研究棟Ⅱ期耐震改修機械設備
工事立会 …5
写真11　教育学部２号館西植え込み給水管修繕
工事立会 …5
写真12　（城北）総合教育研究棟Ⅱ期耐震改修
その他工事立会 …5
写真13　理学部温室跡整備工事立会 …5
写真14　（城北）総合教育研究棟Ⅱ期耐震改修機械
設備工事立会 …5
写真15　公開講座の様子（1） …9
写真16　公開講座の様子（2） …9
写真17　00801調査１トレンチ遠景
（南東から） …16
写真18　00801調査１トレンチ（南東から） …16
写真19　00801調査２トレンチ遠景
（南西から） …16
写真20　00801調査２トレンチ（南西から） …16
写真21　00801調査３トレンチ遠景（東から） …16
写真22　00801調査３トレンチ（南東から） …16
写真23　00802調査１トレンチ遠景
（北西から） …20
写真24　00802調査１トレンチ（北西から） …20
写真25　00802調査２トレンチ遠景
（北西から） …21
写真26　00802調査２トレンチ（北から） …21
写真27　00802調査２トレンチ土層（西から） …21
写真28　00802調査３トレンチ遠景
（北東から） …22
写真29　00802調査３トレンチ
（北東から） …22
写真30　00802調査４トレンチ遠景
（北東から） …22
写真31　00802調査４トレンチ（南東から） …22
写真32　00802調査５・６トレンチ遠景
（南東から） …24
写真33　00802調査５トレンチ（南西から） …24
写真34　00802調査５トレンチ土層（西から） …24
写真35　00802調査６トレンチ遠景（南から） …24
写真36　00802調査６トレンチ（南西から） …24
写真37　00802調査６トレンチ土層
（南西から） …24
写真38　00802調査７トレンチ遠景
（北東から） …26
写真39　00802調査７トレンチ（北西から） …26
写真40　00802調査７トレンチ土層（西から） …26
写真41　00802調査７トレンチ土層（東から） …26
写真42　00802調査８トレンチ遠景
（南西から） …27
写真43　00802調査８トレンチ（南西から） …27
写真44　00802調査９トレンチ遠景
（南西から） …28
写真45　00802調査９トレンチ（南西から） …28
写真46　00802調査10トレンチ遠景（南から） …28
写真47　00802調査10トレンチ（南東から） …28
写真48　00802調査10トレンチSP-12
（南西から） …28
写真49　00803（文京35次）調査調査前遠景
（北西から） …43
写真50　00803（文京35次）調査表土掘削後全景
（北西から） …43
写真51　00803（文京35次）調査Ⅱ-3-①層上面検出
遺構完掘（北西から） …43
写真52　00803（文京35次）調査Ⅲ層検出全景
（北西から） …43
写真53　00803（文京35次）調査SR-201
（西から） …43
写真54　00803（文京35次）調査SR-201
（北西から） …43
写真55　00803（文京35次）調査Ⅳ-１層
遺物出土状況（南西から） …43
写真56　00803（文京35次）調査Ⅳ-１層
遺物出土状況（西から） …43
写真57　00803（文京35次）調査SX-203検出
（南から） …48
写真58　00803（文京35次）調査SX-203
（南から） …48
写真59　00803（文京35次）調査SX-204検出
（南から） …48
写真60　00803（文京35次）調査SX-204
（南から） …48
写真61　00803（文京35次）調査SK-205検出
（南から） …48

写真62　00803（文京35次）調査 SK-205
（南から）…… 48
写真63　00803（文京35次）調査 SP-206検出
（南から）…… 48
写真64　00803（文京35次）調査 SK-207検出
（南から）…… 48
写真65　00803（文京35次）調査 SX-208検出
（南から）…… 49
写真66　00803（文京35次）調査 SX-208
（南から）…… 49
写真67　00803（文京35次）調査 SP-209検出
（北から）…… 49
写真68　00803（文京35次）調査 SK-210
（南から）…… 49
写真69　00803（文京35次）調査 SC-211
（南から）…… 49
写真70　00803（文京35次）調査 SC-211
（東から）…… 49
写真71　00803（文京35次）調査Ⅱ区北壁土層
（南から）…… 50
写真72　00803（文京35次）調査Ⅲ区東壁土層
（西から）…… 50
写真73　00804（文京36次）調査Ⅰ区表土掘削後
（西から）…… 54
写真74　00804（文京36次）調査Ⅰ区 SP-107土層
（北東から）…… 54
写真75　00804（文京36次）調査Ⅰ区 SP-108土層
（西から）…… 54
写真76　00804（文京36次）調査Ⅰ区 SK-106
・ SP-107・108完掘（東から）…… 54
写真77　00804（文京36次）調査Ⅰ区 SP-115土層
（北西から）…… 54
写真78　00804（文京36次）調査Ⅰ区
SC-116焼土・炭化物層（北西から）…… 57
写真79　00804（文京36次）調査Ⅰ区
SC-116・117・123完掘（北から）…… 57
写真80　00804（文京36次）調査Ⅰ区
南壁（CU区）土層（北西から）…… 57
写真81　00804（文京36次）調査Ⅰ区西端砂礫層断
割（北東から）…… 57
写真82　00804（文京36次）調査Ⅱ区完掘
（北から）…… 58
写真83　00804（文京36次）調査Ⅱ区 SR-203
（北から）…… 58
写真84　00804（文京36次）調査Ⅱ区 SP-206・213
（東から）…… 58
写真85　00804（文京36次）調査Ⅱ区 SK-205検出
（北西から）…… 58
写真86　00804（文京36次）調査Ⅱ区西壁土層
（北東から）…… 58
写真87　00804（文京36次）調査Ⅲ区西遺構検出
（北から）…… 60
写真88　00804（文京36次）調査Ⅲ区中完掘
（北から）…… 60
写真89　00804（文京36次）調査Ⅲ区東遺構検出
（北から）…… 60
写真90　00804（文京36次）調査Ⅳ区表土掘削後
（東から）…… 63
写真91　00804（文京36次）調査Ⅳ区遺構検出
（東から）…… 63
写真92　00804（文京36次）調査Ⅳ区 SR-401
（東から）…… 63
写真93　00804（文京36次）調査Ⅴ区表土掘削後
（南から）…… 64
写真94　00804（文京36次）調査Ⅴ区 SR-502
（北西から）…… 64
写真95　00804（文京36次）調査Ⅴ区 SR-506検出
（北西から）…… 64
写真96　00804（文京36次）調査Ⅴ区 SR-506
（北西から）…… 64
写真97　00804（文京36次）調査Ⅴ区南壁土層
（南西から）…… 64
写真98　00804（文京36次）調査Ⅵ区表土掘削後
（東から）…… 68
写真99　00804（文京36次）調査Ⅵ区西半遺構検出
（東から）…… 68
写真100　00804（文京36次）調査Ⅵ区東半遺構検出
（東から）…… 68
写真101　00804（文京36次）調査Ⅵ区完掘
（東から）…… 68
写真102　00804（文京36次）調査Ⅵ区 SR-601
（東から）…… 69
写真103　00804（文京36次）調査Ⅵ区 SR-601土層
（北東から）…… 69

写真104　00804（文京36次）調査Ⅵ区
SR-601東岸土層（北西から）……69
写真105　00804（文京36次）調査Ⅵ区SR-602
（北から）……69
写真106　00804（文京36次）調査Ⅵ区SR-603
（北から）……69
写真107　00804（文京36次）調査Ⅵ区SC-612他
（北東から）……70
写真108　00804（文京36次）調査Ⅵ区SK-616
（南から）……70
写真109　00804（文京36次）調査Ⅵ区SD-605検出
（北西から）……70
写真110　00804（文京36次）調査Ⅵ区SD-605
（北西から）……70
写真111　00804（文京36次）調査Ⅵ区南壁土層
（北西から）……70
写真112　00804（文京36次）調査Ⅵ区
Ⅳ層土器出土状況（北東から）……70
写真113　00804（文京36次）調査Ⅵ区南
重機掘削後全景（西から）……71
写真114　00804（文京36次）調査Ⅵ区南
SD-605検出（南西から）……71
写真115　00804（文京36次）調査Ⅵ区南
SD-605土層（北から）……71
写真116　00804（文京36次）調査Ⅶ区完掘
（北から）……73
写真117　00804（文京36次）調査Ⅶ区SR-701
（北東から）……73
写真118　00804（文京36次）調査Ⅶ区SR-704・706
（北東から）……73
写真119　00804（文京36次）調査Ⅶ区表土掘削後
（西から）……75
写真120　00804（文京36次）調査Ⅶ区完掘
（西から）……75
写真121　00804（文京36次）調査Ⅶ区SR-801
（南西から）……75
写真122　00804（文京36次）調査Ⅶ区SR-801
土器出土状況１（南西から）……75
写真123　00804（文京36次）調査Ⅶ区SR-801
土器出土状況２（南西から）……75
写真124　00804（文京36次）調査Ⅶ区
東壁・南壁土層（北西から）……75
写真125　00804（文京36次）調査Ⅸ区表土掘削後
（南から）……77
写真126　00804（文京36次）調査Ⅸ区完掘
（南から）……77
写真127　00804（文京36次）調査Ⅸ区東壁土層
（西から）……77
写真128　00804（文京36次）調査Ⅹ区西完掘
（南から）……77
写真129　00804（文京36次）調査Ⅹ区西西壁土層
（東から）……77
写真130　00804（文京36次）調査Ⅹ区中完掘
（南から）……78
写真131　00804（文京36次）調査Ⅹ区中東壁土層
（南西から）……78
写真132　00804（文京36次）調査Ⅹ区中
東壁土層採取（西から）……78
写真133　00804（文京36次）調査Ⅹ区東完掘
（南から）……78
写真134　00804（文京36次）調査Ⅹ区東壁土層
（南西から）……78
写真135　00804（文京36次）調査Ⅹ区作業状況……78
写真136　00804（文京36次）調査ⅩⅠ区完掘
（南から）……83
写真137　00804（文京36次）調査ⅩⅠ区
SR-1101遺物出土状況（南西から）……83
写真138　00804（文京36次）調査ⅩⅡ区完掘
（北から）……83
写真139　00804（文京36次）調査ⅩⅢ区西壁土層
（東から）……83
写真140　00804（文京36次）調査ⅩⅣ区北壁土層
（南から）……83
写真141　00804（文京36次）調査ⅩⅤ区
Ⅳ層上面遺構完掘（北から）……83
写真142　00804（文京36次）調査ⅩⅥ区完掘
（南から）……83
写真143　00804（文京36次）調査ⅩⅦ区完掘
（北から）……83
写真144　00805（文京37次）調査Ⅰ区表土掘削後
（東から）……90
写真145　00805（文京37次）調査Ⅰ区完掘
（東から）……90
写真146　00805（文京37次）調査Ⅱ区遺構検出
（東から）……90

写真147　00805（文京37次）調査Ⅱ区完掘
（東から）…… 90
写真148　00805（文京37次）調査Ⅱ区 SP-6土層
（南東から）…… 90
写真149　00805（文京37次）調査Ⅱ区 SP-7土層
（北西から）…… 90
写真150　00805（文京37次）調査Ⅲ区完掘
（東から）…… 90
写真151　00805（文京37次）調査Ⅲ区 SK-29
（南東から）…… 90
写真152　00805（文京37次）調査Ⅳ区完掘
（北から）…… 93
写真153　00805（文京37次）調査Ⅳ区東壁土層
（西から）…… 93
写真154　00805（文京37次）調査Ⅴ区表土掘削後
（東から）…… 94
写真155　00805（文京37次）調査Ⅴ区
Ⅲ層上面遺構完掘（東から）…… 94
写真156　00805（文京37次）調査Ⅴ区 SR-31
（北西から）…… 94
写真157　00805（文京37次）調査Ⅴ区 SR-32
（東から）…… 94
写真158　00805（文京37次）調査Ⅴ区
Ⅳ層上面遺構完掘（東から）…… 100
写真159　00805（文京37次）調査Ⅴ区 SC-36
（東から）…… 100
写真160　00805（文京37次）調査Ⅴ区 SD-60
（東から）…… 100
写真161　00805（文京37次）調査Ⅴ区 SD-39
（北西から）…… 100
写真162　00805（文京37次）調査Ⅴ区 SD-38
（北西から）…… 100
写真163　00805（文京37次）調査Ⅴ区 SC-34
（東から）…… 100
写真164　00805（文京37次）調査Ⅴ区 SC-35
（東から）…… 100
写真165　00805（文京37次）調査Ⅴ区完掘
（東から）…… 102
写真166　00805（文京37次）調査Ⅴ区
SK-101遺物出土状況（北東から）…… 102
写真167　00805（文京37次）調査Ⅴ区 SK-101
（北東から）…… 102
写真168　00805（文京37次）調査Ⅴ区 SP-102
（南から）…… 102
写真169　00805（文京37次）調査Ⅴ区 SP-103
（南から）…… 102
写真170　00805（文京37次）調査Ⅴ区 SP-104土層
（北から）…… 102
写真171　00805（文京37次）調査Ⅴ区 SP-105土層
（北から）…… 102
写真172　00805（文京37次）調査Ⅴ区 SP-107土層
（北から）…… 103
写真173　00805（文京37次）調査Ⅴ区 SP-108土層
（北から）…… 103
写真174　00805（文京37次）調査Ⅴ区 SP-109土層
（北から）…… 103
写真175　00805（文京37次）調査Ⅴ-⑨・⑩区
Ⅳ層遺物出土状況（西から）…… 103
写真176　00805（文京37次）調査Ⅴ-⑤区
Ⅳ層遺物出土状況（北西から）…… 103
写真177　00805（文京37次）調査Ⅵ区完掘
（北東から）…… 103
写真178　00806調査北西部全景（南東から）…… 106
写真179　00806調査１トレンチ東壁土層
（西から）…… 106
写真180　00806調査２トレンチ東壁土層
（西から）…… 106
写真181　00806調査３トレンチ東壁土層
（西から）…… 106
写真182　00806調査４トレンチ東壁土層
（西から）…… 106
写真183　00806調査５トレンチ全景（南東から）… 107
写真184　00806調査５トレンチ西壁土層
（東から）…… 107
写真185　土器胎土分析における試料の処理過程… 124
写真186　文京遺跡33次における試料採取状況…… 126
写真187　文京遺跡21次調査のプラント・オパール
分析土器試料…… 134
写真188　文京遺跡21次調査 SK-401出土の試料
６から検出されたイネのプラント・オ
パール…… 136
写真189　文京遺跡31次調査で検出された風化を受
けたイネのプラント・オパール…… 139
写真190　文京遺跡00707調査６トレンチで検出さ
れた樹木由来のプラント・オパール…… 155

写真191　文京遺跡で検出されたプラント・オパール
…… 159

表目次

表1　2008年度の埋蔵文化財調査委員会と
埋蔵文化財調査室の体制 …… 1
表2　2008年度の埋蔵文化財調査依頼・照会一覧 …… 6
表3　2008年度発掘調査一覧 …… 8
表4　2008年度整理作業一覧 …… 8
表5　2008年度調査室・調査室資料利用一覧 …… 10
表6　調査室・調査室資料の利用推移と
調査・刊行物 …… 11
表7　00803（文京35次）調査出土遺構一覧 …… 33
表8　00804（文京36次）調査出土遺構一覧 …… 53
表9　00805（文京37次）調査出土遺構一覧 …… 86
表10　愛媛大学構内埋蔵文化財調査一覧 …… 116
表11　文京遺跡11次調査分析試料一覧およびプラ
ント・オパール定量分析結果 …… 132
表12　文京遺跡21次調査分析試料一覧およびプラ
ント・オパール定量分析結果 …… 136
表13　文京遺跡31次調査分析試料一覧およびプラ
ント・オパール定量分析結果 …… 140
表14　文京遺跡31次補足ボーリング調査分析試料
一覧およびプラント・オパール定量分析
結果 …… 142
表15　文京遺跡33次調査A～C地点分析試料一覧
およびプラント・オパール定量分析結果… 145
表16　文京遺跡33次調査D～F地点分析試料一覧
…… 146
表17　文京遺跡34次調査Ⅳ区分析試料一覧 …… 152
表18　文京遺跡00707調査6トレンチ分析試料一覧
およびプラント・オパール定量分析結果…… 154
表19　文京遺跡35次調査分析試料一覧およびプラ
ント・オパール定量分析結果 …… 156

資料目次

資料1　国立大学法人愛媛大学
埋蔵文化財調査委員会規程 …… 2
資料2　国立大学法人愛媛大学
埋蔵文化財調査室要項 …… 2

Ⅰ　2008年度の委員会と事業

1　埋蔵文化財調査委員会

埋蔵文化財調査室は、「国立大学法人愛媛大学埋蔵文化財調査委員会規定」（資料１）に基づき設置された埋蔵文化財調査委員会の下、業務を行っている。2008年度の埋蔵文化財調査委員会の体制は、表１のとおりである。2008年度の埋蔵文化財調査委員会は、2008年７月31日に第１回と、2009年３月４日に第２回が開催された。

(1) 第１回埋蔵文化財調査委員会

2008年７月31日開催の埋蔵文化財調査委員会では、まず施設企画課長から新委員が紹介され、委員長の挨拶の後、2007年度事業報告、2008年度予算・事業計画の変更、その他の議題が報告・審議された。

①　2007年度事業報告

2007年度の実施事業について、発掘調査、整理作業、発掘調査報告書等の執筆編集・印刷、利活用にかかわる業務の、各内容が田崎室長より報告され、2007年度会計報告が行われた。特に、当初計画していた「文京遺跡Ⅵ－文京遺跡25次調査－」の印刷・刊行が2008年度に繰り越されたことと、その作業進捗状況が報告された。以上の報告を承けて審議が行われ、2007年度の実施事業・会計報告が了承された。

②　2008年度予算・事業計画の変更について

引き続き田崎室長から、2008年度予算と事業計画の変更にかかわる報告がなされた。まず、発掘調査報告書等の印刷費として繰り越していた経費の一部を、城北団地共通教育管理棟改修工事に伴う調査(文京36次)と城北団地教育学部本館改修工事に伴う調査（文京37次）経費に充当すること、残額は『文京遺跡Ⅵ－文京遺跡25次調査－』の印刷費として確保すること、そして、調査経費に充当するため今年度計画していた樽味遺跡６～８次調査の正式報告書印刷は来年度以降に変更することである。以上を承けて審議がなされ、2008年度予算・事業計画の変更が了承された。

③　その他

田崎室長より、埋蔵文化財調査について、文化財保護法の抜粋が示され、法の趣旨について説明が行われた。その上で、平成10年文化庁次長通知（庁保記第75号）に基づいて、発掘調査経費負担に関する説明がなされた。また、７月26日（土）に開催された文京遺跡35次調査現地説明会について、資料に基づき説明が行われた。

(2) 第２回埋蔵文化財調査委員会

2009年３月４日開催の埋蔵文化財調査委員会では、2009年度事業計画、2009年度予算、その他の議題が報告・審議された。

表１　2008年度の埋蔵文化財調査委員会と埋蔵文化財調査室の体制

埋蔵文化財調査委員会			
役職	所属・役職	氏　名	備　考
委　員　長	副学長（総務担当）	亀井　崇	
委　員	法文学部長	森　孝明	
委　員	法文学部教授	田崎　博之	埋蔵文化財調査室長
委　員	法文学部教授	松原　弘宣	
委　員	教育学部長	藤　卓三	
委　員	教育学部教授	川岡　勉	
委　員	理学部長	野倉　嗣紀	
委　員	医学部長	大西　丘倫	
委　員	工学部長	井出　敏	
委　員	農学部長	泉　英二	
委　員	経営企画部長	板橋　俊夫	
委　員	財務部長	山村　滋	
委　員	施設基盤部長	岡信　孝則	

埋蔵文化財調査室		
役職	氏　名	所　属
室　長	田崎　博之	法文学部教授
調　査　員	吉田　広	法文学部准教授
調　査　員	三吉　秀充	法文学部助教
専　門　員	松原　弘宣	法文学部教授
専　門　員	村上　恭通	東アジア古代鉄文化研究センター教授
専　門　員	川岡　勉	教育学部教授
教務補佐員	宮﨑　直栄	施設基盤部施設企画課
事務補佐員	濱田　美加	施設基盤部施設企画課
技術補佐員	須之内慶子*	施設基盤部施設企画課
技術補佐員	井手野文江	施設基盤部施設企画課
	門田　都	施設基盤部施設企画課

*2008年８月まで

資料１　国立大学法人愛媛大学埋蔵文化財調査委員会規程

（設置）
第１条　国立大学法人愛媛大学（以下「法人」という。）に、国立大学法人愛媛大学埋蔵文化財調査委員会（以下「委員会」という。）を置く。
（任務）
第２条　委員会は、文化財保護法（昭和25年法律第214号）に基づき、法人の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する重要事項を調査審議する。
（組織）
第３条　委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。
(1) 学長が指名する理事、副学長又は学長特別補佐　１人
(2) 各学部長
(3) 発掘調査に関連のある専門分野の教員　若干人
(4) 事務局長
(5) 経営企画部長、財務部長及び施設基盤部長
２　前項第３号の委員は、学長が任命する。
３　第１項第３号の委員の任期は、２年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員を生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。
（委員長）
第４条　委員会に委員長を置き、前条第１項第１号の委員をもって充てる。
２　委員長は、委員会を招集し、その議長となる。
３　委員長に事故があるときは、あらかじめ委員長の指名する委員がその職務を代行する。
（委員以外の者の出席）
第５条　委員長が必要あると認めるときは、委員以外の者を出席させ、説明又は意見を聴くことができる。
（調査室）
第６条　委員会に、委員会が定める基本方針に基づき発掘調査を実施し、その結果について報告書を作成するため、埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く
２　調査室に関する要項は、委員会の議を経て、別に定める。
（事務）
第７条　委員会に関する事務は、施設基盤部施設企画課において処理する。
（雑則）
第８条　この規程の定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

附則　この規程は、平成21年４月１日から施行する。

資料２　国立大学法人愛媛大学埋蔵文化財調査室要項

第１　この要項は、国立大学法人愛媛大学埋蔵文化財調査委員会規程第６条第２項の規定に基づき、国立大学法人愛媛大学埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。
第２　調査室は、国立大学法人愛媛大学（以下「本学」という。）の敷地内の施設設備に伴う埋蔵文化財の調査研究に関する次の各号に掲げる業務を行う。
(1) 実施計画の立案及び実施に関すること。
(2) 遺物の整理及び保管に関すること。
(3) 報告書の作成に関すること。
(4) 出土埋蔵文化財及び調査成果の公開及び利活用に関すること。
(5) 本学の学生及び教員への実践的な教育及び研究の支援に関すること。
(6) その他必要な事項。
第３　調査室に、室長、調査員その他所要の職員を置く。
第４　調査室に、必要に応じて、埋蔵文化財の調査研究に関し、それぞれの専門分野から特別な知識及び技術について協力及び助言を得るため、専門員を置くことができる。
第５　室長、調査員及び専門員は、国立大学法人愛媛大学埋蔵文化財調査委員会（以下「委員会」という。）の議を経て、学長が任命する。
第６　室長、調査員及び専門員の任期は、委員会の議を経て、学長が定める。
第７　室長は、調査室に関する業務を掌理する。
２　調査員は、室長の指示の下、埋蔵文化財の調査研究に関する業務を行う。
第８　調査室に関する事務は、施設部において処理する。
第９　この事項に定めるもののほか、調査室の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

附則　この要項は、平成16年８月４日から施行する。

①　2009年度事業計画

田崎室長より、2009年度事業計画について、発掘調査、整理作業、報告書・年報作成にかかわる業務と、利活用・展示にかかわる業務に分けて報告された。その中で、発掘調査計画に含まれている課外活動施設整備について、設置位置が確定していない状況であることが施設基盤部長から示され、田崎室長からは早急なる確定が促された。以上を踏まえて審議が行われ、2009年度事業計画が了承された。

②　2009年度予算

田崎室長から、大学全体予算縮減に対応した2009年度予算案が提示され、審議の結果、了承された。

③　その他

田崎室長から，埋蔵文化財調査室調査員の吉田が、2009年４月１日付けで法文学部からミュージアムに配置換えになることについて説明があり、３月３日の役員会で了承された旨の補足があった。

続いて、2008年度埋蔵文化財調査経費（発掘調査経費）について、報告書刊行ほかに確保していた目的積立金、さらに発掘調査関連消耗品を埋蔵文化財調査室研究経費（運営経費）から支出して、発掘調査を実施したことが、田崎室長から報告された。その上で、次年度以降の発掘調査費用の確保が強く依頼された。

（吉田）

2　埋蔵文化財調査室の事業

埋蔵文化財調査室は、埋蔵文化財調査委員会の下、「国立大学法人愛媛大学埋蔵文化財調査室要項」（資料２）に従い、発掘調査の実施計画の立案および実施、出土資料の整理・保管、報告書の作成と調査成果の公開・利活用、本学における教育・研究の支援に関わる業務を行っている。2008年度の調査室の体制は、表１のとおりである。以下、2008年度の事業内容について報告する。

(1)　発掘調査

埋蔵文化財調査室では、愛媛大学構内における掘削を伴う工事について、施設基盤部を通じてすべて把握し、それぞれ対応を行うこととしている。毎年度当初と年度末前に、施設基盤部を通じて各部局に掘削工事の照会を行うのも、そのためである。集約された掘削工事計画に対しては、規模の大小にかかわらず、周辺既往調査成果から、それがない場合は試掘調査を実施して、工事内容による埋蔵文化財に対する影響を一つ一つ判断し、埋蔵文化財を極力保護すべく、工法変更等の調整を図ることもある。

このような工事計画との調整の後、周知の埋蔵文化財包蔵地、ならびにみなしの埋蔵文化財包蔵地においては、規模の大小にかかわらず、文化財保護法第93条に基づく土木工事届を60日前までに提出しており、その際に、埋蔵文化財への影響について埋蔵文化財室長名の意見書を添付している。そして、この土木工事届に対する通知に基づき、発掘調査・工事立会・慎重工事等の対応を行っている。

①　発掘調査の依頼

2008年度は、掘削を伴う工事27件について、埋蔵文化財に対する影響への確認と調査の依頼があり、試掘調査や既往調査成果から埋蔵文化財への影響をそれぞれ判断した。このうち、既設管路の再掘削や樹木移植を除き、周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事届は、再提出も含めて14件に及ぶ（表２）。

②　発掘調査

土木工事届を行った14件のうち５件について、発掘調査が必要との通知が愛媛県教育委員会より示され、追加１件を一連の調査とし、年度末の届出１件は2009年度の調査となったため、2008年度に実施した本格発掘調査は３件である。その他の９件は、工事立会あるいは慎重工事が通知され、既設管路の再掘削等で土木工事届に及ばなかった工事の一部も含めて、掘削工事に際して工事立会を適宜実施している（写真１～14）。他に、大規模工事の計画段階での試掘調査が２件、周知の埋蔵文化財包蔵地外にあたる城北団地事務局構内で立会調査１件を実施し、2008年度の発掘調査は都合６件となる（表３）。なお、大学構内における遺構の有無、分布状況を把握するための確認調査は、2008年度には実施していない。

(2)　整理作業

2008年度の、発掘調査報告書の刊行に向けた整理作業は、表４に示すとおりである。

写真１　教育学生支援部西側掲示板照明設備取設工事立会

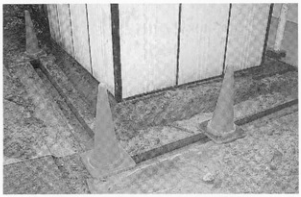


写真３　附属幼稚園園舎暖房設備取設工事立会

写真２　図書館周辺雨水管他修繕工事立会

写真４　教育学部本館西側埋設井水管修繕工事立会

写真５　（城北）教育系総合研究棟耐震改修その他工事立会

写真６　（樽味）総合研究棟Ⅱ期耐震改修電気設備工事立会（1）

写真７　（樽味）総合研究棟Ⅱ期耐震改修電気設備工事立会（2）

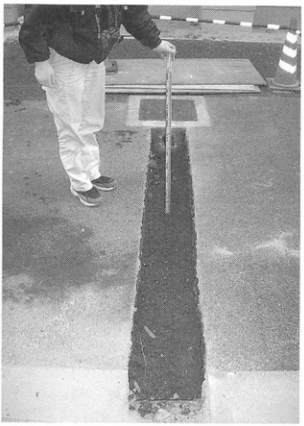


写真８　図書館北側掲示板排水設備取設工事立会

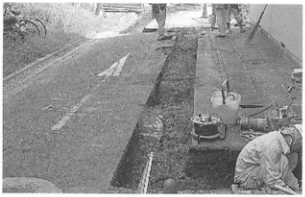


写真９　沿岸・GRC関連施設新営電気・機械設備工事立会

写真10　（柳味）総合研究棟Ⅱ期耐震改修機械設備工事立会

写真11　教育学部２号館西植え込み給水管修繕工事立会

写真12　（城北）総合教育研究棟Ⅱ期耐震改修その他工事立会

写真13　理学部温室跡整備工事立会

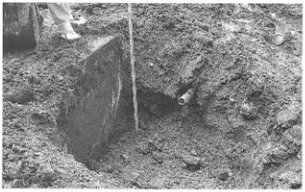


写真14　（城北）総合教育研究棟Ⅱ期耐震改修機械設備工事立会

表２　2008年度の埋蔵文化財調査依頼・照会一覧

依頼			対応					
日付	発	工事名	意見書・回答		土木工事届	調査		
2/19	施設基盤部長	愛媛大学（城北）沿岸・GRC関連施設新営工事	3/13	周辺の既往調査から埋蔵文化財に影響が及ぶと判断。	3/13	本格調査	6/2 ～ 8/12	—
5/7	施設基盤部長	愛媛大学（城北）総合研究棟（教育系）耐震改修その他工事	6/3	試掘調査（00801）を実施して、埋蔵文化財に影響が及ぶと判断。	6/9 8/29	本格調査	10/1 ～ 11/18	—
5/7	施設基盤部長	愛媛大学（城北）総合教育研究棟（Ⅱ期）耐震改修その他工事	6/3	試掘調査（00802）を実施して、埋蔵文化財に影響が及ぶと判断。	6/9	本格調査	9/1 ～ 2/16	—
6/3	施設基盤部長	城北団地教育学生支援部事務室西側掲示板照明設備取設工事	6/3	周辺の既往調査から、埋蔵文化財に影響が及ばないと判断。	6/9	工事立会	7/11	写真１
6/12	施設基盤部長	教育学部４号館周辺植栽工事	6/13	周辺の既往調査から、埋蔵文化財に影響が及ばないと判断。	—	慎重工事	—	—
7/1	施設基盤部長	工学部４号館周辺剪定他業務	7/1	周辺の既往調査から、埋蔵文化財に影響が及ばないと判断。	—	慎重工事	—	—
7/8	施設基盤部長	城北団地文京２番地区井水ポンプNo.1修繕工事	7/8	既設管路再掘削のため、埋蔵文化財に影響及ばないと判断。	—	慎重工事	—	—
7/8	農学部長	農学部会館前植栽工事	7/11	周辺の既往調査から、埋蔵文化財に影響が及ばないと判断。	—	慎重工事	—	—
7/15	施設基盤部長	城北団地図書館周辺雨水管他修繕工事	7/16	周辺の既往調査から、埋蔵文化財に影響が及ばないと判断。	7/22 8/8	工事立会	9/11	写真２
7/15	教育学部附属幼稚園長	附属幼稚園園舎暖房設備取設工事	7/17	周辺の既往調査から、埋蔵文化財に影響が及ばないと判断。	7/29	工事立会	1/8	写真３
7/28	施設基盤部長	愛媛大学（城北）総合教育研究棟（Ⅱ期）耐震改修電気設備工事	7/28	周辺の既往調査から、埋蔵文化財に影響が及ばないと判断。	8/1	慎重工事	—	—
8/5	施設基盤部長	教育学部本館西側埋設井水管修繕工事	8/5	既設管路再掘削のため、埋蔵文化財に影響及ばないと判断。	—	工事立会	8/6	写真４
8/8	施設基盤部長	愛媛大学（城北）総合研究棟（教育系）耐震改修その他工事	8/8	周辺の既往調査から、埋蔵文化財に影響が及ばないと判断。	8/18	工事立会	9/2	写真５
9/8	施設基盤部長	愛媛大学（樽味）総合研究棟（Ⅱ期）耐震改修電気設備工事	9/9	周辺の既往調査から、埋蔵文化財に影響が及ばないと判断。	9/17	工事立会	11/18	写真６・７
9/8	施設基盤部長	図書館北側掲示板排水設備取設工事	9/9	周辺の既往調査から、埋蔵文化財に影響が及ばないと判断。	9/17	工事立会	12/19	写真８
9/19	医学部長	㈶愛信会事務所新築工事	9/22	周辺の既往調査から、埋蔵文化財に影響及ばないと判断。	—	慎重工事	—	—
10/1	施設基盤部長	愛媛大学（城北）沿岸・ＧＲＣ関連施設新営電気設備工事・機械設備工事	10/10	周辺の既往調査から、建物余掘り内あるいは既往調査範囲内と判断。	—	工事立会	10/10	写真９
10/1	施設基盤部長	図書館南側ユリノキ根切り工事	10/2	掘削は盛土内に留まり、埋蔵文化財に影響及ばないと判断。	—	慎重工事	—	—
10/7	施設基盤部長	（城北）総合研究棟（教育系）耐震改修機械設備工事	10/8	既設管路再掘削のため、埋蔵文化財に影響及ばないと判断。	—	慎重工事	—	—
11/11	施設基盤部長	愛媛大学工学部１号館周辺植栽工事	11/11	既設植栽再掘削のため、埋蔵文化財に影響及ばないと判断。	—	慎重工事	—	—
11/17	施設基盤部長	（樽味）総合研究棟（Ⅱ期）耐震改修機械設備工事	12/5	既設管路再掘削のため、埋蔵文化財に影響及ばないと判断。	—	工事立会	12/5	写真10
12/2	施設基盤部長	愛媛大学山越グランド敷地内支線丸形ブロック取付工事	12/25	周辺の既往調査から、埋蔵文化財に影響が及ぶと判断。	—	工事中止	—	—
1/8	施設基盤部長	教育学部２号館西植え込み給水管修繕工事	1/8	既設管路再掘削のため、埋蔵文化財に影響及ばないと判断。	—	工事立会	1/8	写真11
1/13	施設基盤部長	愛媛大学（城北）総合教育研究棟（Ⅱ期）耐震改修その他工事（変更）	1/13	周辺の既往調査から、埋蔵文化財に影響が及ぶと判断。	1/19	本格調査	9/1 ～ 2/16	—
2/5	施設基盤部長	愛媛大学（城北）総合教育研究棟（Ⅱ期）耐震改修その他工事（樹木伐採）	2/12	周辺の既往調査から、埋蔵文化財に影響が及ばないと判断。	—	工事立会	2/13	写真12
2/8	施設基盤部長	愛媛大学理学部温室跡整備工事	2/9	周辺の既往調査から、埋蔵文化財に影響が及ばないと判断。	2/12	工事立会	3/23	写真13
2/18	施設基盤部長	工学部建設材料試験棟改修工事	9/19	周辺の既往調査から、埋蔵文化財に影響が及ぶと判断。	2/20	本格調査	4/2 ～ 4/15	—
2/25	施設基盤部長	愛媛大学（城北）総合教育研究棟（Ⅱ期）耐震改修機械設備工事	2/26	既設管路再掘削のため、埋蔵文化財に影響及ばないと判断。	—	工事立会	2/27	写真14

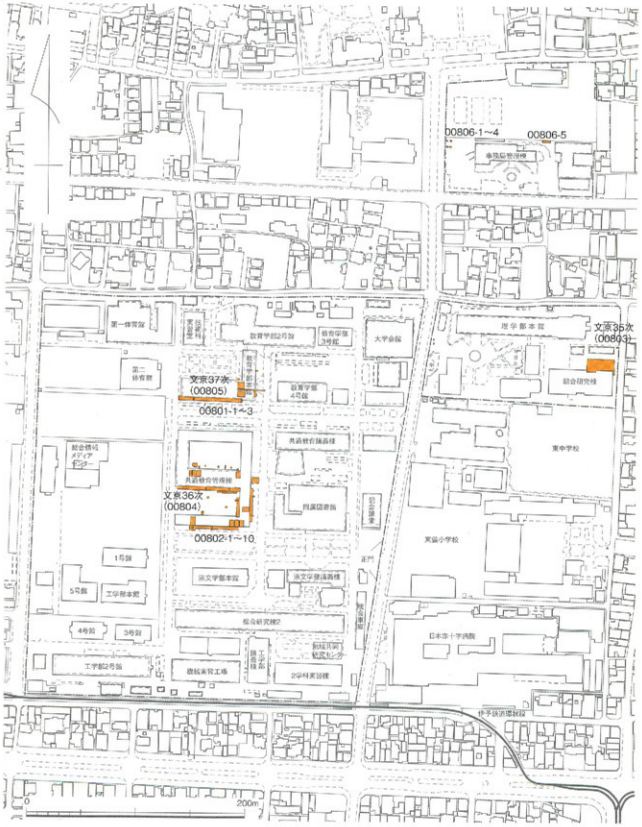


図1　城北団地2008年度調査地点位置図（縮尺 1/3,500）

表3　2008年度発掘調査一覧

調査番号	団　地	遺　跡	工　事　名	調査種別	調査担当	調査期間	調査面積	出土遺物
00801	城北	文京	(城北) 総合研究棟（教育系）耐震改修その他工事計画	試掘調査	吉田	5/12～5/13	6㎡	若干
00802	城北	文京	(城北) 総合教育研究棟（Ⅱ期）耐震改修その他工事計画	試掘調査	吉田	5/12～5/15	30.8㎡	若干
00803	城北	文京35次	(城北) 沿岸・GRC関連施設新営工事	本格調査	田崎・三吉	6/2～8/12	252㎡	5箱
00804	城北	文京36次	(城北) 総合教育研究棟（Ⅱ期）耐震改修その他工事	本格調査	吉田	9/1～2/16	687㎡	24箱
00805	城北	文京37次	(城北) 総合研究棟（教育系）耐震改修その他工事	本格調査	田崎・三吉	10/1～11/18	282.4㎡	5箱
00806	城北	文京	愛媛大学本部事業等取設工事に伴う調査	立会調査	三吉	11/27	19.7㎡	若干

表4　2008年度整理作業一覧

調査番号	団地	遺跡	次数	工　事　名	調査担当	調査期間	面　積	遺物
① 出土遺物の洗浄・注記・接合・復元作業　※34次調査は洗浄のみ								
00710	城北	文京遺跡	32次調査	附属図書館耐震改修その他工事	田崎	2007.8.1～8.21	23㎡	1箱
00711	城北	文京遺跡	33次調査	法文学部講義棟耐震改修その他工事	田崎	2007.8.20～10.24	161.5㎡	5箱
00712	城北	文京遺跡	34次調査	共通教育管理棟耐震改修その他工事	吉田・三吉	2007.8.20～2008.2.8	533.3㎡	12箱
－	城北	文京遺跡		2008年度実施小規模調査	吉田・三吉	――	51㎡	1箱
② 水洗土壌からの微細遺物選別作業								
00711	城北	文京遺跡	33次調査	法文学部講義棟耐震改修その他工事	田崎	2007.8.20～10.24	161.5㎡	――
③ 出土遺物の実測								
00201	樽味	樽味遺跡	7次調査	農学部２号館改修工事	田崎	2002.4.3～5.23	170㎡	30箱
00604	持田	持田団地構内	1次調査	教育学部附属中学校校舎新営工事	田崎・三吉	2006.8.23～9.29	292㎡	2箱
④ 図面整理・浄書作業								
00106	樽味	樽味遺跡	6次調査	農学部寄付建物新営工事	田崎	2001.11.15～2002.2.6	1,205㎡	5箱
00201	樽味	樽味遺跡	7次調査	農学部２号館改修工事	田崎	2002.4.3～5.23	170㎡	30箱
00608	樽味	樽味遺跡	8次調査	(樽味) 総合研究棟改修工事	田崎・三吉	2006.12.4～2007.1.26	42㎡	1箱
00604	持田	持田団地構内	1次調査	教育学部附属中学校校舎新営工事	田崎・三吉	2006.8.23～9.29	292㎡	2箱

まず、前年度実施の附属図書館耐震改修その他工事に伴う文京遺跡32次調査出土遺物と、法文学部講義棟耐震改修その他工事に伴う文京遺跡33次調査出土遺物の、洗浄・注記・接合・復元作業を行った。共通教育管理棟耐震改修その他工事に伴う文京遺跡34次調査出土遺物は、洗浄作業のみで注記・接合・復元の作業を次年度以降に持ち越している。さらに、2008年度実施小規模調査出土遺物の、洗浄・注記・接合・復元作業も行っている。法文学部講義棟耐震改修その他工事に伴う文京遺跡33次調査採取土壌については、水洗した土壌からの微細遺物選別作業を実施している。

出土遺物の実測作業は、2002年度実施の農学部２号館改修工事に伴う樽味遺跡７次調査出土遺物と、2006年度実施の教育学部附属中学校校舎新営工事に伴う持田団地構内遺跡１次調査出土遺物を行った。なお、計画されていた文京遺跡21次調査・24次調査出土遺物、さらには旧歴史学研究会保管資料の一部については、本格調査を連続して実施したため実測作業を行うことができず、次年度以降に持ち越すこととなった。

製図作業は、『樽味遺跡Ⅴ』として一括刊行を計画していた、2000年度実施の農学部寄附建物新営工事に伴う樽味遺跡６次調査、2002年度実施の農学部２号館改修工事に伴う樽味遺跡７次調査、2006年度実施の樽味団地総合研究棟改修工事に伴う樽味遺跡８次調査について実施し、教育学部附属中学校校舎新営工事に伴う持田団地構内遺跡１次調査については作成した。しかし、当初計画にあった文京遺跡21次調査・24次調査については、本格調査を連続して実施することとなったため、次年度以降に持ち越している。

(3) 印刷物の刊行

2008年度には、当初計画にそって、愛媛大学埋蔵文化財調査報告ⅩⅨとして、2007年度に実施した全面調査の概要報告と小規模調査の報告をとりまとめた『埋蔵文化財調査室年報－2007年度－』と、愛媛大学埋蔵文化財調査報告ⅩⅩとして、2002年度実施の城北団地

情報教育棟新営工事に伴う文京遺跡25次調査の正式調査報告書である『文京遺跡Ⅵ－文京遺跡25次調査－』を刊行した。

そして、2007年度刊行の『埋蔵文化財調査室年報－2006年度－』と2008年度刊行の『埋蔵文化財調査室年報－2007年度－』を、全国の大学・研究機関、文化庁、教育委員会・埋蔵文化財センター、博物館・資料館等へ発送した。

他方、2005年度に3回目の改訂増刷を行った広報パンフレット『発掘愛媛大学』が2008年度中に残部わずかとなり、2009年度新入生への配布が不足することとなった。そこで、2008年度に4回目の増刷（10,000部）を行い、年表などの一部改訂を行った。

(4) 広報、資料等の利活用

埋蔵文化財調査室では、これまで実施してきた構内遺跡調査の蓄積により、保管する出土資料および調査データは膨大な量に達している。これら資料を活用すべく、広報パンフレットを作成配布するとともに、Webによる情報発信などの広報活動に努め、埋蔵文化財調査室保管資料を用いた公開講座を企画・実施してもいる。さらに2008年度は、これまで学内外から強く求められてきた資料の公開施設について、愛媛大学ミュージアム設置計画として大きく進展した。年報や発掘報告書の刊行を順次進めていることもあって、埋蔵文化財調査室保管資料に対する利用希望は少なくなく、これらにも個別に積極的に応じている。

①　広報パンフレットの配布・改訂

既に述べたように、埋蔵文化財調査室では、広報パンフレットとして『発掘愛媛大学』を作成・配布している。2008年度の新入学生に対しては、入学関係資料への同封を各学部に依頼し、新任教職員に対しても、人事課を通じて新任教職員研修時に配布している。これらの総数は約2,300部に達する。また、インフォメーションセンターや広報室、各学部窓口等にも適宜配置を依頼している。そして、関連授業での配布についても、申し出に応じて必要部数を提供しているところである。

②　Webによる資料公開

埋蔵文化財調査室では、2004年度にホームページを開設し、発掘調査や広報活動の情報発信を行っている。2008年度には、発掘調査速報や公開講座関連情報を随時更新提供した。

③　公開講座の開催

2005年度以来開催してきた文京遺跡出土資料を用いた愛媛大学公開講座を、2008年度も開催した。『文京遺跡から学ぶ弥生時代（4）』であり、文京遺跡出土土器・石器を実際に手に取り詳細を観察することで、どのようなことが言えるのか、考古学者がどのように考えているのかを追体験できるような講座とした（写真15・16）。受講生には毎回質問用紙を配布し、各回の理解度を確認しながら講座を進めるとともに、最終講座においては、その質問をもとに討論を行った。開催日と各回の内容は以下のとおりである。

10月4日（土）
　三吉秀充　「土器は何を語るのか（1）」
10月11日（土）
　田崎博之　「土器は何を語るのか（2）」
10月18日（土）
　吉田　広　「石器は何を語るのか」

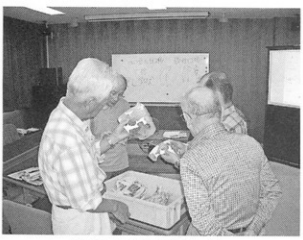


写真15　公開講座の様子（1）

写真16　公開講座の様子（2）

表5　2008年度調査室・調査室資料利用一覧

	日付	利用者	利用資料	目的	利用内容
1	4/11	大韓民国忠清文化財研究院	埋蔵文化財調査室刊行図書	研究	寄贈依頼
2	4/26	愛媛県松野町教育委員会・職員	埋蔵文化財調査室所蔵図書	研究	文献複写・閲覧
3	5/19	愛媛大学法文学部・教員	文京10次・24次出土銅鏡片	教育（教材）	借用
4	6/22	大分県教育庁埋蔵文化財センター・職員	埋蔵文化財調査室刊行図書	研究	文献希望
5	6/63	熊本大学文学研究科・大学院生	文京10次・24次出土銅鏡片	研究	熟覧・写真撮影
6	6/26	愛媛大学沿岸環境科学研究センター・教員	埋蔵文化財調査室所蔵図書（文京遺跡気候関連文献）	研究	送付依頼
7	7/4	愛媛大学法文学研究科・大学院生	埋蔵文化財調査室所蔵図書	研究	借用
8	7/8	愛媛県埋蔵文化財調査センター	文京10次・24次出土銅鏡片写真	掲示・印刷物への掲載	転載
9	7/22	愛媛大学法文学部同窓会事務局・職員	旧歴史学研究会保管資料	会誌掲載	写真撮影
10	7/28	愛光学園・教員	文京遺跡35次調査報告資料	研究	文献希望
11	7/30	愛媛大学法文学部・教員	旧歴史学研究会保管資料・文京遺跡出土石器	教育（教材）	借用
12	8/8	愛媛新聞社・記者	文京遺跡21次調査写真	印刷物等への掲載	借用
13	8/19	岡山市在住・個人	文京遺跡35次調査現説資料	研究	送付依頼
14	8/27	愛媛大学法文学研究科・大学院生	埋蔵文化財調査室所蔵図書	修士論文作成	文献複写・閲覧
15	8/29	松山市考古館・学芸員	文京10次出土銅鏡片ほか	展示	借用
16	10/22	愛媛大学理工学研究科・教員	文京14次調査全景写真	学術誌掲載	提供
17	10/10	愛媛大学法文学部・教員	文京10次・14次出土弥生土器・石器	教育（教材）	借用
18	10/17	愛媛大学法文学部・教員	文京14次・20次出土石器	教育（教材）	借用
19	11/18	鹿児島大学法文学研究科・大学院生	文京16次出土弥生土器	研究	熟覧・写真撮影
20	11/21	福岡市埋蔵文化財センター・職員	埋蔵文化財調査室所蔵図書	研究	文献送付
21	11/25	愛媛大学法文学部・教員	文京10次出土弥生土器ほか	教育（教材）	借用
22	11/27	滋賀県立安土城考古博物館・学芸員	文京遺跡シンポジウム資料	研究	文献送付
23	12/2	愛媛大学法文学部・教員	旧歴史学研究会保管資料（須恵器）	教育（教材）	借用
24	12/9	愛媛大学法文学研究科・大学院生	埋蔵文化財調査室所蔵図書	研究	借用
25	12/9	愛媛大学法文学部・教員	旧歴史学研究会保管資料（須恵器）	教育（教材）	借用
26	12/17	山口県立博物館・学芸員	埋蔵文化財調査室所蔵図書	研究	複写・送付
27	12/17	西条市教育委員会・職員	文京16次出土古代須恵器	研究	熟覧・写真撮影
28	10/22	滋賀県立安土城考古博物館・学芸員	文京12次・23次出土弥生土器ほか	展示	熟覧・写真撮影
29	1/7	愛媛大学法文学部・学生	埋蔵文化財調査室所蔵図書	研究	借用
30	1/19	愛媛大学歴史学研究会・ＯＢ	旧歴史学研究会保管資料	研究	熟覧
31	1/20	愛媛大学法文学部・教員	文京12次・16Ａ次出土石錐	教育（教材）	借用
32	1/27	鹿児島県立埋蔵文化財センター・職員３名	文京遺跡出土弥生土器（衝九州系合）	研究	熟覧
33	1/26	愛媛大学法文学部・教員	文京12次・14次・16Ａ次石器ほか	教育（教材）	借用
34	2/6	愛媛県松野町教育委員会・職員	『椿味Ⅳ』・『年報1999・2000』	研究	文献複写・閲覧
35	2/8	山口県立博物館・学芸員	文京遺跡13・25次調査土製支脚	研究	文献複写・閲覧
36	2/12	京都大学文化財総合研究センター・教員	文京遺跡調査写真	研究	熟覧
37	2/25	（株）ジャパン通信情報センター	文京遺跡21次調査成果	印刷物等への掲載	送付依頼
38	3/4	滋賀県立大学人間文化学部・教員	埋蔵文化財調査室所蔵図書	研究	送付依頼
39	3/8	北九州芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室・職員	埋蔵文化財調査室所蔵図書	研究	送付依頼
40	3/10	滋賀県立安土城考古博物館		展示	提供
41	3/18	愛媛大学法文学部・学生	埋蔵文化財調査室刊行図書	研究	文献寄贈
42	3/18	愛媛大学法文学部・学生	埋蔵文化財調査室刊行図書	研究	文献寄贈
43	3/18	愛媛大学法文学研究科・大学院生	埋蔵文化財調査室刊行図書	研究	文献寄贈
44	3/18	愛媛大学法文学部・学生	埋蔵文化財調査室刊行図書	研究	文献寄贈
45	3/18	愛媛大学法文学部・学生	埋蔵文化財調査室刊行図書	研究	文献寄贈
46	3/19	奈良県立橿原考古学研究所・職員	文京10次・24次出土銅鏡片ほか	研究	熟覧・写真撮影
47	3/19	愛媛県埋蔵文化財調査センター・職員	文京10次・24次出土銅鏡片ほか	研究	熟覧・写真撮影

表6　調査室・調査室資料の利用推移と調査・刊行物

年度	学内 教員	学内 学生	学外	総数	調査	刊行物
1998	−	−	25	25	文京18次、柳味5次	『発掘愛媛大学』、『文京シンポ』
1999	3	0	17	20	文京19次、文京20次	
2000	4	14	6	24	文京21次	『年報1995・1996年度』
2001	3	2	17	22	文京23次、文京24次、柳味6次	『年報1997・1998年度』
2002	7	2	12	21	柳味7次、文京25次、文京26次	『柳味Ⅳ』、『年報1999・2000年度』
2003	11	3	28	42	文京27次、文京28次	『文京Ⅲ』、『年報2001・2002年度』
2004	13	5	40	58		『文京Ⅳ』、『年報2003年度』
2005	18	10	31	59		『年報2004年度』
2006	17	5	56	78	持田1次、柳味8次、文京30次、文京31次	
2007	9	13	40	62	持田2次、文京32次、文京33次、文京34次	『文京Ⅴ』、『年報2005年度』、『年報2006年度』
2008	12	9	26	47	文京35次、文京36次、文京37次	『文京Ⅵ』、『年報2007年度』

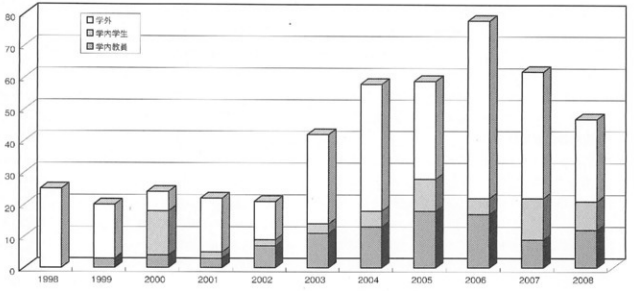


図2　調査室・調査室資料の利用推移

10月25日（土）

田崎博之・吉田広・三吉秀充　「討論」

そして、年度末には最終回を中心とした公開講座記録集として、『文京遺跡から学ぶ弥生時代（4）』を作成し、受講生ならびに関係諸氏・機関に配布した。受講生からは、このような講座の継続的開催が強く要望されている。

④　愛媛大学ミュージアム設置準備

愛媛大学では、2007年2月に愛媛大学ユニバーシティー・ミュージアム設置準備ワーキング・グループを役員会の元に設置し、博物館設置に向けての検討を開始した。埋蔵文化財調査室からは田崎が参加し、2007年10月役員会に、検討結果を「愛媛大学ユニバーシティー・ミュージアム（仮称）設置の基本方針」として提出した。これを承けて、11月の教育研究評議会で愛媛大学ユニバーシティー・ミュージアム（仮称）設置準備委員会要項が制定され、委員会が組織された。埋蔵文化財調査室からは、引き続き田崎が委員に加わった。

2008年度には、展示ゾーンの配置・概要、さらにオープンを2009年度中とすることが固まり、具体的な展示計画を進めるために、委員会の下に部門（ゾーン）別作業部会が設置された。埋蔵文化財調査室関連資料は、「人間の営み」ゾーンを東アジア古代鉄文化研究センターと構成することとなり、この作業部会メンバーとして埋蔵文化財調査室から吉田と、東アジア古代鉄文化研究センターの佐々木正治助教が加わった。

2008年上半期には、この「人間の営み」ゾーンの作業部会において、展示基本計画の立案を進め、準備委員会に2008年9月に部会案を提出した。下半期には各

部会案の具体化・調整が図られ、2009年２月にミュージアム全体の展示構成計画が確定した。この間、展示ケース仕様やパネル数などの具体的調整を行いつつ、展示資料選定の台帳となる資料カード作成を急いだ。すなわち、土器は展示に適した完形に近いものや破片でも絵画土器や外来系などを対象とした。石器は既に個別調査ごとに選別分置していた中から、やはり製品としての形や製作・使用の痕跡が明確なものを選択した。さらに、青銅器や玉類、分銅形土製品などの貴重品あるいは特殊品は大小を問わずである。これら１点１点について写真撮影を行い、サイズや特徴、保管場所等を確認・注記してカード化していったのである。当然、このような作業は埋蔵文化財調査室において行わなければならず、吉田を中心に作業を進めたが、写真撮影や写真データ管理等にあたっては、調査室各員の協力を得た。それでも、2008年度中にはカード化を完了できず、2009年度に持ち越すこととなった。

⑤　資料等の利用状況

学内外から、埋蔵文化財調査室保管資料および埋蔵文化財調査室利用要望は少なくなく、これらの要望には個々適宜対応している。2008年度は47件を数える（表５）。

学内からは、教材資料としての利用・借用、卒業論文作成等にかかわる学生の利用などで21件にのぼる。うち12件が教職員によるものであるが、法文学部などの考古学関連教員だけでなく、沿岸環境科学研究センターや理工学研究科教員の利用もみられた。学外からは26件の依頼があり、うち県内が７件、県外が19件（海外１件含む）である。県内を中心とした卒業生による研究用の資料利用、他機関および研究者の研究資料としての調査依頼、出版社からの資料掲載依頼、さらには一般個人からの資料送付依頼等である。特別展出展等については、滋賀県立安土考古博物館が、平成21年度春季特別展として企画した「大型建物から見えてくるもの－弥生時代のまつりと社会－」に伴った、遺物あるいは写真などのデータの貸し出しに関わるものが、まとまった事案であった。この他、旧歴史学研究会保管資料について、大学各学部の同窓会を通じて、埋蔵文化財調査室に移管した旨の告知を行ったところ、同研究会ＯＢからの連絡・見学が早速あったことも特筆できる。

以上のような埋蔵文化財調査室保管資料および埋蔵文化財調査室利用件数は、統計を取り始めた1998年度以降2004年度まで増加傾向にあり、以後は年間50～60件で推移していた。2008年度は若干落ち込んだことになるが（表６・図２）、この減少は、学内からの利用はほぼ横這いで、学外利用の減に起因している。今後は学外からの利用をも促すような調査成果の公開が求められ、2009年度にオープンした大学ミュージアムからの情報発信が、大きな意味を持つことになる。

（吉田）

Ⅱ　2008年度の発掘調査

00801　城北団地総合研究棟（教育系）耐震改修その他工事計画に伴う調査

調査地点　松山市文京町３番
　　愛媛大学城北団地
調査面積　6.0㎡
調査期間　2008年５月12日・13日
調査種別　試掘調査
調査担当　吉田広
調査補助　宮崎直栄・濱田美加
依頼文書　施設基盤部長発事務連絡
　　（平成20年５月７日付）

1　調査にいたる経緯

数年来の耐震補強工事計画を進める中で、今年度は教育学部本館と共通教育管理棟南側の工事が行われることとなった。具体的設計が進み、掘削工事範囲・深度に関するデータが埋蔵文化財調査室に提示された。教育系総合研究棟（現教育学部本館）については、耐震補強基礎工事を南棟南側と東棟東側に設置し、これに伴って設備配管改修や環境整備等を行うといった内容で、詳細は以下の通りである。

耐震補強基礎工事は、掘削深度210cmに及び、南棟

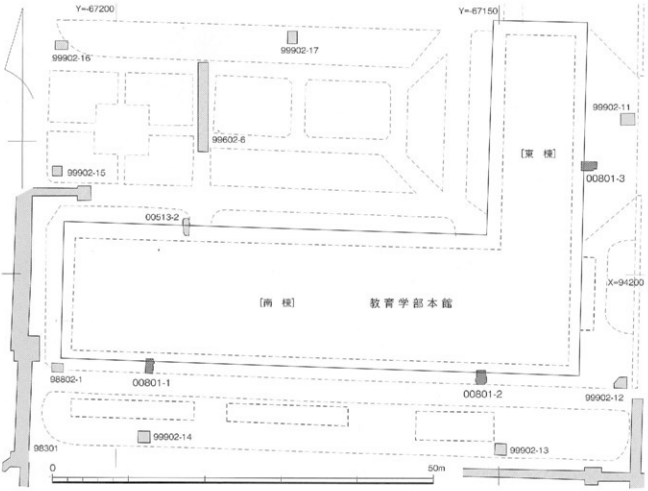


図３　00801調査地点位置図（縮尺1/500）

南側（外壁から3.1m幅で長さ60.3m）、東棟東側（外壁から3.0m幅で長さ24.65m）の２箇所。掘削深度120cmに及ぶ建物内ピットは、南棟西部と南棟東部の２箇所がある。これに、階段基礎工事（掘削深度60cm）、舗装工事（掘削深度25cm）、アース埋設工事（掘削深度170cm）、電気引込電線管路布設工事（掘削深度120cm）、排水管布設工事（掘削深度60cm）、ガス管布設工事（掘削深度80cm）である。

周辺既往調査（99602-6、99902-11 ～ 17、00513-2等）で埋蔵文化財の存在は確認されているものの、建物際の詳細確認は十分でない。そこで、現教育学部本館建築時の余掘り範囲を特定し、埋蔵文化財の具体的状況の詳細を確認するために、試掘調査を実施することとした。

2　調査の記録

調査地点は３箇所。南棟南側は建築が２箇年度に渡るため、それぞれの建築年度に１箇所ずつ設定し、西側を１トレンチ、東側を２トレンチとした。東棟東側は１箇所で、３トレンチである（図３）。

(1)　１トレンチ（図４、写真17・18）

現教育学部本館南棟の西側から２スパン目中央南壁際に設定したトレンチ。建物際側溝と植栽縁石の間にちょうど収まり、東西幅約1.0m・南北長1.9mを測る。

管路等による攪乱はほとんどなく、北半に余掘りによるとみられる攪乱が認められた。城北団地基本層序Ⅳ層を大きなブロック状に多数含み、Ⅳ層まで達する攪乱埋め戻しである。最下部で建物外壁から南に約1.5mまでの範囲に及ぶ。ただしその深さは現地表下（側溝縁石基準）約135cmまでで、以下には攪乱が及んでいない。この攪乱の南側で、表土層であるⅠ層の下、城北団地基本層序のⅡ層、流路内堆積、そしてⅣ層を確認した。

Ⅱ層は現地表下約70cmで現れ、４層に分層できる。Ⅱ-①層は褐色砂質土で、１～２㎜大のやや角のある砂礫をやや多く含む。Ⅱ-②層はⅡ-①層よりやや大きめの砂礫を多く含む褐色砂質土。Ⅱ-③層は黄褐色砂質シルト質土。１～３㎜大の角のある砂礫をやや多く含み、粘性がややある。Ⅱ-②層を覆土とする水田耕作土とみられる。Ⅱ-④層はⅡ-③層の床土部。オリーブ褐色粘質土で、10㎜大の砂礫を多く含む。鉄分が全体に沈着して、しまりがある。

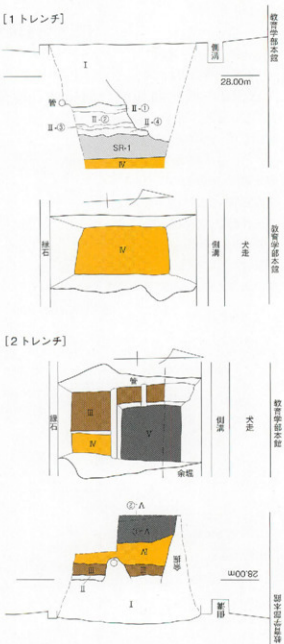


図４　00801調査１・２トレンチ実測図（縮尺1/50）

Ⅱ層の下、現地表下約120cm、標高約27.25mで流路内堆積となる。SR-1とした。埋土は厚さ30cm前後。オリーブ褐色砂質土で、上部のⅡ層より灰色みが強く、10㎜以下の砂粒・砂礫を多く含む。

SR-1の下は、Ⅳ層が現れる。標高26.90 ～ 26.95mとほぼ水平ながら、わずかに南下がりである。Ⅳ層はやや砂質を含む黄褐色シルト。

１トレンチからは、弥生土器底部片と中世土師器小

片が攪乱から出土している。

(2) 2トレンチ（図4、写真19・20）

現教育学部本館南棟の東側から2スパン目中央南壁際に設定したトレンチ。建物際側溝と植栽縁石の間にちょうど収まり、東西幅約1.1m・南北長約1.9mを測る。

トレンチ中央部に、建物外壁に平行して管路が現れたため、それ以北を深掘りして、建物余掘り等の確認を行った。結果、余掘りは外壁から約1.3m、現地表下135cmまでは及んでいることが確認できた。そして、余掘り以南では、城北団地基本層序のⅡ層以下、Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅴ層を確認した。

Ⅱ層は、現地表下約50cmで出土した。暗灰黄色粘質シルトで、1㎜大の砂粒を少し、10㎜大の角のある炭化物を少し含み、しまりがある。

Ⅱ層の下、現地表下約55cm、標高27.95mでⅢ層となる。5～30㎜大の砂礫をやや多く含んだ黒褐色砂質土で、しまりは弱い。層厚は15cm前後。東壁際のⅢ層を断ち割った際に土器片数点が出土し、高台状の上げ底部の縄文土器片が含まれる。

Ⅲ層の下、標高約27.80mでⅣ層となる。Ⅳ層は黄色みを帯びた褐色砂質土。2～3cm大の砂礫をごく少量含み、砂質が強く、しまりが弱い。30～40cmと北側に深い堆積で、以下はⅤ層となる。

Ⅴ層上部のⅤ-1層は、1～6cm大の砂礫を多く含んだ灰色砂礫。下部に、にぶい黄褐色砂のⅤ-2層が一部認められる。いずれも北下がりの堆積である。

(3) 3トレンチ（図5、写真21・22）

現教育学部本館東棟の北側から4スパン目中央東壁際に設定したトレンチ。西辺を建物側溝とする、南北幅約1.1m・東西長約2.0mで、植栽芝生内に位置する。

建物外壁に平行して埋設された管路2本が出土したものの、その間で城北団地基本層序のⅡ層以下、Ⅲ層、Ⅳ層を確認した。また、建物建築に伴う余掘りは、ちょうどトレンチ西壁が相当する。外壁から1.1mの位置、現地表から100cmまでは及んでいることになる。

Ⅱ層は、現地表下約20cmで出土し、5層に分層できる。Ⅱ-①層はオリーブ褐色砂質土。角の取れた3～5㎜大の砂礫を多く含む。Ⅱ-②層は東端部でわずかに確認した。1～2㎜大の砂粒を少し含むオリーブ褐色砂質土。Ⅱ-③層は、1～3㎜大の砂粒・砂礫を少し含み、粘性のややあるオリーブ褐色砂質土。黄色みが強い。Ⅱ-④層は西に偏る。1～3㎜大の砂粒・砂礫を多く含んだ暗灰黄色砂質土。Ⅱ-⑤層は、黄色みと灰色みの強い黄褐色砂質土。1～3㎜大の砂粒・砂礫を多く、5㎜大の砂礫をごく少量含む。

Ⅱ層の下、現地表下約60cm、標高27.80mで、トレンチ内全面にⅢ層が出土した。北壁際を断ち割り、Ⅲ層の堆積状況を確認したところ、層厚は30～40cmに及ぶ。Ⅲ層は黒褐色砂質土で、1～3㎜大の砂粒・砂礫をかなり多く含み、さらに1～5cm大の砂礫も多く含む、かなり砂礫質の強い土層である。Ⅲ層からは、土師器小片が数点出土した。

Ⅲ層の下は、やや砂質が強く白っぽいⅣ層となるが、上面は西下がりの傾斜がみられる。

なお、攪乱掘り下げ時にも、弥生土器・土師器の小片が出土している。

［3トレンチ］

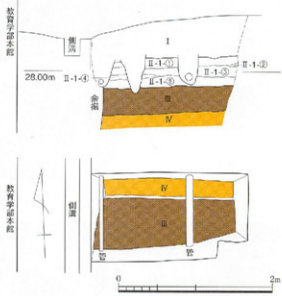


図5　00801調査3トレンチ実測図（縮尺1/50）

3　工事による埋蔵文化財への影響

調査段階での所見を承けて、施設基盤部において一部工法変更等の措置が講じられ、改めて工事内容が埋蔵文化財調査室に示された。それら各計画工事に伴う埋蔵文化財への影響について、今回の調査成果と既往の調査成果から、以下の通り判断する（図6）。

①-1　建物内ピット工事（東部）

2トレンチで余掘りを確認しているが、建物内部

写真17　00801調査1トレンチ遠景（南東から）

写真18　00801調査1トレンチ（南東から）

写真19　00801調査2トレンチ遠景（南西から）

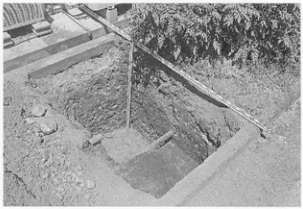


写真20　00801調査2トレンチ（南西から）

写真21　00801調査3トレンチ遠景（東から）

写真22　00801調査3トレンチ（南東から）

の状況は未確認で、2007年度の文京遺跡34次調査の共通教育管理棟においては、建物内側にも埋蔵文化財が残っていた。2トレンチでは、現地表下55cmで茶生時代から古墳時代の遺物包含層が出土している。深度120cmの掘削では埋蔵文化財に影響が及び、調査が必要となる。

①-2　建物内ピット工事（西部）

1トレンチおよび00513-2調査で余掘りを確認しているが、建物内部の状況は未確認で、2007年度の文京遺跡34次調査の共通教育管理棟においては、建物内側にも埋蔵文化財が残っていた。00513-2調査では、現地表下75cmで遺物包含層が出土している。深度120cmの掘削では埋蔵文化財に影響が及び、調査が必要となる。

②　耐震補強基礎工事

1・2トレンチで余掘りを確認しているが、前者で

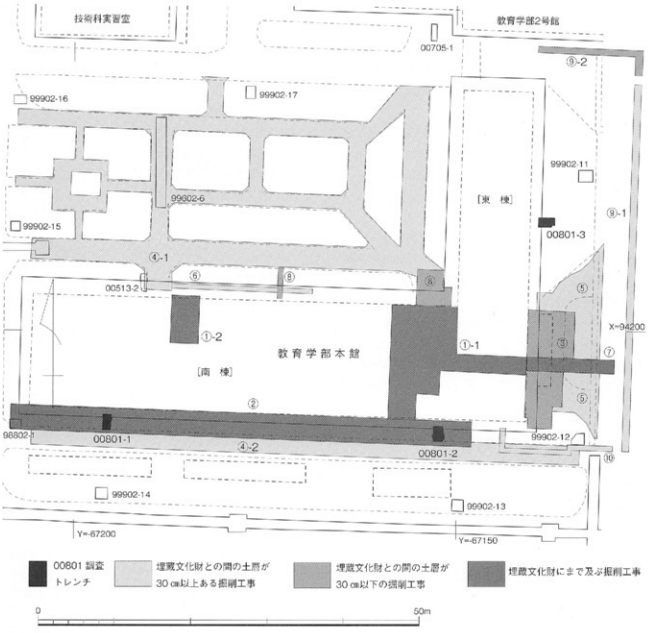


図6　計画工事による埋蔵文化財への影響（縮尺1/500）

は現地表下135cm以下には及んでいない。1トレンチでは、現地表下120cmで中世以前とみられる自然流路が出土し、2トレンチでは、現地表下55cmで弥生時代から古墳時代の遺物包含層が出土している。したがって、深度210cmの掘削では埋蔵文化財に影響が及び、調査が必要である。

③　階段基礎工事

3トレンチでは、現地表下60cmで弥生時代から古墳時代の遺物包含層が出土している。深度50cmの掘削では、埋蔵文化財との間に10cmの土層が確保される。

④-1　舗装工事（北庭部）

99902-15～17調査で、弥生時代から古墳時代の遺物包含層あるいは自然流路が、現地表下140cmで出土している。深度25cmの掘削では、埋蔵文化財との間に115cmの土層が確保される。

④-2　舗装工事（南側）

1トレンチでは、現地表下120cmで中世以前とみられる自然流路が出土し、2トレンチでは、現地表下55cmで弥生時代から古墳時代の遺物包含層が出土している。深度25cmの掘削では、埋蔵文化財との間に30～

105cmの土層が確保される。

⑤ 舗装工事（玄関部）

3トレンチでは、現地表下60cmで弥生時代から古墳時代の遺物包含層が出土している。深度15cmの掘削では、埋蔵文化財との間に45cmの土層が確保される。

⑥ 接地極埋設工事

00513-2調査では、外壁から2mの位置に余掘りを確認するとともに、現地表下75cmで遺物包含層が出土している。掘削工事は、外壁から1.45m以内であり、埋蔵文化財には影響ないと判断できる。

⑦ 電気引込工事

3トレンチでは、現地表下60cmで弥生時代から古墳時代の遺物包含層が出土している。深度120cmの掘削では、埋蔵文化財に影響が及び、調査が必要である。

⑧ 排水管埋設工事

3トレンチでは、現地表下60cmで弥生時代から古墳時代の遺物包含層が出土し、00513-2調査では、現地表下75cmで遺物包含層が出土している。深度60cmの掘削では、埋蔵文化財との間に0～15cmの土層が確保される。

⑨-1 ガス管埋設工事（東側）

00707-6調査で、共同溝の余掘りが共同溝外壁から75cmに及ぶことを確認している。掘削位置は既設共同溝外壁から60cmの範囲で、埋蔵文化財には影響ないと判断できる。

⑨-2 ガス管埋設工事（北側）

00705-1調査で、現地表下105cmで弥生時代から古墳時代の遺物包含層が出土している。深度80cmの掘削では、埋蔵文化財との間に25cmの土層が確保される。

⑩ ガス管埋設工事（南側）

既設管路の再掘削及び埋設であり、埋蔵文化財には影響が及ばないと判断される。

4 調査後の対応

以上の調査成果と工事による埋蔵文化財への影響を、6月3日付で施設基整部へ報告するとともに、同報告を資料とした、工事による埋蔵文化財への影響をまとめた愛媛県教育委員会教育長宛の意見書を、6月9日付提出の土木工事届に添付した。

（吉田）

00802 城北団地総合教育研究棟（Ⅱ期）耐震改修その他工事計画に伴う調査

調査地点　松山市文京町3番
　　愛媛大学城北団地
調査面積　30.8㎡
調査期間　2008年5月5月12日～15日
調査種別　試掘調査
調査担当　吉田広
調査補助　宮崎直栄・濱田美加
依頼文書　施設基整部長発事務連絡
　　（平成20年5月7日付）

1 調査にいたる経緯

数年来の耐震補強工事計画において、今年度は教育学部本館と共通教育管理棟南側の工事が行われることとなった。具体的設計が進み、掘削工事範囲・深度に関するデータが埋蔵文化財調査室に提示された。総合教育研究棟（現共通教育管理棟）Ⅱ期工事では、耐震補強基礎工事を中央棟南側、南棟南側、そして東棟南部東西両側に設置し、これに伴って設備配管改修や環境整備等を行うとするもので、詳細は以下の通り。

耐震補強基礎工事は掘削深度110cmに及び、中央棟南側（外壁から3.4m幅で長さ58m）、東棟南部東側（外壁から2.6m幅で長さ30.4m）、東棟南部西側（外壁から3.3m幅で長さ18m）、そして南棟南側（外壁から2.7mで長さ39.2m）の4箇所である。また、掘削深度120cmに及ぶ建物内ピットが、中央棟西部（6.0m×13.5m）、中央棟東部（6.0m×4.5m）、東棟南部（6.5m×4.5m）、南棟東部（6.5m×13.5m）、南棟西部（9.0m×4.5m）の5箇所ある。さらに、車寄屋根基礎工事（掘削深度100cm）、シェルター基礎工事（掘削深度100cm）、擁壁工事（掘削深度55cm）、検水槽工事（掘削深度250cm）、排水管布設工事（掘削深度60cm）、排水桝接地工事（掘削深度100cm）、南中庭外灯基礎工事（掘削深度90cm）、投光器基礎工事（掘削深度10cm）、庭園灯基礎工事（掘削深度55cm）、北中庭外灯基礎工事（掘削深度130cm）、電線管路布設工事（掘削深度40cm）、電気引込部電線管路布設工事（掘削深度50cm）、舗装工事（掘削深度25cm）、芝張り工事（掘削深度10cm）、樹木植栽（高木）工事（掘削深度200cm）、樹木

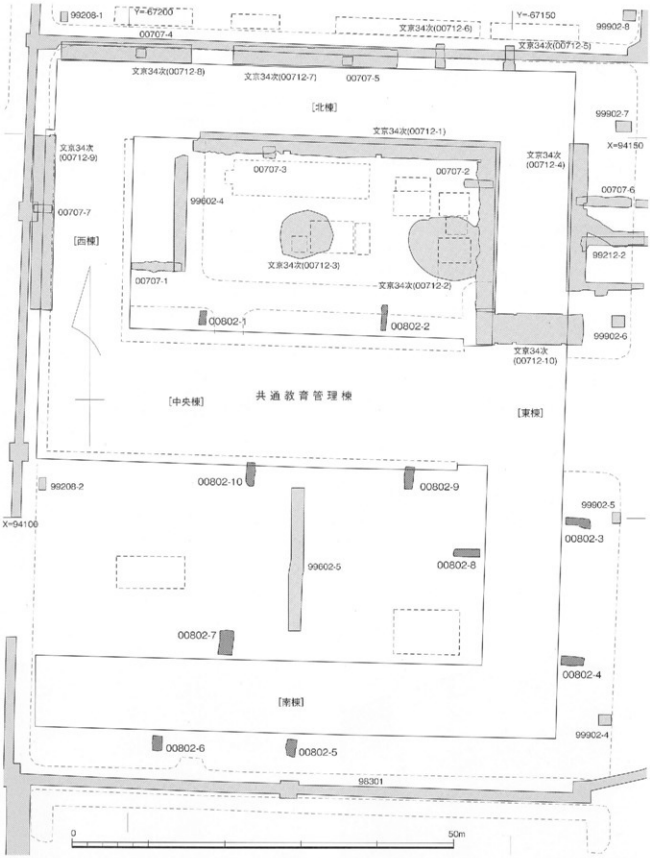


図7　00802調査地点位置図（縮尺1/500）

植栽（低木）工事（掘削深度100cm）である。

周辺での既往調査（99602-5、99902-1～5等）から埋蔵文化財の存在は確認されているものの、建物際の詳細確認は十分でない。昨年度に調査を行った、北側でのⅠ期工事に伴う文京遺跡34次調査（調査番号：00712）では、建物余掘りが柱基礎部分以外ほとんどなく、遺物内部ですら撹乱が及んでいないことが判明した。そこで、共通教育管理棟南部の建築時余掘り範囲を特定し、埋蔵文化財の具体的状況の詳細を確認するために、試掘調査を実施することとした。

2　調査の記録

現共通教育管理棟は、西棟を除くⅠ期工事部分が1952年度から1954年度にかけての建築で、今回の耐震補強範囲の東棟南部と南棟は、それに続いた1955年度から1958年度にかけての建築による。そして、中央棟はやや新しく1965年度建築である。このように、複数年度に渡って増築を繰り返しており、増築単位毎に余掘り範囲を特定する必要がある。中庭側には、現状で調査不可能な範囲も少なくなかったが、可能な限り調査区を設定し、10箇所に達した（図7）。

(1) 1トレンチ（図8、写真23・24）

共通教育管理棟北側中庭、南西部出入り口横西側に位置する、中央棟北側の余掘り範囲特定を目的に設定したトレンチである。建物際側溝に接して、東西幅0.8m・南北長1.8mを測る。

側溝から約1mの位置に管路がほぼ表土直下で現

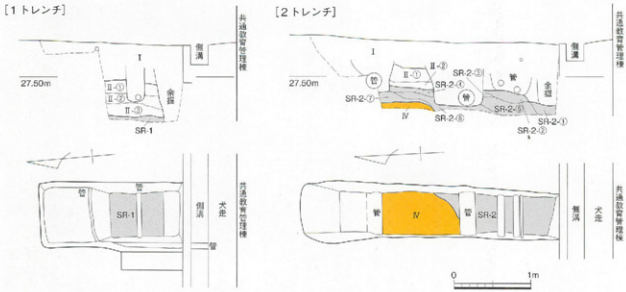


図8　00802調査1・2トレンチ実測図（縮尺1/50）

写真23　00802調査1トレンチ遠景（北西から）

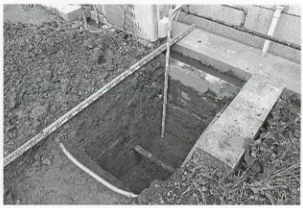


写真24　00802調査1トレンチ（北西から）

れ、さらに現地表下約60cmに別の管路が出土し、掘り下げ範囲はかなり限られる。その中で、城北団地基本層序のⅡ層と流路内堆積を確認した。また、建物外壁から0.95mの位置に、外壁と平行した撹乱が掘削底面で認められ、これが建物余掘りによるものと判断した。

現地表下約45cmでⅡ層となり、Ⅱ層は3分できる。上から、Ⅱ-①層は1～3㎜大の砂粒・砂礫を少量含んだオリーブ褐色砂質土。Ⅱ-②層は、Ⅱ-①層よりやや黄色みが強く粘性のあるオリーブ褐色砂質土。Ⅱ-①層の床土部分。Ⅱ-③層は、2㎜前後の砂礫を多く含むオリーブ褐色砂質土。以上のⅡ層は、土質および周辺の調査成果から、近世以降城北団地造成直前までの水田関連土層であるⅡ-1層とみられる。

これらの下、現地表下約90cm・標高27.00mで、流路内堆積SR-1となる。黄色みの強いオリーブ褐色砂質土で、1㎜前後の砂粒を多く含み、1cm大の円礫を少量含む。10cm程度の厚さを確認したに留まる。

管路以下のⅡ層およびSR-1から、底面に回転糸切り痕を残す土師器小皿片や、断面三角形突帯を口縁端部に貼り付ける土師質土器羽釜片が出土している。

(2) 2トレンチ（図8、写真25～27）

1トレンチを重機掘削した段階では、中央棟北側余掘りについて明確でなかったため、中央棟北側東部に、2トレンチを追加設定した。北東隅部から4スパン目の中央部に位置する。建物際側溝に接して、東西幅0.6～0.7m・南北長3.4mを測る。

側溝から1.0m前後までには複数の管が埋設され、現地表下60cmまで撹乱が及び、以北にもヒューム管が2列並ぶ。これらの撹乱の間で、城北団地基本層序のⅡ層を確認するとともに、管路による撹乱の下で、流路内堆積と城北団地基本層序のⅣ層を確認した。また、建物外壁から約0.95mの位置に建物余掘りによる撹乱がみられたが、現地表下約80cmまでしか及んでいない。

Ⅱ層を確認できたのは、側溝から約1.7m北、現地表下約30cm。Ⅱ層は2分でき、上部のⅡ-①層は、3～5㎜大の角礫を多く含むオリーブ褐色砂質土。Ⅱ-②層は、Ⅱ-①層より黄色みが強く、2～5㎜大の砂礫を多く含むオリーブ褐色砂質土。いずれも、Ⅱ-1層である。

Ⅱ層の下、現地表下約50cm以下は、流路内堆積となる。SR-2とした。北部では現地表下約75cm、標高27.15mでⅣ層となるが、南部はさらに流路内堆積が続く。流路の北岸にあたり、狭い範囲ながら土層の変化は大きく、7層に細分できる。SR-2-①層は灰黄褐色砂礫で、2～3㎜大の砂礫が主体となる。SR-2-②層も砂礫。褐灰色で砂礫は10㎜前後とさらに粗い。SR-2-③層は、1～2㎜大の砂粒を多く含む灰黄褐色砂。以上が、調査区南部で認められたのに対し、SR-

写真25　00802調査2トレンチ遠景（北西から）

写真26　00802調査2トレンチ（北から）

写真27　00802調査2トレンチ土層（西から）

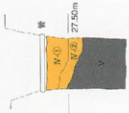


図9　00802調査3・4トレンチ実測図（縮尺1/50）

写真28　00802調査3トレンチ遠景（北東から）

写真29　00802調査3トレンチ（北東から）

写真30　00802調査4トレンチ遠景（北東から）

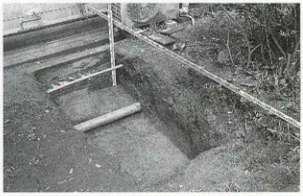


写真31　00802調査4トレンチ（南東から）

2-④層は北岸最上部にあり、SR-2-①～③層との関係は攪乱を挟んで不明。2～5㎜大の砂礫を多く含む褐色砂質土。SR-2-⑤層は、SR-2-①～③層の下で認められた、きめの細かい灰黄褐色砂。北岸付近では、SR-2-④・⑤層の下にSR-2-⑥層がある。きめの細かい、にぶい黄褐色砂で、シルト質が斑状にやや混じる。この下、北岸のⅣ層の上に、SR-2-⑦層がある。にぶい黄褐色砂礫で、2～10㎜大の砂礫を多く含む。北岸を形成するⅣ層は、にぶい黄褐色の砂質シルトで、砂礫をほとんど含まない。

SR-2は、これらの埋土の特徴から、34次調査Ⅰ区南端のSR-122や同Ⅹ区SR-1001と一連の流路である可能性が高い。

なお、2トレンチから遺物は出土していない。

(3) 3トレンチ（図9、写真28・29）

共通教育管理棟玄関南側植栽内に、1955年度建築東棟の東側余掘り範囲の特定を目的に設定したトレンチで、共通教育管理棟南東隅から7スパン目に位置する。建物際側溝を西辺に、南北幅0.95～1.2m・東西長3.2mを測る。

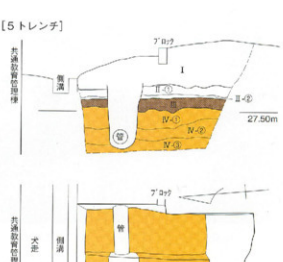
建物外壁から約1.6mに管路が埋設され、ちょうどその管路の東側に大きな攪乱が及んでいる。共同溝による攪乱である。この共同溝掘形西壁で、城北団地基本層序Ⅳ層・Ⅴ層の堆積を確認した。一方、建物自体の余掘りは、側溝部分でなお確認できず、これより西、すなわち外壁から0.7m以内に収まっている。

建物際側溝を基準（設計現地表）に15cmの深さ、標高約27.75mで、Ⅰ層の直下にⅣ層が現れる。上部20～30cmの厚さのⅣ-①層は、1～3㎜大の角の取れた砂粒・砂礫をごく少量含んだオリーブ褐色の砂質シルト。その下、10cm強ほどのⅣ-②層は、砂礫をほとんど含まない、砂質の強いオリーブ褐色砂質シルトとなる。そして、27.50m以下は、1～20cm大の砂礫・小石を多く含む砂礫層のⅤ層となる。Ⅴ層は、狭い範囲でも、南に高く北に低い堆積となり、その凹凸をⅣ層が埋積した格好である。

3トレンチから遺物は出土していない。

(4) 4トレンチ（図9、写真30・31）

共通教育管理棟南東隅部から北に3スパン目中央部に位置する。1956年度建築東棟の東側余掘り範囲の特定を目的に設定したトレンチである。建物際側溝に接



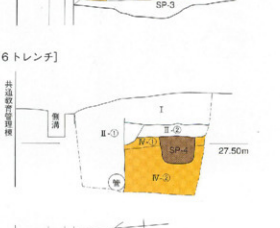


図10　00802調査5・6トレンチ実測図（縮尺1/50）

して、南北幅1.0～1.25m・東西長3.0mを測る。

管路埋設に伴う攪乱も含め、調査区全域のⅠ層直下で、城北団地基本層序Ⅳ層が出土した。3トレンチ同様、建物の余掘りは側溝部分でなお確認できず、これより西の、外壁から0.7m以内に収まっている。

Ⅳ層は、建物際側溝から約30cmの深さ、標高27.65mで出土した。やや灰色みを帯びたにぶい黄褐色砂質シルトで、きめが細かく、砂粒をほとんど含まない。

4トレンチから遺物は出土していない。

写真32　00802調査５・６トレンチ遠景（南東から）

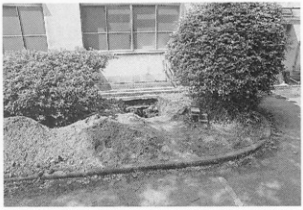


写真35　00802調査６トレンチ遠景（南から）

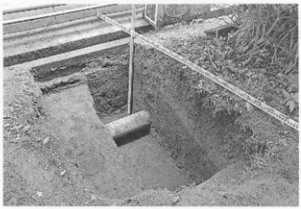


写真33　00802調査５トレンチ（南西から）

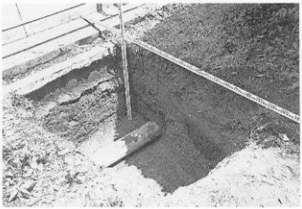


写真36　00802調査６トレンチ（南西から）

写真34　00802調査５トレンチ土層（西から）

写真37　00802調査６トレンチ土層（南西から）

(5) ５トレンチ（図10、写真32 ～ 34）

共通教育管理棟南東隅部から西に６スパン目中央部に位置する。1957年度建築南棟の南側余掘り範囲の特定を目的に設定したトレンチである。建物際側溝を北辺に、東西幅1.1 ～ 1.2m、南北長2.3mを測る。

建物にほぼ平行して、現地表下65cmにヒューム管が埋設されている他は、調査範囲内に大きな撹乱は及んでいない。側溝下においても撹乱は及んでなく、建物余掘りは建物外壁から0.8m以内に収まることになる。表土層以下、城北団地基本層序のⅡ層、Ⅲ層を確認し、以下の詳細確認のため、調査区東半を現地表下100cmまで深掘りした。

Ⅱ層は現地表下約15cmで出土し、２層に分層できる。Ⅱ-①層はオリーブ褐色砂質土で、１～３㎜大の角のとれた砂粒・砂礫を多く含み、５㎜大の砂礫も含む。Ⅱ-②層も、１～３㎜大の角のとれた砂粒・砂礫を多

く含むオリーブ褐色砂質土であるが、Ⅱ-①層に比べて、茶色みが強い。いずれもⅡ-1層である。

Ⅱ層の下、現地表下約25cm、標高約27.70mで、城北団地基本層序のⅢ層が出土した。暗褐色砂質土で、2～3㎜大の砂礫を多く、5～10㎜大の砂礫をまばらに含み、シルト質土を斑状に含む。全体にかなり砂質が強い。

深掘りを行わなかった調査区西半に、Ⅲ層の落ち込む遺構がある。検出面はⅢ層下部で、むしろⅣ層上面に近い。径約30cmの柱穴でSP-3とした。埋土は暗褐色砂質土で、1～2㎜大の砂粒を多く含み、5㎜大の炭化物粒も含む。Ⅲ層よりややシルト質が強く、色調もやや濃い。現状で柱痕跡等は確認していない。

深掘りで確認できたⅢ層下の土層は、3層に分層でき、いずれも城北団地基本層序のⅣ層と判断した。Ⅳ-①層は褐色砂質土で、1～2㎜大の砂粒と、5㎜大の角の取れた砂礫を多く含む。通常のⅣ層より、色調がやや薄く、砂質が強い。Ⅳ-②層は粗砂が主体となる黒褐色砂。Ⅳ-③層は、Ⅳ-②層よりやや細かい粒度の暗褐色砂。3㎜大の円礫を含む。

5トレンチから遺物は出土していない。

(6) 6トレンチ（図10、写真32・35～37）

共通教育管理棟南西隅部から東に4スパン目中央部に位置する。1958年度建築南棟の南側余掘り範囲の特定を目的に設定したトレンチである。建物際側溝に接して、東西幅約1.2m、南北長約1.9mを測る。

建物外壁から約1.4mの位置に、外壁に平行してヒューム管が現地表下約80cmに埋設されている。この管以北も一連の撹乱が広がっており、管はその撹乱の南縁に埋設されていることになる。建物建築時の余掘りが外壁から1.4mまで及び、その最外部に管路が埋設されたと推測される。この撹乱以南は、表土層の下、城北団地基本層序のⅡ層、Ⅳ層を確認した。5トレンチ同様、以下の詳細確認のため、調査区東半について、ヒューム管底にあたる現地表下約105cmまで深掘りした。

Ⅱ層は現地表下約15cmで出土し、2層に分けられる。Ⅱ-①層はⅡ-②層の北側を切り込むオリーブ褐色の砂質土で、やや灰色みが強い。Ⅱ-②層はオリーブ褐色砂質土で、3～10㎜大の角の取れた砂礫を多く含み、しまりがある。いずれもⅡ-1層である。

Ⅱ層の下、現地表下約30cm、標高約27.60mで、城北団地基本層序のⅣ層となるが、Ⅱ層下面においてⅣ層を切り込む、城北団地基本層序Ⅲ層に相当する埋土の遺構を東壁面で確認した。幅約40cm、深さ約35cmを測り、SP-4とした。埋土は黒褐色砂質土で、3～10㎜大の砂礫を多く含み、しまりがある。

Ⅳ層は5トレンチ同様に砂質が強い。上部15cm前後のⅣ-①層は褐色砂質土。2～3㎜大の砂粒・砂礫を多く含み、むしろ砂層に近い。Ⅳ-②層は、にぶい黄褐色砂で、60cm以上の厚さがある。2～3cm大の角の取れた円礫をかなり多く含む。

6トレンチからも遺物は出土していない。

(7) 7トレンチ（図11、写真38～41）

共通教育管理棟南中庭南側出入口の東側に位置する、1958年度建築南棟の北側余掘り範囲の特定を目的に設定したトレンチである。7トレンチは、建物際側溝を南辺に、東西幅1.9m、南北長3.2mを測る。なお、これより東は、仮設倉庫の存在により、調査区を設定できていない。

当初、スパン中央部で掘削を始めたが、浅い位置で南北方向の管路が現れたため、東側にトレンチを拡張した。建物に平行した管路がさらに4本現れたが、その間で、城北団地基本層序のⅡ層、Ⅲ層を確認し、Ⅲ層を30cm前後掘り下げて、Ⅳ層上面で遺構検出を行っ

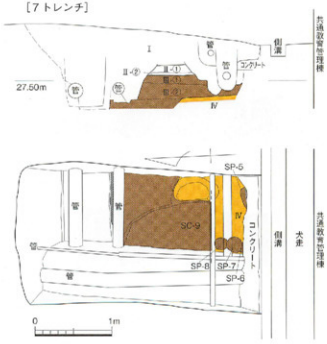


図11　00802調査7トレンチ実測図（縮尺1/50）

写真38　00802調査７トレンチ遠景（北東から）

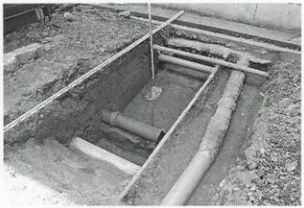


写真39　00802調査７トレンチ（北西から）

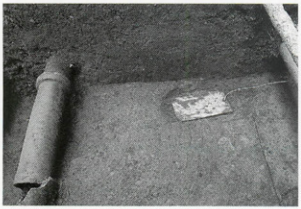


写真40　00802調査７トレンチ土層（西から）

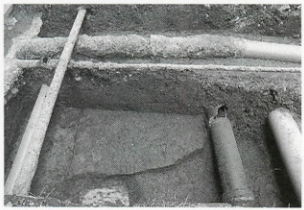


写真41　00802調査７トレンチ土層（東から）

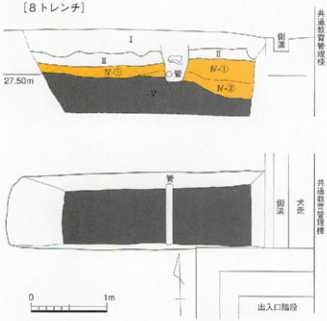


図12　00802調査８トレンチ実測図（縮尺1/50）

た。建物建築時の余掘りは、側溝下部でも認められず、建物外壁から0.9m以内に収まっている。

城北団地基本層序のⅡ層は、現地表（側溝縁石）から約25cmで出土する。上部のⅡ-①層は、1㎜前後の砂粒を多く含み、粘性がわずかにあるオリーブ褐色砂質土。Ⅱ-②層は黄色みの強いオリーブ褐色砂質土で、1～5㎜大の角のある砂礫を多く含む。いずれもⅡ-1層である。

Ⅱ層の下、現地表下約40cm、標高約27.55mで城北団地基本層序Ⅲ層が現れた。上部15cm前後のⅢ-①層は1～3㎜大の砂粒・砂礫を多く含む暗褐色砂質土。Ⅲ-②層に比べて、色調はわずかに薄い。Ⅲ-②層も暗褐色砂質土ながら、Ⅳ層の3cm大前後のブロックを下部ほど含み、粘性が強い。

Ⅲ層を標高27.30m前後まで掘り下げたところで、Ⅳ層上面が現れ、そこで遺構検出を行った。結果、柱穴あるいは小穴4基と、竪穴式住居の一端とみられる遺構1基を確認した。前者をSP-5～8、後者をSC-9とする。SP-5は調査区南壁にかかり、一部のみを検出し

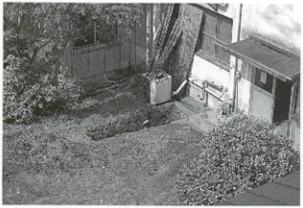


写真42　00802調査８トレンチ遠景（南西から）

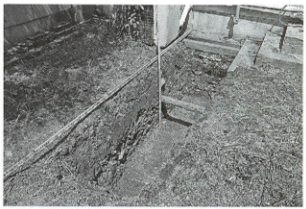


写真43　00802調査８トレンチ（南西から）

た。隅丸方形状の平面と推測される。SP-6も調査区南壁にかかり、北をSP-7に切られる。径10cm強前後の小穴とみられる。SP-7は南側でSP-6、北側でSP-8を切る径20cm前後の柱穴。SP-8は南側をSP-7で切られた径15cm前後の柱穴。これらの埋土は、いずれもⅢ-②層下部に共通する。ただし、最も新しいSP-7は、１～２㎜大の砂粒を多く含む。一方、SC-9はこれらの北で、直線の南辺を検出した。攪乱部の壁で確認する限り、南部は検出面から５cm程度の厚さしかないが、北部では15cm以上の厚さがあり、あるいは複数の遺構がさらに重複している可能性が高い。埋土は、やはりⅢ-②層下部に共通する、Ⅳ層ブロックを含んだ暗褐色砂質土。

７トレンチのⅢ層からは、比較的多くの遺物が出土した。小片ばかりであるが、その中に須恵器は含まれず、刻み目を施した壺口縁部片や、内側にも少し突出する水平口縁の高坏口縁部片、凹線文をもつ高坏脚部片があり、弥生時代中期を中心とした遺構および包含層と判断できる。

(8) ８トレンチ（図12、写真42・43）

共通教育管理棟南中庭、東側中央部のエレベーター部分と出入り口階段の間に位置する。1955年度建築東棟の西側余掘り範囲の特定を目的に設定したトレンチである。東辺を建物側溝、南辺東部を階段最下部として、南北幅1.0m、東西長3.4mを測る。

建物外壁から約1.9mの管路の他、攪乱はみられない。東壁でも攪乱は認められず、余掘りは外壁から0.8m以内に収まる。この範囲において、表土層以下、城北団地基本層序のⅡ層、Ⅳ層、そしてⅤ層を確認した。側溝縁石から約15cmでⅡ層は出土する。オリーブ掲色

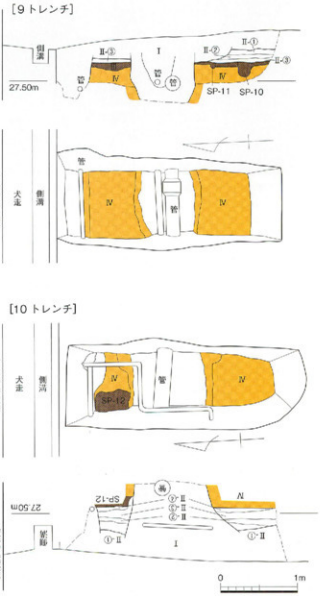


図13　00802調査９・10トレンチ実測図（縮尺1/50）

写真44　00802調査９トレンチ遠景（南西から）

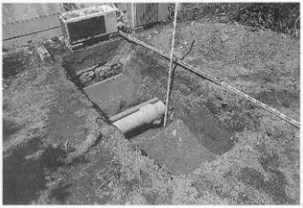


写真45　00802調査９トレンチ（南西から）

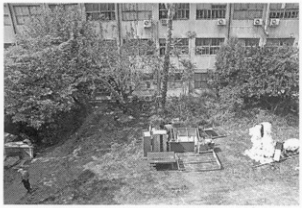


写真46　00802調査10トレンチ遠景（南から）

写真47　00802調査10トレンチ（南東から）

砂質土で、１～３㎜大の砂粒・砂礫をかなり多く含み、わずかに粘性がある。Ⅱ-1層にあたる。

Ⅱ層の下、現地表下約30cm、標高約27.70mでⅣ層となる。上部のⅣ-①層は、にぶい黄褐色砂質シルトで、３～６cm大の円礫を多く含む。Ⅳ-②層は、にぶい黄褐色砂質土で、Ⅳ-①層より円礫を多く含む。Ⅳ層の下は、Ⅴ層の10cm前後の円礫を多く含んだ灰黄褐色砂礫が50cm以上続く。

８トレンチから、遺物は出土していない。

(9) ９トレンチ（図13、写真44・45）

共通教育管理棟南中庭の、北東隅部から３スパン目中央に位置する。中央棟の南側余掘り範囲の特定を目的に設定したトレンチである。北を建物傾講に接し、東西幅1.0～1.1m、南北長2.9mを測る。

建物外壁から約１mと２m前後の位置に管路が埋設されていたが、その間において、城北団地基本層序のⅡ層、Ⅲ層そしてⅣ層を確認した。外壁から１mの位置の管路は、その掘形にしてはやや大きな攪乱が建物

写真48　00802調査10トレンチSP-12（南西から）

側に続いており、建物余掘り最外部に管路が埋設された可能性が高い。

Ⅱ層は現地表下数cmで出土し、３層に分層できる。Ⅱ-①層は、２～５㎜大の砂礫を多く含む、オリーブ褐色砂質土。Ⅱ-②層は、１～３㎜大の砂粒・砂礫をやや多く含む、オリーブ褐色砂質土。上部はやや茶色みが強く、Ⅱ-①層よりしまりがある。Ⅱ-③層は、１～２㎜大の砂粒を少し含んだオリーブ褐色砂質土。

やや黄色みが強く、Ⅱ-②層の床土部である。いずれもⅡ-1層である。

Ⅱ層の下、現地表下約20cm、標高約27.75mでⅢ層が出土する。土壌化が顕著でなくⅡ層とも考えられたが、上面からより土壌化した遺構が掘り込まれていることから、Ⅲ層とした。オリーブ褐色砂質土で、斑状にⅣ層や暗褐色シルト質土が混在し、わずかに粘性がある。

このⅢ層上面から掘り込まれた遺構を、断面で2基確認した。いずれも小穴で、南側をSP-10、北をSP-11とする。SP-10は断面で幅20cm弱、深さ20cmを測る小穴で、埋土はオリーブ褐色砂質土。SP-11は幅7cm程度、深さ8cmの小穴。埋土は土壌化し、黒褐色砂質土の5mm大ブロックを少量含み、きめの細かい暗褐色砂質土である。

Ⅲ層は薄く、標高27.70mでⅣ層となる。Ⅳ層は、2～5mm大の角のある砂礫をやや多く含んだ黄褐色砂質シルトである。

9トレンチでは、Ⅱ層から土器小片1点が出土したのみである。

(10)　10トレンチ（図13、写真46～48）

当初予定はしていなかったが、東西に長い中央棟南側の状況を、さらに確認するために10トレンチを追加した。中庭北西部に温室があるため、中庭北側出入り口の東側に位置する。東西幅約1.1m、南北長約3.1mを測る。

調査区内でクランク状に屈折する管路や、さらに外壁から約1.1mと2m前後の位置に管路が埋設されていたが、その間において、城北団地基本層序のⅡ層とⅣ層、さらには遺構の一部を確認した。なお、外壁から約1.1mの位置の管路は、その掘形にしてはやや大きな攪乱が建物側に続き、9トレンチ同様、建物余掘り最外部に管路が埋設された可能性が高い。

Ⅱ層は、現地表下約20cmで出土し、4層に分けられる。Ⅱ-①層は、1～5mm大の角のある砂粒・砂礫を多く含んだオリーブ褐色砂質土。しまりがややある。Ⅱ-②層は、Ⅱ-①層より砂礫の含みが少ない、オリーブ褐色砂質土。Ⅱ-③層は黄褐色砂質土で、1～3mm大の角のある砂粒・砂礫をやや多く含むが、きめが細かい。Ⅱ-④層は、砂礫をほとんど含まないオリーブ褐色砂質土で、床土部分にあたる。いずれもⅡ-1層である。

このⅡ層の下、現地表下約55cm、標高27.40mで城北団地基本層序Ⅳ層が出土し、Ⅳ層上面でⅢ層に類する埋土の遺構1基を確認した。南北45cm以上、東西30cm以上の規模をもつ。SP-12とするが、土壙となる可能性もある。深さは攪乱壁で10cm前後確認でき、埋土は1～2mm大の砂粒をやや多く含んだ暗褐色砂質土である。

10トレンチでは、攪乱層からではあるが、須恵器坏蓋天井部片や、回転糸切り痕をもつ土師器小皿底部片、瓦器小片が出土している。

3　調査成果のまとめ

以上の調査成果から、工事計画範囲内の埋蔵文化財について、以下のようにまとめることができる。

A　中央棟北側

1・2トレンチの調査成果から、外壁から0.95mまでは建物建築時の余掘りが及ぶが、東部では現地表下80cmまでに留まる。それ以外は、東部では現地表下50cm、西部で現地表下90cmにおいて、弥生時代以降の流路が出土する。

B　東棟東側

3・4トレンチの調査成果から、建物建築時の余掘りは外壁から0.7m以内に収まる。それ以外は、北部で現地表下15cm、南部で現地表下30cmにおいて、縄文時代の遺物包含層が出土する。

C　南棟南側

5トレンチの調査成果から、東部では建物建築時の余掘りは外壁から0.8m以内に収まる。それ以外は、現地表下25cmで弥生時代から古墳時代の遺構・遺物包含層が出土する。

6トレンチの調査成果から西部では、外壁から1.4m、深さ100cmまで建物建築時の余掘りが及ぶ。それ以外は、現地表下30cmで弥生時代から古墳時代の遺構が出土する。

D　南棟北側

7トレンチの調査成果から、建物建築時の余掘りは外壁から0.9m以内に収まる。それ以外は、現地表下40cmで弥生時代から古墳時代の遺構・遺物包含層が出土する。

E　東棟西側

8トレンチの調査成果から、建物建築時の余掘りは外壁から0.8m以内に収まる。それ以外は、現地表下30cmで縄文時代の遺物包含層が出土する。

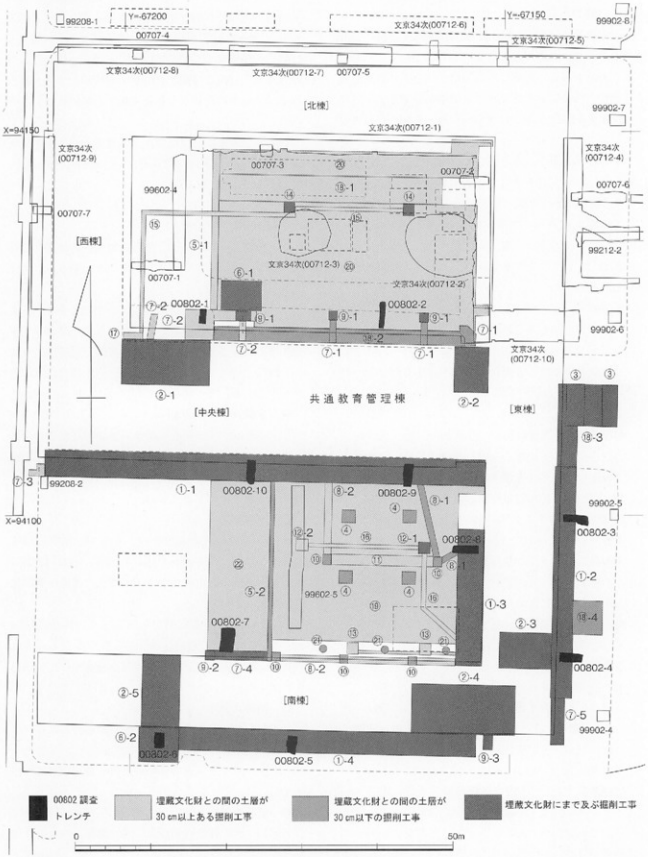


図14　計画工事による埋蔵文化財への影響（縮尺1/500）

F　中央棟南側

9・10トレンチの調査成果から、外壁から1.0mまでは、建物建築時の余掘りが及ぶ。それ以外は、東部では現地表下20cmにおいて弥生時代から古墳時代の遺構・遺物包含層が出土し、西部では現地表下55cmにおいて縄文時代の遺物包含層が出土する。

G　南中庭東部

7～10トレンチの調査成果から、現地表下20～50cmで、弥生時代から古墳時代の遺構・遺物包含層、あるいは縄文時代の遺物包含層が出土する。

4　工事による埋蔵文化財への影響

調査段階での所見を承けて、施設基盤部において一部工法変更等の措置が講じられ、改めて工事内容が埋蔵文化財調査室に示された。それら各計画工事に伴う埋蔵文化財への影響について、今回の調査成果と既往の調査成果から、以下の通り判断する（図14）。

①-1　耐震補強基礎工事（中央棟南側）

今回調査成果Fから、外壁から1.0mまでは建物余掘りにより埋蔵文化財は破壊されている。それ以外の埋蔵文化財には、深度110cmの掘削で影響が及び、調査が必要である。

①-2　耐震補強基礎工事（東棟東側）

今回調査成果BおよびⅠ期工事に伴う34次調査の成果から、余掘りは基本的にない。深度110cmの掘削で埋蔵文化財に影響が及び、範囲全域の調査が必要である。

①-3　耐震補強基礎工事（東棟西側）

今回調査成果BおよびⅠ期工事に伴う34次調査の成果から、余掘りは基本的にない。深度110cmの掘削で埋蔵文化財に影響が及び、範囲全域の調査が必要である。

①-4　耐震補強基礎工事（南棟南側）

今回調査成果CおよびⅠ期工事に伴う34次調査の成果から、余掘りは基本的にないとする。深度110cmの掘削で埋蔵文化財に影響が及び、範囲全域の調査が必要である。

②-1　建物内ピット（中央棟西部）

今回調査成果AおよびⅠ期工事に伴う34次調査の成果から、建物内部にも埋蔵文化財が残る可能性が高い。深度100cmの掘削で埋蔵文化財に影響が及び、範囲全域の調査が必要である。

②-2　建物内ピット（中央棟東部）

今回調査成果AおよびⅠ期工事に伴う34次調査の成果から、建物内部にも埋蔵文化財が残る可能性が高い。深度100cmの掘削で埋蔵文化財に影響が及び、範囲全域の調査が必要である。

②-3　建物内ピット（東棟南部）

今回調査成果B・EおよびⅠ期工事に伴う34次調査の成果から、建物内部にも埋蔵文化財が残る可能性が高い。深度100cmの掘削で埋蔵文化財に影響が及び、範囲全域の調査が必要である。

②-4　建物内ピット（南棟東部）

今回調査成果CおよびⅠ期工事に伴う34次調査の成果から、建物内部にも埋蔵文化財が残る可能性が高い。深度100cmの掘削で埋蔵文化財に影響が及び、範囲全域の調査が必要である。

②-5　建物内ピット（南棟西部）

今回調査成果C・DおよびⅠ期工事に伴う34次調査の成果から、建物内部にも埋蔵文化財が残る可能性が高い。深度100cmの掘削で埋蔵文化財に影響が及び、範囲全域の調査が必要である。

③　車寄屋根基礎工事

今回調査成果Bから、深度85cmの掘削で埋蔵文化財に影響が及び、調査が必要である。

④　シェルター基礎工事

今回調査成果Gから、深度25cmの掘削では、埋蔵文化財との間に5～25cmの土層が確保される。

⑤-1　擁壁工事（北中庭）

今回調査成果AおよびⅠ期工事に伴う34次調査から、深度40cmの掘削では、埋蔵文化財との間に40～50cmの土層が確保される。

⑤-2　擁壁工事（南中庭）

今回調査成果D・Fから、深度40cmの掘削で、埋蔵文化財との間に0～15cmの土層が確保される。

⑥-1　検水槽工事（北中庭）

今回調査成果Aから、深度250cmの掘削で埋蔵文化財に影響が及び、調査が必要である。

⑥-2　検水槽工事（南棟南側）

今回調査成果Cから、深度250cmの掘削で埋蔵文化財に影響が及び、調査が必要である。

⑦-1　排水管布設工事（北中庭東部）

今回調査成果Aから、深度50cmの掘削では、埋蔵文化財の直上に達する。

⑦-2　排水管布設工事（北中庭西部）

今回調査成果Aから、深度50cmの掘削では、埋蔵文化財との間に40cmの土層が確保される。

⑦-3　排水管布設工事（中央棟西側）

99208-2調査から、深度50cmの掘削では、埋蔵文化財との間に30cmの土層が確保される。

⑦-4　排水管布設工事（南中庭西部）

今回調査成果Dから、深度50cmの掘削では、埋蔵文化財に影響が及び、調査が必要である。

⑦-5　排水管布設工事（東棟南東側）

今回調査成果Bから、深度50cmの掘削では、埋蔵文化財に影響が及び、調査が必要である。

⑧-1　排水管布設工事（南中庭東部）

今回調査成果Gから、深度0cmの掘削では、埋蔵文化財との間に20～30cmの土層が確保される。

⑧-2　排水管布設工事（南中庭西部・南部）

今回調査成果Gから、深度0cmの掘削では、埋蔵文化財との間に30～50cmの土層が確保される。

⑨-1　排水桝接地工事（北中庭）

今回調査成果Aから、深度90cmの掘削では、埋蔵文化財に影響が及ぶ、ないし直上であり、調査が必要である。

⑨-2　排水桝接地工事（南中庭西部）

今回調査成果Dから、深度90cmの掘削では、埋蔵文化財に影響が及び、調査が必要である。

⑨-3　排水桝接地工事（南棟南側）

今回調査成果Cから、深度90cmの掘削では、埋蔵文化財に影響が及び、調査が必要である。

⑩　排水桝接地工事

今回調査成果Gから、深度30cmの掘削では、埋蔵文化財との間に0～20cmの土層が確保される。

⑪　側溝工事

今回調査成果Gから、深度0cmの掘削では、埋蔵文化財との間に30～50cmの土層が確保される。

⑫-1　南中庭外灯基礎工事（東側）

今回調査成果Gから、深度70cmの掘削では、埋蔵文化財に影響が及び、調査が必要である。

⑫-2　南中庭外灯基礎工事（西側）

99602-5調査で、現地表下140cm以下まで攪乱層が及ぶ場所に工事地点は位置し、埋蔵文化財との間に70cm以上の土層が確保される。

⑬　庭園灯基礎工事

今回調査成果Gから、深度0cmの掘削では、埋蔵文化財との間に30～50cmの土層が確保される。

⑭　北中庭外灯基礎工事

Ⅰ期工事に伴う34次調査成果から、深度130cmの掘削では、埋蔵文化財に影響が及び、調査が必要である。

⑮　電線管路布設工事

Ⅰ期工事に伴う34次調査、99602-4調査、および00707-1調査の成果から、深度40cmの掘削では、埋蔵文化財との間に30～70cmの土層が確保される。

⑯　電線管路布設工事

今回調査成果Gから、深度0cmの掘削では、埋蔵文化財との間に30～50cmの土層が確保される。

⑰　電気引込部電線管路布設工事

今回調査成果Aから、深度50cmの掘削では、埋蔵文化財との間に40cmの土層が確保される。

⑱-1　舗装工事（北中庭北部）

Ⅰ期工事に伴う34次調査の成果から、深度25cmの掘削では、埋蔵文化財との間に30～40cmの土層が確保される。

⑱-2　舗装工事（北中庭南部）

今回調査成果Aから、深度25cmの掘削では、埋蔵文化財との間に25～65cmの土層が確保される。

⑱-3　舗装工事（東棟東側中央部）

今回調査成果Bから、深度25cmの掘削では、埋蔵文化財に影響が及び、調査が必要である。

⑱-4　舗装工事（東棟東側南部）

今回調査成果Bから、深度25cmの掘削では、埋蔵文化財との間に5cmの土層が確保される。

⑲　舗装工事

今回調査成果Gから、深度0cmの掘削は盛土内に収まり、埋蔵文化財との間に20～30cmの土層が確保される。

⑳　芝張り工事

今回調査成果AおよびⅠ期工事に伴う34次調査の成果から、深度10cmの掘削では、埋蔵文化財との間に30～80cmの土層が確保される。

㉑　樹木植栽工事

今回調査成果Gから、深度10cmの掘削では、埋蔵文化財との間に20～40cmの土層が確保される。

㉒　舗装工事

今回調査成果Gから、深度15cmの掘削は大半が盛土内に収まり、埋蔵文化財との間に5～35cmの土層が確保される。

5　調査後の対応

以上の調査成果と工事による埋蔵文化財への影響を、6月3日付で施設基盤部へ報告するとともに、同報告を資料とした、工事による埋蔵文化財への影響をまとめた愛媛県教育委員会教育長宛の意見書を、6月9日付提出の土木工事届に添付した。

（吉田）

00803　沿岸・GRC関連施設新営工事に伴う調査
－文京遺跡35次調査－

調査地点　松山市文京町2番5号
　　愛媛大学城北団地理学部構内
調査面積　252㎡
調査期間　2008年6月2日～8月12日
調査種別　本格調査
調査担当　三吉秀充・田崎博之
調査補助　宮崎直栄・濱田美加
依頼文書　施設基盤部長発事務連絡
　　（平成20年2月19日付）

1　調査にいたる経緯

2008年2月、施設基盤部から沿岸・GRC関連施設新営工事計画の報告（①新営建物の基礎工事および配管設置に伴う掘削、②取り壊し建物の基礎除去に伴う掘削）があった。周辺における既往の調査成果から、工事計画のうち新営建物基礎部分（240㎡）と外灯基礎部分2地点（12㎡）の計3地点について発掘調査することとなった（図15・写真49）。

2　調査の方法

(1) 遺構区割と調査区

今回の調査範囲は、新営建物基礎部分と街灯基礎部分からなる。新営建物基礎部分をⅠ区、外灯基礎部分のうち東部をⅡ区（P1）、西部をⅢ区（P2）とした。平面直角座標系X＝93900、Y＝－66800を基点として設定している城北地区における調査区割では、AC～AH-64～68区にあたる。調査では、今回設定したⅠ～Ⅲ区と城北地区における調査区割を併用して、遺物の取り上げや遺構測量に使用している。

調査は施設基盤部から、新営建物基礎部分より建設工事に入りたいとの要望があり、協議の上でまず、新営建物基礎部分にあたるⅠ区の調査に着手し、その後、Ⅱ・Ⅲ区の調査を行うことした。

(2) 遺構の表記

今回の調査で最も広いⅠ区で出土した遺構には、A：Ⅱ-3-①層上面で検出した遺構と、B：Ⅳ-1層中で検出した遺構がある。Aは、出土遺物や切り合い関係、周辺の文京遺跡21・24次調査の成果などから古代末～中世の遺構と考えられる。Bは、Ⅳ-1層を掘り下げ途中に検出した縄文時代後期～晩期の遺構である。しかし、調査区北壁土層における精査では、Ⅳ-1層上面から掘り込まれていることを確認している。このことから、本来Ⅳ-1層上面検出遺構とすべきものである。遺構には、竪穴式住居跡：SC、溝：SD、土壙：SK、柱穴・小穴：SP、自然流路：SR、不明遺構：SXといったように遺構略号を付して、Aの遺構に関しては1～15、Bの遺構に関しては201～217の遺構番号を付与した。

A　SD-1・2・4～8・10～15、SK-9
B　SR-201、SX-202～208、SP-209・212～217、SK-210、SC-211

3　調査の記録

(1) 基本層序

今回の調査でも、城北団地全域で設定している基本層序Ⅰ～Ⅴ層を確認している（図16）。

表7　00803（文京35次）調査出土遺構一覧

遺構の種類	遺構番号	総数
竪穴式住居（SC）	SC-211	1
土壙（SK）	SK-9・210	2
溝（SD）	SD-1・2・4～8・10～15	13
自然流路（SR）	SR-201	1
土器溜まり（SX）	SX-202～208	7
柱穴・小穴（SP）	SP-209・212～217	7

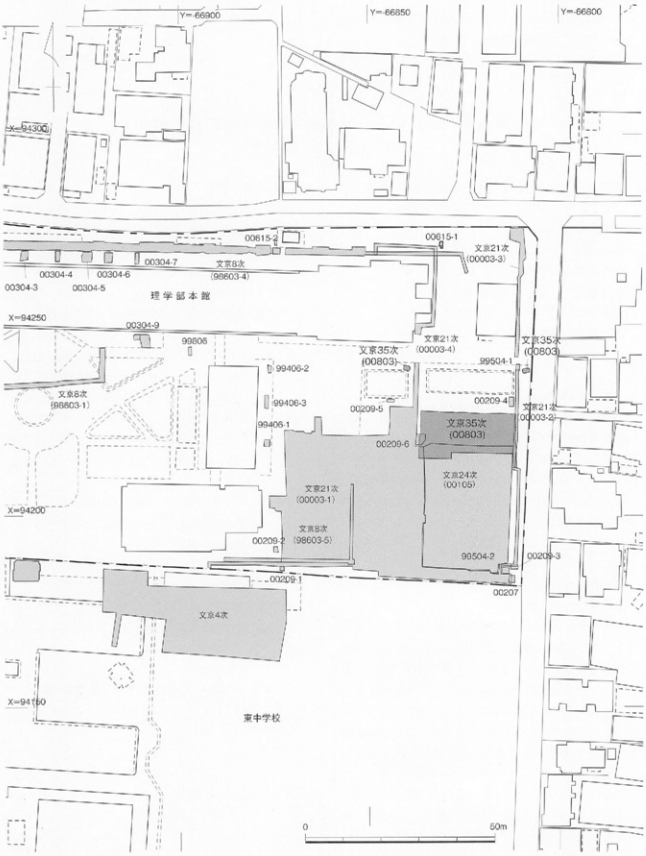
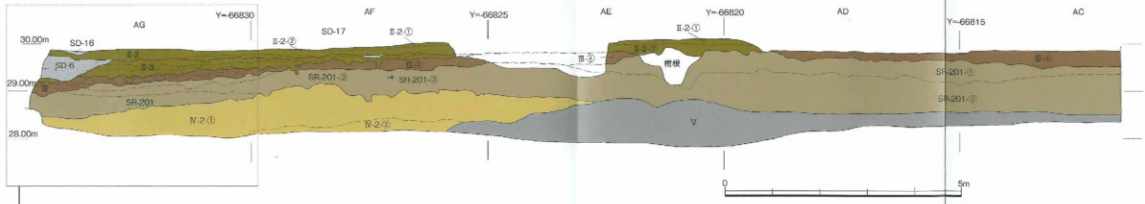
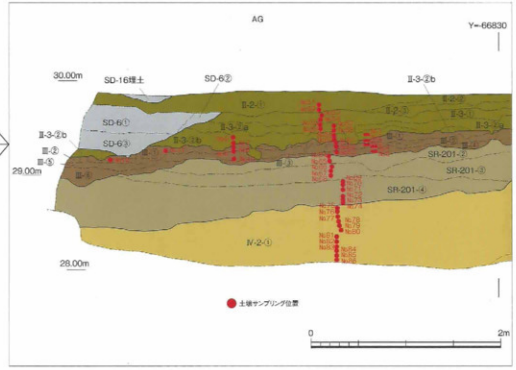
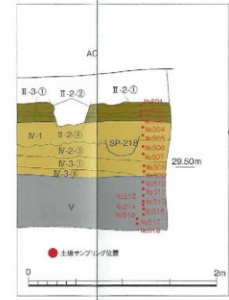


図15　00803（文京35次）調査調査区配置図（縮尺1/1,000）

南壁土層断面図







北壁土層断面図

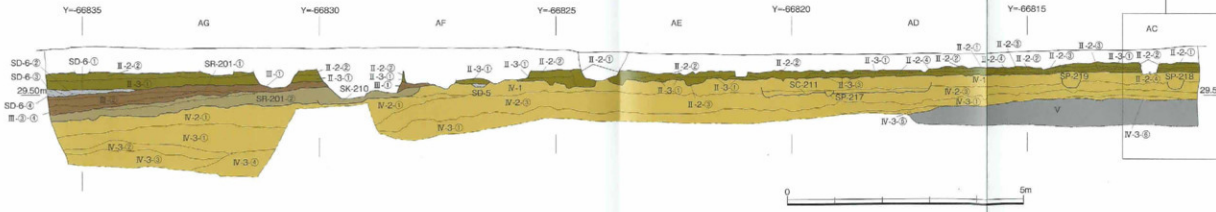


図16　00803（文京35次）調査土層図（縮尺1/80、1/40）

Ⅰ層　瓦礫を含む表土層である（写真50）。

Ⅱ層　団地造成以前の水田・畠層であるⅡ-1層と、古代～中世と考えられる水田・畠層のⅡ-2層からなる。

Ⅱ-1層　表土層直下であらわれた団地造成以前の水田・畠の耕作土層。表土剥ぎ作業では、Ⅱ-1層までを重機で掘り下げた。

Ⅱ-2層　Ⅱ-2-①層、Ⅱ-2-②層、Ⅱ-2-③層の3層から構成される。Ⅱ-2-③層は自然堆積層と考えられる堆積層でAF・AGの境界部に分布している。Ⅱ-2-①・②層はそれが攪拌、土壌化した土層で、水田、畠の耕作土層と考えられる。Ⅱ-2-①層上面には溝跡と考えられる砂礫層が確認できる。各層の特徴は以下のとおりである。

Ⅱ-2-①層　暗オリーブ褐色砂質土。1～3㎜大の細礫を多く含む。しまりがある。

Ⅱ-2-②層　暗オリーブ褐色砂質土。1～3㎜大の細礫を多く含むが、Ⅱ-2-①層より礫の含み具合は少なく、しまりがある。粘性はない。

Ⅱ-2-③層　暗オリーブ褐色砂質土。Ⅱ-2-②層と比べてやや黄色みが強い。1～3㎜大の細礫を多く含む。しまりがあり、粘性はない。

Ⅱ-3層　Ⅱ-3層は、Ⅱ-3-①層、Ⅱ-3-②層、Ⅱ-3-③層から構成される。最下部のⅡ-3-③層は自然堆積土層、Ⅱ-3-①層はそれが土壌化、攪拌された水田・畠の耕作土層である。Ⅱ-3-②層は、その漸移的な層で、土壌化は進んでいるが、攪拌痕跡は認められない。Ⅱ-3層は文京21次調査のSR-17に対応する堆積土層である。調査区西端で出土したSD-6はⅡ-3層上面から掘り込まれている。各層の特徴は以下の通りである。

Ⅱ-3-①層　砂礫混じりのにぶい黄褐色砂質シルトで、ときとして1～3㎜大の粗砂、小礫が集中してみられる部分がある。また、下部のⅢ層の小塊がみられ、攪拌されていると判断できる。下部のⅡ-3-②層を母材とする水田耕土もしくは畠耕土と考える。SD-6はこの土層に伴う溝である。

Ⅱ-3-②層　にぶい黄橙色砂質シルトである。粗砂、1㎝大の細礫をまばらに含む。しまりが強い。Ⅱ-3-③層とほぼ同質であるが、Ⅱ-3-③層より小礫の混じりが多い。ラミナがみられるが、木の根で壊されている。文京21次調査SR-17の下部を構成する自然堆積層である。

Ⅱ-3-③層　にぶい黄橙色砂質シルトである。微細砂・シルトからなる、小礫混じりの自然堆積層である。厚さ1～2㎜、幅1㎝程度の小さなラミナ層がみられる。西側では粗砂が多く混じる。文京21次調査SR-17の下部を構成する自然堆積層である。

Ⅲ層　SR-201の堆積が一時停滞して湿地環境に変化し、堆積した土層群である。文京21次調査SX-400、文京遺跡24次調査SX-28に対応する土層群で、縄文時代晩期末～弥生時代初頭の突帯文土器を包含している。ただし、SX-400と比べると遺物の出土量は少ない。Ⅲ-①～⑥層からなり、各層の特徴は以下の通りである。

Ⅲ-①層　砂礫混じりの暗褐色粘質シルト土層で、にぶい黄褐色シルト土が混じる。部分的に3～5㎜大ほどの丸い小塊となっており、Ⅳ層上部とともにⅢ-②層が攪拌されたものと考えた。土器（R-101・102）が出土している。また、AG区のⅢ-①層とⅢ-②層の間にレンズ状の堆積があり、Ⅲ-②層とほとんど同色・同質であるが、粗砂がⅢ-②層より多く混じる。

Ⅲ-②層　砂礫混じりの黒褐色粘質シルト質土である。部分的ににぶい黄褐色の小塊を含む部分もあるが、上層と比べると極端に少ない。砂礫の量はⅢ-④層と比べると比較的少ない。

Ⅲ-③層　砂礫混じりの黒褐色砂質シルト土である。Ⅲ-②層と比べると黒みがうすい。Ⅲ-④層と比べると砂礫の混じりは少ない。粘性・しまりが強く、細砂を主として1～3㎜大の細礫をまばらに、1㎝大の礫をわずかに含む。

Ⅲ-④層　灰黄褐色砂礫土層である。中砂を主体として、2～5㎝大の小礫、1～2㎜大の粗砂が混じる。部分的に黒褐色砂礫混じりの砂質シルト土が混じる。

Ⅲ-⑤層　灰黄褐色砂質シルトである。粘性、しまりが強い。1～2㎜大の細礫をまばらに、1～2㎝大の礫をわずかに含む。黒褐色土のブロックを部分的に含む。Ⅲ層堆積中に下部のⅣ-2層が再堆積したものと考えられる。

Ⅲ-⑥層　灰黄褐色細砂層である。1㎜大の粗砂、1～2㎝大の礫をわずかに含む。下半部にⅢ層の

ブロックを含む。下部に黒褐色土のブロックを含むので、Ⅲ層堆積中に下部のⅣ－２層が再堆積したものと考えられる。

Ⅳ層　にぶい黄褐色のシルト～微細砂層で、Ⅳ－１～Ⅳ－３層からなる。Ⅳ－１層は調査区北東部（AC～AF-65区北半部、AC～AF-66区）に分布しており、調査区南部の余掘り壁面にはみられない。

Ⅳ－１層　にぶい黄褐色シルト層である。上部を掘り下げていくと生物擾乱が著しい。縄文時代後期土器、円礫が点々と出土している。

Ⅳ－２層　調査区南部余掘り壁面では、Ⅳ－２－①層とⅣ－２－②層で構成されている。にぶい黄橙色微細砂層で、部分的にシルト、微細砂のラミナを観察できる。Ⅳ－２－①層と比べてⅣ－２－②層には小礫、粗砂からなるラミナを観察できる。

Ⅳ－３層　灰黄色～にぶい黄橙色の砂層～砂礫層で、Ⅳ－３－①～Ⅳ－３－⑥層からなる。

Ⅴ層　砂礫層。粗砂、拳大の中礫、そして小礫のラミナ堆積が縞状に互層堆積している。

なお、発掘調査では28基の遺構を検出している。遺構の一覧は、表７のとおりである。

(2) 調査の概要

(a) Ⅰ区の概要

調査では、南側余掘り沿いに土層観察用ベルトを残しながら、Ⅱ－３－①層上面もしくは中位で掘り下げを中断して、遺構を検出した。SD－６ほかの古代～中世の遺構の調査を行い、Ⅱ－３－①層およびⅡ－３－②・③層を掘り下げⅢ層上面を検出した。

1) Ⅱ－３－①層上面検出遺構

Ⅰ区で検出した溝は、遺構検出ごとに個別の遺構番号を与えた。調査終了後、溝の配置や埋土の特徴から、SD－１、SD－２、SD－４、SD－５、SD－６、SD－８、SD－10、SD－11、SD－12、SD－13、SD－14、SD－15、SD－16、SD－17の14条に整理した（図17・写真51）。

SD－１　調査区西部AF64・65区、AG65・66区で検出した溝である。検出長約12m、溝幅は最大で約50cmを測る。深さは最深部で約12cmを測る。遺構検出段階では、南東から北西方向にのび、X＝94221、Y＝－66828付近で一端少し北側にふれ、SD－１の北側に隣接するSD－11と一連の溝と考えていた。しかし、埋土を掘り進めた段階で、SD－１はSD－11に統かず、X＝94225、Y＝－66835付近で北西方向にのびることが明らかになった。埋土上部は、にぶい黄褐色シルト。２～３mm大の砂礫を含んでいる。埋土下部は、灰白～褐灰色砂礫。15mm大未満の砂礫、にぶい黄褐色シルトのブロックや同大の炭化した土器片を少量含む。出土した遺物は、縄文土器・弥生土器片が主体であり、古墳時代以降の時期を特定できる遺物はない。遺構検出面や遺構埋土の特徴から古代～中世の溝と考えられる（図18）。

SD－２　調査区中央南部AF64・65区で出土した溝である。溝の進行方向や配置などから調査区北西部AG65・66区で出土したSD－８あるいはSD－11と一連の溝である可能性が高い。南東方向から北西方向にのびる。検出長2.1m、最大幅35cmを測る。埋土は灰白色砂礫で15mm大未満の砂礫からなる。遺物は縄文土器が主体であるが、遺構検出面や遺構埋土の特徴などから古代～中世の溝と考えられる（図18）。

SD－３　SD－１の南東部分を当初別遺構SD－３として調査を行った。調査の過程でSD－１と一連の溝であることが明らかになったためSD－１に統合した。

SD－４　SD－５に並行して南東から北西方向にのびる溝である。調査区東部AC64・65区、AD65区、AE65区に及ぶ。検出長10.7m、溝幅は最大で35cm。溝の深さは最深部でも約５cmである。AD65区を中心として撹乱跡が集中して見られる。溝は、はじめ調査区南東部から北西方向にのびた後、X＝94221、Y＝－66816付近で一端北に向きを変え、さらにX＝994223、Y＝－66818付近で西に向きを変えて北西方向へのびる。埋土は灰黄色砂礫で、２～40mm大の円礫からなり、かたくしまりがある。出土遺物は縄文土器・弥生土器の小片が主体であるが、遺構検出面や埋土の特徴などから古代～中世の溝と考えられる（図18）。

SD－５　調査区東部AC64・65区、AD64・65区、AE65・66区、AF66区で検出した溝である。調査区南東部から北西方向にのび、X＝94223、Y＝－66822付近でやや北に方向をかえ、さらに北西方向へとのびる。調査区北壁に接するAF66区付近では、幅５cm未満の撹乱が溝の進行方向に対して直交するように掘り込まれている。溝さらいの際か、あるいは溝開削の際についた痕跡と考えられる。攪乱などを挟んで断続的であるが、全長約17mにわたってのびる。溝幅は最大で38cm、深さは最大で約７cmを測る。埋土は灰黄色砂礫で２～30mm大の砂礫からなる。上部層からの粘性土のしみこみによるものか、かたくしまりがある。出土遺

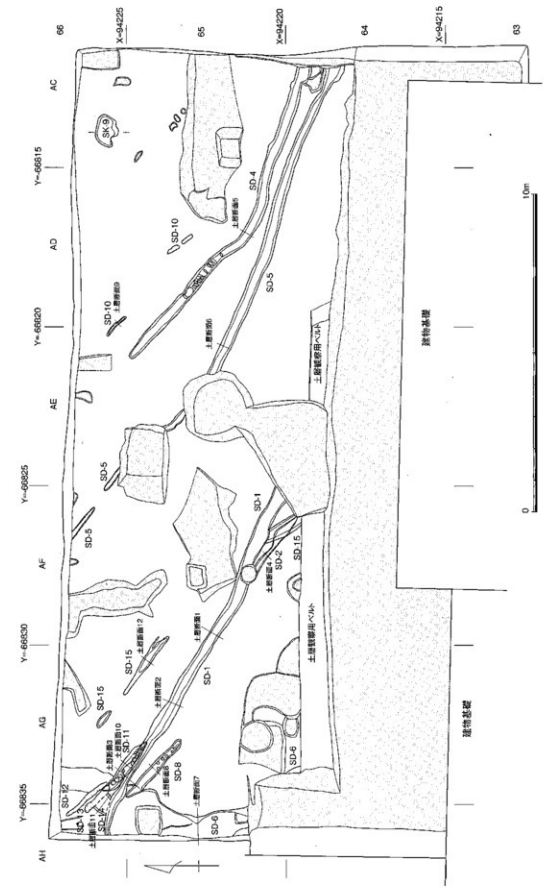


図17　00803（文京35次）調査Ⅱ-3-①層上面出土遺構配置図（縮尺1/120）

物は縄文土器・弥生土器片が主体であるが、遺構検出面や埋土の特徴などから古代～中世の溝と考えられる（図18）。

SD-6　調査区南西部までは南東から北西方向にのび、そこで大きく方向を変え北方向にのびる溝である。溝の西側の立ち上がりが調査区外に位置するため、溝幅は不明である。文京遺跡24次調査検出のSR-2、文京遺跡21次調査検出のSR-17に対応する溝である。埋土は、暗灰黄色砂礫層で5㎜大未満の砂礫が混じる。出土遺物は縄文土器・弥生土器片が主体であるが、遺構検出面や埋土の特徴などから古代～中世の溝と考えられる（図18）。

SD-7　SD-6のうち北壁に接する部分を、遺構検出の際、東西方向にのびる幅約50cmの溝と考えた。しかし、溝の基盤層と考えた堆積がSD-6の埋土の一部であることが明らかになった。SD-7は、SD-6埋土の堆積過程の一部と考えた。

SD-8　調査区北西部AG65・66区で出土した溝である。南東方向から北西方向にのびる。平面における遺構精査の観察結果からSD-6を切っていると考えられる。検出長約2.5mで最大検出幅33cm。溝内南東部で掘痕が多数見られる。埋土は灰白色砂礫で2～3㎜大の砂礫層からなる。連続していないが、AF64・65区で出土した溝SD-2と一連の溝である可能性がある。遺物は弥生土器小片が1点出土しているのみである。遺構検出面や埋土の特徴などから古代～中世の溝と考えられる（図18）。

SK-9　調査区北東部AC66区で出土した長辺94cm、短辺74cmの不整形土壌である。最大深度は9cm。埋土は上部と下部で少し異なる。上部は灰黄色砂礫で

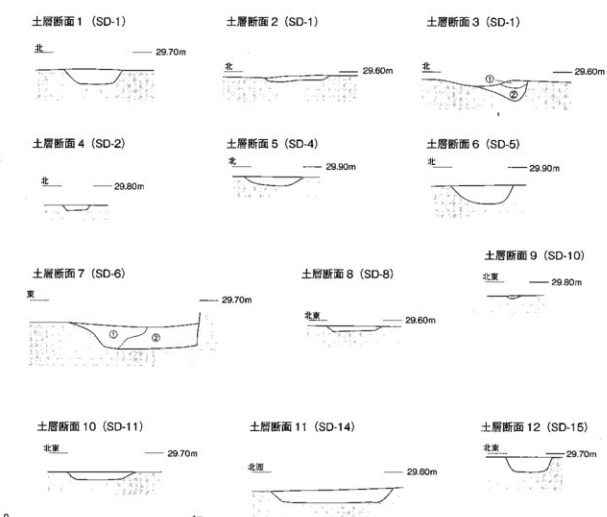


図18　00803（文京35次）調査Ⅱ-3-①層上面出土溝断面図（縮尺1/20）

1cm大未満の砂礫からなる。かたくてしまりがある。下部は灰黄色砂質土で、1㎜大未満の砂粒からなる。南部に突出部をもち、溝の水口の可能性も考えられる。遺物は出土していない（図19）。

SD-10　調査区北部AD65・66、AE66区で出土した溝である。南東方向から北西方向へとのびる。埋土は2～3㎜大の灰白色砂礫層。検出幅は最大部でわずか10cm程度である。出土遺物は縄文土器あるいは弥生土器小片が2点出土したのみである。遺構検出面や埋土の特徴などから古代～中世の溝と考えられる（図18）。

SD-11　調査区北西部AG65・66区で出土した南東方向から北西方向へのびる溝である。検出時は、南東からのびるSD-1と一連の溝と考えていたが、埋土を掘り進めるなかで、別の遺構と認識した。検出長2.1m、幅42cm、深さ最深部で4cmを測る。溝底面には、鍬痕が多数見られる。埋土は灰白色砂礫で15㎜大未満の砂礫からなる。SD-11と認識して取り上げた遺物はない。遺構検出面や埋土の特徴から古代～中世の溝と考えられる（図18）。

SD-12　調査区北西部AG、AH66区で出土した溝。当初SD-6の埋土の一部として掘り進めたが、南東から北西方向にのびる別の溝として認識した。検出長1.7m、幅16cm、深さ約2cm。埋土は灰白～褐灰色砂礫である。15㎜大未満の砂礫やにぶい黄褐色シルトのブロックを含んでいる。SD-12と認識して取り上げた遺物はない。遺構検出面や埋土の特徴から古代～中世の溝と考えられる。

SD-13　調査区北西部AG・AH66で出土した溝である。当初SD-6の埋土の一部として掘り進めたが、南東から北西方向にのびる別の溝とした。検出長約1.15m、幅21cm、検出深度は2.5cmである。埋土は灰白～褐灰色砂礫で15㎜大未満の砂礫やにぶい黄褐色シルトのブロックを含んでいる。SD-13と認識して取り上げた遺物はない。遺構検出面や埋土の特徴などから古代～中世の溝と考えられる。

SD-14　調査区北西部AG・AH66で出土した溝である。当初SD-6の埋土の一部として掘り進めたが、南から北へのびる溝として認識した。SD-1とSD-13との間で全長約50cm、幅65cm、検出深度は10cmを測る。埋土は灰白～褐灰色砂礫で、にぶい黄褐色シルトのブロックを含んでいる。SD-14として認識して取り上げた遺物はない。遺構検出面や埋土の特徴から古代～中世の溝と考えられる（図18）。

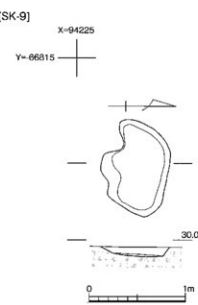


図19　00803（文京35次）調査Ⅱ-3-①層上面出土土壙実測図（縮尺1/40）

SD-15　調査区西部AF64・65区、AG65・66区で出土した溝である。断続的ではあるが、全長約9mにわたって南東から北西方向にのびる。最大幅48cm。埋土は、灰黄色砂質土で1～2cm大の円礫を含む。出土遺物は縄文土器・弥生土器片が主体である。遺構検出面や埋土の特徴から古代～中世の溝と考えられる（図18）。

SD-16　調査区南部の南壁土層のⅡ-2-①層上面で検出した溝である。埋土は灰白色粗砂層で3㎜大の粒のそろった細礫を多く含む。

SD-17　調査区南部の南壁土層のⅡ-3-①層上面で検出した溝である。埋土は灰黄褐色砂質土で粗砂が多く混じる。

2）Ⅲ層

基本層序Ⅴ層である礫層が北に向かって急激に落ち込み、Ⅴ層の上位をⅣ層が埋めた結果、調査区南西部から北西部にかけて緩やかな浅い谷状の窪地が形成されている。この谷状の窪地に自然流路であるSR-201が縄文時代後期から晩期にかけて流れる。SR-201は洪水砂によって次第に堆積していくが、窪地は完全に埋まらず、小さな窪地が残る。この窪地に、褐色砂質シルトや黒褐色シルト層が堆積する過程でⅢ層が形成されている。このⅢ層は、調査区西部が主体で、南東部に一部堆積する。Ⅲ層中出土遺物は、縄文時代晩期

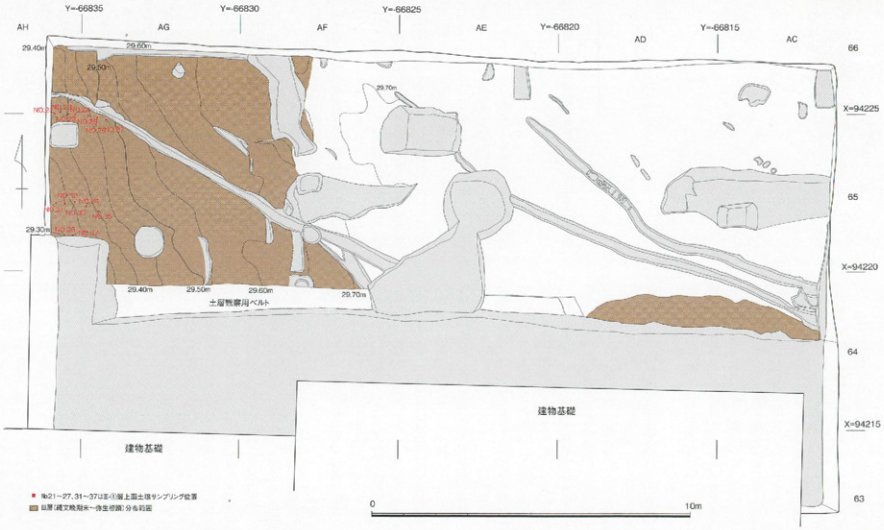


図20　00803（文京35次）調査Ⅲ層上面検出平面図（縮尺1/120）

写真49　00803（文京35次）調査調査前遠景
（北西から）

写真50　00803（文京35次）調査表土掘削後全景
（北西から）

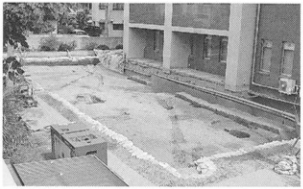


写真51　00803（文京35次）調査Ⅱ-3-①層上面検出
遺構完掘（北西から）

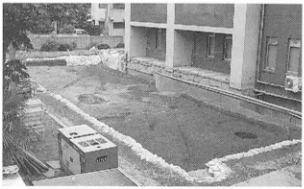


写真52　00803（文京35次）調査Ⅲ層検出全景
（北西から）

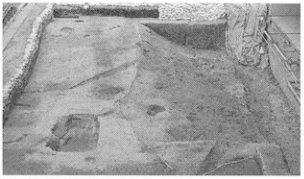


写真53　00803（文京35次）調査 SR-201（西から）

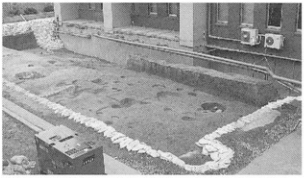


写真54　00803（文京35次）調査 SR-201（北西から）

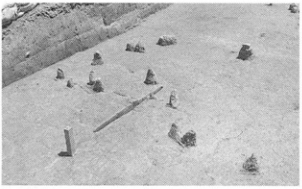


写真55　00803（文京35次）調査Ⅳ - 1 層遺物出土
状況（南西から）

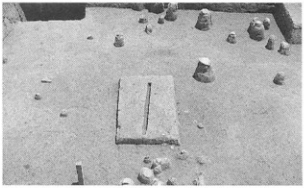


写真56　00803（文京35次）調査Ⅳ - 1 層遺物出土
状況（西から）

終末から弥生時代前期初頭の土器がほとんどで、石器や炭化物片が混じる。Ⅳ層の落ち際に沿うように遺物が出土していることから、微高地の上から窪地に生活残滓を廃棄したと考えられる。Ⅲ層が水田層である可能性があったため、土壌サンプリングを行いながら調査を行った（図20・写真52）。

3）Ⅳ層上面検出遺構

Ⅳ層上面およびⅣ層中で、竪穴式住居跡１棟、炉跡３基、土壙３基、自然流路１条、柱穴10基などを検出した（図21）。

SR-201　調査区西部ならびに南部に展開する縄文時代晩期以前の自然流路で、Ⅴ層の形成した谷状の窪地に堆積する。東から西にむけてのびるが、Y＝－66828ライン前後より西では方向を大きく変え北側に向かってのびる。文京遺跡24次調査で検出したSR-56に対応する。埋土の主体は、基本層序Ⅳ層の再堆積層であるにぶい黄褐色砂質土である。埋土中から、縄文時代後期と考えられる土器片が少量出土している。発掘調査以前には、樹木が多数植えられていた地点にあたり、木の根による攪乱が著しい（図21）。

SX-202　調査区中央部AE・AF65区で、東西方向にのびる南北幅65cmの溝状遺構を確認した。SR-201埋土を掘り下げ途中に、縄文時代晩期の土器片などが見られたことから、土壌の可能性を考えて、土層観察畦などで埋土を精査した結果、木の根による攪乱穴と判断した。埋土は黄褐色砂質土で２～10mm大の円礫を含み、木の根による巻き込みと考えられる明黄褐色砂質土のブロックを少量含む。

SX-203　AC65区で出土した炉跡である。東西方向に主軸をもつ。Ⅳ－１層掘り下げ途中で、径20cmの不整円形状に焼土面が広がることから遺構として認識できた。焼土面を中心に東西４m、南北４mに範囲を広げて精査を行ったところ、焼土面より一回り広い範囲、東西60cm、南北25～35cmで遺構の掘り形と考えられるラインを検出できた。そこで、東西方向に幅５cmで先行トレンチを設け、焼土面以下の堆積状況を確認した。先行トレンチ北壁の土層観察では、３層確認できた。一部木の根による攪乱を受けている。①層は、にぶい橙色砂質土の焼土層。炭化物などは見られない。②層は、浅黄色砂質シルトできめは細かいが、基盤層である③層に比して粘性が強い。掘り形の埋土である。層下部では、焼土ブロックが多く混じる。炭化物は見られない。③層は基盤層で、浅黄色砂質土。きめは細かい。以上の所見から、堆積層を慎重に掘り下げを行い、完掘した。残存深度は、検出面から約５cmである。SX-204やSX-208の平面プランに共通しており、注目される。屋内炉の可能性も考えられたため、周辺を慎重に精査したが、関連遺構は確認できなかった（図22、写真56～58）。

SX-204　AD65・66区で出土した炉跡である。東西方向に主軸をもつ。Ⅳ－１層掘り下げ途中で、５cm角の炭化材が集中し、Ⅳ－１層に比してやや粘性が強い地点が見られた。そこで周辺部を含めて遺構全体を行ったところ、東西85cm、南北30～40cmの不定形の掘り形ラインを検出できた。遺構の性格が不明であっため、東西方向に幅５cmの先行トレンチを設け、遺構埋土の状況を把握することとした。先行トレンチ北壁での観察では、一部木の根による攪乱を受け、埋土は１層であることを確認した。埋土は、浅黄色砂質土でややしまりがあり、５cm角の炭化材や３mm大の丸い焼土塊を斑状に含んでいる。鉄分やマンガンを多く含む。以上の所見を基に、堆積層を慎重に掘り下げ、完掘した。残存深度は検出面から約７cmを測る。SX-208はSC-211平面プランのほぼ中央に位置することから、中央炉と考えられる（図22、写真55・59・60）。

SK-205　AC・AD65区で検出した土壙である。直径約85cmの円形を呈し、西側に突出部をもつ。

埋土①は明黄褐色砂質シルトで１mm大未満の砂粒を少量含む。やや粘性がある。埋土②は浅黄色砂質土で１mm大未満の砂粒を少量含む。埋土③は浅黄色砂質土で１mm大未満の砂粒と５mm大程の円礫を含んでいる。きめは細かく、しまりがある。遺物は５～10cm大の円礫が出土しているが、そのほとんどが遺構検出レベルより上部のⅣ－１層中からの出土である（図22、写真56・61・62）。

SP-206　AD65区で出土した径30cm前後の円形の柱穴である。深さ12cm。埋土は浅黄色砂質シルトで、１辺２～３mmの炭化物片を少量含んでいる。マンガンの結核を含む。柱穴中央部から、１辺10～20cmの礫が１点出土している（図22、写真63）。

SK-207　AE65区で出土した土壙である。平面プランは、長径38cm、短径33cmの楕円形を呈する。深さ65cmを測る。埋土は、浅黄色砂質土で若干しまりがある。１mm大未満の白色粒を含む。基盤層は浅黄色砂質土で、きめは細かい。土壙中央部で１辺20cm×16cmの花崗岩礫が出土した（図22、写真64）。

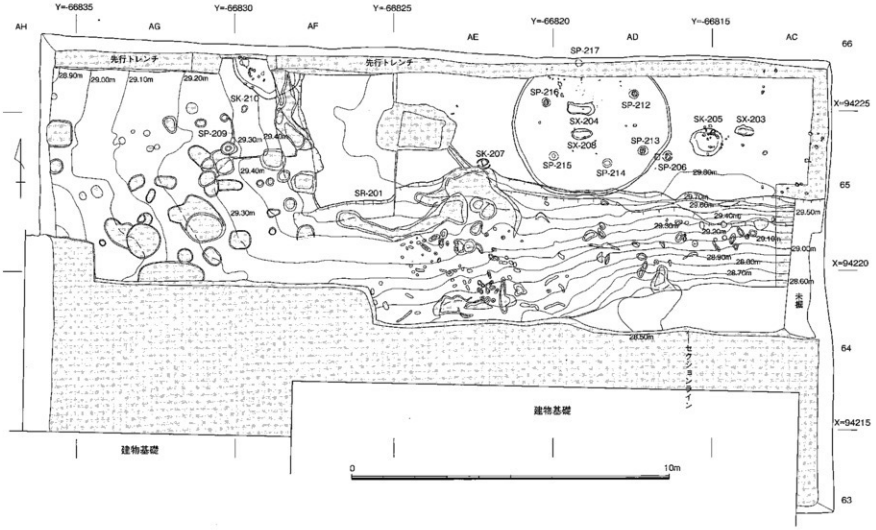


図21　00803（文京35次）調査Ⅳ層上面およびⅣ層中出土遺構配置図（縮尺1/120）

SX-208　AD65区で出土した炉跡である。東西方向に主軸をもつ。SX-204完掘後、SX-204から南へ約40cmの地点で出土した。平面プランは東西63cm、南北33cmの長楕円形状を呈する。遺構検出後、遺構の性格を確認するため、東西方向に幅６cmで先行トレンチを設定した。先行トレンチ北壁で埋土の観察を行ったところ、埋土は１層であることを確認できた。埋土は浅黄色砂質土で一部灰褐色を呈する。マンガン粒の結核や、３mm角の炭化物小片を少量含む。基盤層は浅黄色砂質土でSX-208埋土に比してきめは細かく、粘性が弱い。SX-208完掘後、周辺の遺構精査を行ったが、関連する遺構の検出には至らなかった。しかし、調査最終段階で、調査区北壁土層を観察したところ、土層断面でSC-211を検出できた。再度平面プランの検出にむけて精査を行ったところ、SC-211を検出できた。SX-204とSX-208はこのSC-211平面プランのほぼ中央に位置することから、中央炉と考えられる（図22、写真65・66）。

SP-209　AF･AG65区で出土した柱穴である。平面プランは、長径55cm、短径36cmの楕円形を呈する。深さは15cmを測る。埋土はにぶい黄色砂質土で１～40mm大の円礫を含む。柱穴中央部から１辺20cm強の花崗岩礫が１点出土した（図22、写真67）。

SK-210　AF･AG66区、Ⅳ－２層上面で、SR-201-②層の落ち込みという形で確認した土壙である。調査区北壁に沿って出土したため、全形は不明であるが、隅丸方形状を呈すると考えられる。深さは16cmを測る。底面には小さな凹凸が見られる。東辺の掘り形はⅣ－１層を掘り込んでいるため、土層断面では比較的明確に認識できた。西辺はSR-201の肩部に溜まるSR-201-②層の砂礫混じりの黄褐色砂質シルトの中位から掘り込まれている。このことから、SK-210はSR-201の埋没途中に掘り込まれた土壙である可能性が高い。SK-210埋土は、SR-201-②層と比べ、わずかに暗色のにぶい黄褐色砂質土である。土壙床面から少し浮いた状態で、縄文時代後期に位置づけられる土器片や大型礫が出土している（図22、写真68）。

SC-211　東西長4.9m、南北検出長4.1mを測る円形の竪穴式住居跡である。Ⅳ層上面における遺構精査では検出できなかった。Ⅳ－１層を約28cm掘り下げた時点で、北壁土層の精査と平面精査した結果、竪穴式住居跡を検出した。住居の北側は調査区外へとつづく。SR-201と切り合い関係にあるが、先後関係は不明である。調査区北壁土層における観察では、埋土はにぶい黄橙色砂質シルトである。床面は貼り床である。遺物は、縄文土器片、石器、炭化物片が出土しているが、時期を詳細に特定できるものはない。SC-211検出以前、Ⅳ－１層掘り下げ中に出土した遺物の分布を見ると、SC-211北西部でまとまって縄文土器が出土している。これらの土器は、いずれも縄文時代晩期に位置づけられるものである。しかしながら、SC-211埋土の特徴を見ると、基本層序Ⅳ層に類似するものであり、縄文時代後期以前のものである。現時点では、SR-201以前の、縄文時代後期～晩期と位置づけておく。竪穴式住居跡中央部でSX-204とSX-208が出土している。平面配置から竪穴式住居の中央炉と考えられる。SP-212～216はSC-211床面下で出土した柱穴である。SP-217は北壁土層断面で検出した柱穴であるが、SC-211の床面からの掘り込みである可能性が高い。いずれも平面配置から、SC-211の主柱穴を構成する柱穴と考えられる。柱穴の埋土は全体に粘性を帯び、西側の柱穴（SP-215・216）は砂性を帯びる。なお、貼り床埋土の土壙ブロックサンプリングを行っている（図21、写真69・70）。

SP-212　SC-211内の北東部で出土した直径28～30cmを測る円形の柱穴である。柱穴中央で、径15cmの柱痕跡を確認している。柱穴の埋土は２層からなる。①層はにぶい黄橙色砂質シルトでしまりがある。柱痕跡である。②層はにぶい黄橙色砂質土である。SP-212検出以前、Ⅳ－１層掘り下げ中に、SP-212周辺で木の根が出土しているが、SP-212とは直接関係はないと考えられる。

SP-213　SC-211内の南東部で出土した直径28～33cmを測る円形の柱穴である。柱穴中央で、径15cmの柱痕跡を確認している。柱穴の埋土は２層からなる。①層はにぶい黄橙砂質シルトでしまりがある。柱痕跡である。②層はにぶい黄橙砂質シルトに浅黄色砂質シルトが混じる。やや砂質が強いが、しまりがある。

SP-214　SC-211内の南部で出土した直径26～30cmを測る円形の柱穴である。柱穴の埋土は２層からなる。①層はにぶい黄橙色砂質シルトでしまりがある。②層は①層とほぼ同じであるが、やや粘性が強い。

SP-215　SC-211内の南西部で出土した直径26～28cmを測る円形の柱穴である。柱穴の埋土は２層からなる。①層はにぶい黄橙色砂質シルトでしまりがある。②層はにぶい黄橙色砂質土でしまりがある。

SP-216　SC-211内の西部で出土した直径26～27cmを測る円形の柱穴である。柱穴中央で径17cmの柱痕跡を確認している。柱穴の埋土は2層からなる。①層はにぶい黄橙色砂質シルトである。Ⅰ層からのびる生物擾乱痕跡が見られるが、①層全体に及ぶものではない。②層はにぶい黄橙色砂質土でやや砂性を帯びる。

SP-217　調査区北壁で出土した確認径18cmを測る柱穴である。埋土はにぶい黄橙色シルトである。住居床面の硬化面に比してしまりがない。

SP-218　調査区北壁で検出した柱穴である。Ⅳ-2層上面でⅣ-1層が大きく落ち込むことから、柱穴と考えた。

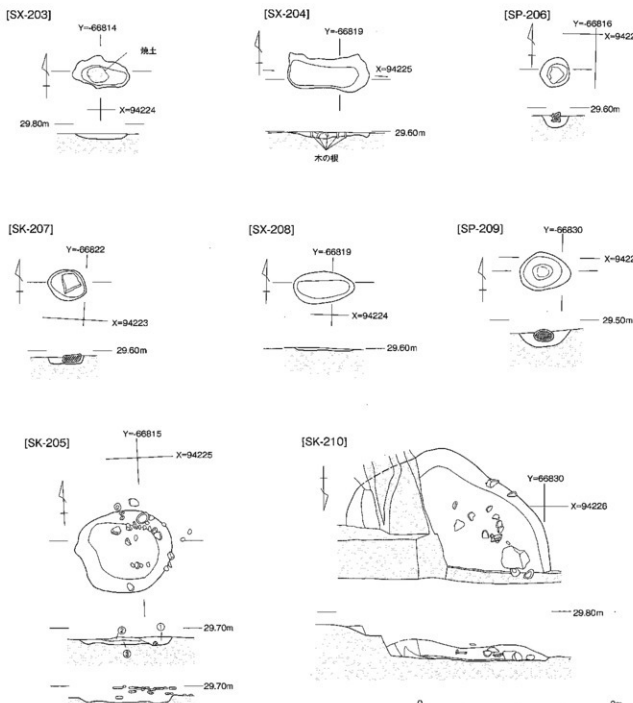


図22　00803（文京35次）調査Ⅳ層中出土遺構実測図（縮尺1/40）

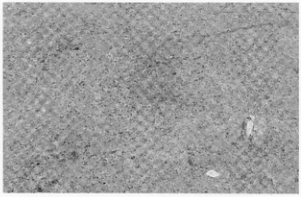


写真57　00803（文京35次）調査 SX-203検出（南から）

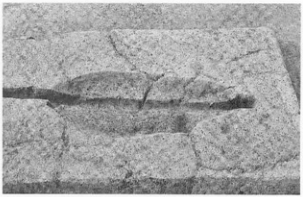


写真58　00803（文京35次）調査 SX-203（南から）

写真59　00803（文京35次）調査 SX-204検出（南から）

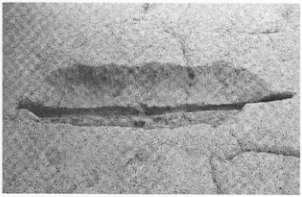


写真60　00803（文京35次）調査 SX-204（南から）

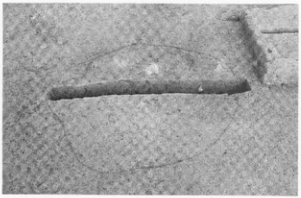


写真61　00803（文京35次）調査 SK-205 検出（南から）

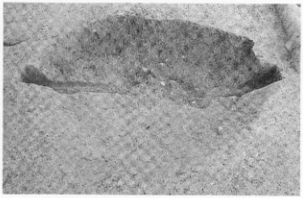


写真62　00803（文京35次）調査 SK-205（南から）

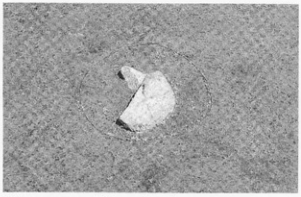


写真63　00803（文京35次）調査 SP-206検出（南から）

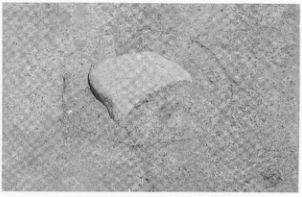


写真64　00803（文京35次）調査 SK-207検出（南から）

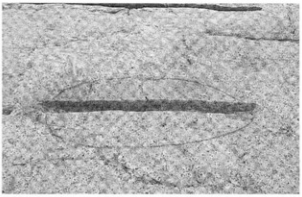


写真65　00803（文京35次）調査 SX-208検出（南から）

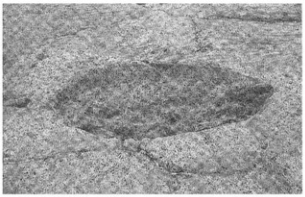


写真66　00803（文京35次）調査 SX-208（南から）

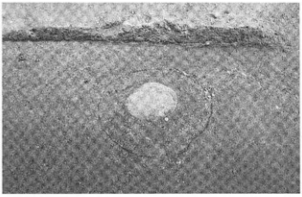


写真67　00803（文京35次）調査 SP-209検出（北から）

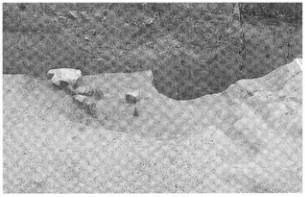


写真68　00803（文京35次）調査 SK-210（南から）

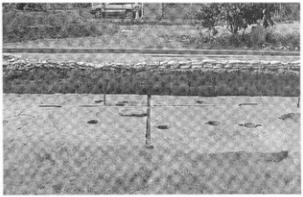


写真69　00803（文京35次）調査 SC-211（南から）

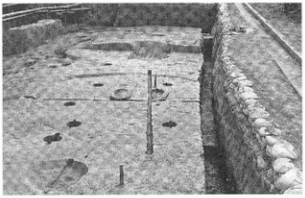


写真70　00803（文京35次）調査 SC-211（東から）

SP-219　調査区北壁で検出した柱穴である。Ⅳ-2層上面でⅣ-1層が大きく落ち込むことから、柱穴と考えた。

(b) Ⅱ区（P１）の調査

南北1.2m、東西長1.9m、南北幅1.2mの長方形の調査区である。現地表面から53cmまで瓦礫を伴う造成土層であるⅠ層、78cmまでⅡ層が続く。Ⅱ層は、オリーブ褐色砂質シルトで、やや粘性があり、しまりもある。角のとれた１㎜大の砂粒が全体的に多く混じる。２～６㎜大のマンガン粒、３～６㎜角の炭化物をわずかに含む。Ⅱ層の直下で、Ⅴ層が出土した。Ⅴ層は、暗褐色砂礫層で２～10cm大の円礫を含む。上部は２～５cm大の円礫が多く、礫間に粗砂の堆積をはさむ。下部は10cm大の亜角礫～亜円礫が多い。外灯基礎工事に伴う掘削は、現地表下150cmまでであるが、Ⅴ層が続いていると判断し、現地表下113cmまで掘り下げた所で調査を終了した（図23、写真71）。

(c) Ⅲ区（P２）の調査

東西南北約１.３m四方の正方形の調査区である。現地表下118～128cmまで瓦礫を伴った造成土層である

Ⅰ層が続く。Ⅰ層の直下でⅢ層が出土した。Ⅲ層は、Ⅲ-①層とⅢ-②層とからなる。Ⅲ-①層は層厚約10cmで、東から西へ斜めに堆積する。黒褐色シルト質土で、粘性およびしまりがある。微細な白色粒・マンガン粒をまばらに含んでいる。Ⅲ-②層は、Ⅲ-①層とⅣ層の漸移層で、層厚は6～7cmである。にぶい黄褐色シルト質土で、上層に比べて粒が細かく、粘性およびしまりともに強い。2～5mm大のマンガン粒を多く含んでいる。Ⅲ-②層下でⅣ層が出土した。Ⅳ層は、にぶい黄褐色シルト質土で上層と同質だがマンガン粒の混じりは少ない。現地表下150cmまで掘り下げた所で調査を終了した。Ⅲ-①・②層から縄文時代晩期～弥生時代前期の土器片が出土している（図23、写真72）。

4　調査のまとめ

今回の調査では、古代～中世の溝、縄文時代晩期の土器溜まり、縄文時代後期～晩期の自然流路や竪穴式住居跡が出土した。今回の調査区に隣接する文京遺跡21・24次調査の成果とあわせて、理学部構内東部地区における縄文時代～中世の遺跡展開を把握することができた。その中でも、縄文時代後期～晩期に位置づけられる竪穴式住居跡は、注目される。これまで、周辺では縄文時代後期～晩期の土壙や土器・石器・炭化物

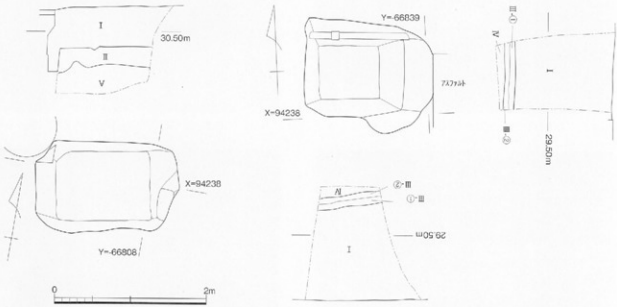


図23　00803（文京35次）調査Ⅱ・Ⅲ区実測図（縮尺1/50）

写真71　00803（文京35次）調査Ⅱ区北壁土層（南から）

写真72　00803（文京35次）調査Ⅲ区東壁土層（西から）

集中地点などが多数見つかっており、集落が展開していることを予想していたが、竪穴式住居跡の発見により、確実となった。また、文京遺跡のみならず、松山平野を見ても、沖積低地における竪穴式住居跡の検出例はごくわずかである。今回の調査で出土した縄文時代後期～晩期の竪穴式住居跡は集落研究に大きく寄与する資料と言えよう。

なお、今回の調査では、プラント・オパール分析を宮崎大学農学部宇田津徹朗氏、火山ガラス分析を愛媛大学理学部榊原正幸氏に依頼・実施している。分析結果などについては、正式報告書にて報告を予定している。

（三吉・田崎）

00804　城北団地総合教育研究棟（Ⅱ期）耐震改修その他工事に伴う調査 －文京遺跡36次調査－

調査地点　松山市文京町３番
　　愛媛大学城北団地
調査面積　690.2㎡
調査期間　2008年９月１日～2009年３月19日
調査種別　本格調査
調査担当　吉田広・田崎博之・三吉秀充
調査補助　宮崎直栄・濱田美加
依頼文書　施設基盤部長発事務連絡
　　（平成20年５月７日付）

1　調査にいたる経緯

2007年度に共通教育管理棟北側の耐震補強工事が行われたが、2008年度は引き続いて共通教育管理棟南側の耐震補強工事が計画された。施設基盤部から、具体的工事計画内容が埋蔵文化財調査室に提示されたのは５月７日。埋蔵文化財調査室では、５月12日～15日に10箇所のトレンチによる試掘調査（00802調査）を実施して、工事範囲内の埋蔵文化財の状況を確認した。その結果、建物外壁周囲の耐震補強基礎工事範囲のすべてに加え、建物内部ピットについても埋蔵文化財が残り、工事により影響が及ぶと判断された。

試掘結果を６月３日付けで施設基盤部に報告するとともに、６月９日付けで松山市教育委員会提出の土木工事届に意見書として添付した。その後、発掘調査費用の確保について、工法変更や対象面積の縮減などの協議を埋蔵文化財調査室と施設基盤部で行い、土木工事届図面の再提出も考慮されたため、土木工事届の通知は７月29日にずれ込んだ。

通知内容に対して、さらに調査面積を縮減するなどの変更を行った上で、８月８日付けで発掘届を提出した。その間、決定した施工業者との協議も重ねながら、発掘調査準備を進めた。発掘届に対する通知は８月25日付けで確認し、それまでの協議に基づき、９月１日から、発掘調査を開始することとした。

なお、調査開始後に工事内容に変更が生じ、改めて土木工事届・発掘届を提出し直し、新たに調査範囲が広がった。また、一部工事において計画深度を越えて掘削が及んだため、急遽事後調査も実施している。

2　調査の記録

発掘調査は９月１日に開始し、工程の順番毎に地区名をⅠ区から与えていき、最終的にⅩⅦ区に及んだ（図24）。ⅩⅦ区までの調査を終えたのは2009年２月16日。土木工事届に記載した掘削工事はなお続き、これらに対する工事立会すべてを終了したのが３月19日である。工事立会を除いた発掘調査面積は、690.2㎡に達する。出土した遺構は、表８に示すとおりである。

(1)　Ⅰ区（図25、写真73～81）

Ⅰ区は、共通教育管理棟南棟南側外壁に接した耐震補強基礎設置工事に伴うもので、南北幅約2.5m・東西長約45mを測り、検水槽設置に伴う西端部は南北幅約4.5mである。面積は120㎡に達し、調査は９月１日から30日のちょうど１ヶ月に及んだ。

城北団地基本層序のⅠ・Ⅱ層を重機で、そして管路と建物余掘りを丁寧に手作業で取り除いたところ、建物柱基礎周囲と、調査区中央を東西に走る下水管埋設に伴う攪乱以外は、Ⅲ層ないしⅣ層以下が残存していた（写真73）。およそCU区東半以東はⅡ層下で直接Ⅳ層が出土し、DA区西半以西は、Ⅱ層下でⅣ層内の

流路内堆積とみられるしまりの弱い砂礫層が出土している（写真81）。この他は、薄いもののⅢ層が広がり、Ⅲ層を掘り下げた後、遺構検出を行った。出土した遺構は、竪穴式住居３棟（SC-116・117・123）、土壙１基（SK-106）、柱穴17基（SP-101・102・105・107～115・118～122）である。これらの遺構を調査した後、南壁際Ⅳ層を断ち割り、縄文時代遺跡の広がりを探索したが、Ⅳ層内での遺物出土はなく、土壌化層も確認できなかった（写真80）。

SC-116　CV34・35区、CW34・35区、CX34区で出土した竪穴式住居。東側のSC-117を切り、さらに下部のSC-123を切る。ただし、SC-123は掘り下げ時にSC-116と一括したままで、調査区南壁の土層確認によりSC-116から分離したものである。SC-116は、円形住居のやや北寄りの部分が調査区にかかっているとみられ、調査区内での東西幅は約7.5m。本来8.5m前後の大型円形の可能性が高い。深さは10～20cm前後が残る。床面には焼土や炭化物が広がるが、炉や柱材などの明確な構造物の痕跡は認められなかった。主柱穴は、最終掘削面であるSC-123床面出土の、柱痕跡が残るSP-118・119にその可能性がある。遺物は、弥生中期後葉前後の土器と敲石などが出土している（写真78・79）。

SC-123　SC-116の下部で出土した竪穴式住居。調査区南壁で約６ｍがかかり、平面は東側が一部認められたのみ。本来の円形住居の南寄り部分が調査区内にかかっていることになる。深さは10～20cmが残り、埋土からは弥生土器小片が若干出土している。なお、

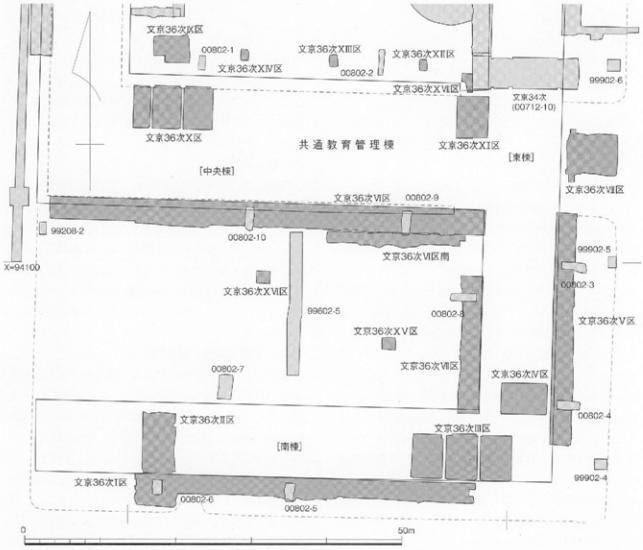


図24　00804（文京36次）調査調査区配置図（縮尺1/500）

表8　00804（文京36次）調査出土遺構一覧

調査区	遺構の種類	遺構番号	総数
Ⅰ区	竪穴式住居（SC）	SC-116・117・123	3
	土壙（SK）	SK-106	1
	柱穴・小穴（SP）	SP-101・102・105・107～115・118～122	17
Ⅱ区	竪穴式住居（SC）	SC-204	1
	土壙（SK）	SK-205	1
	自然流路（SR）	SR-203	1
	柱穴・小穴（SP）	SP-201・202・206～214	11
Ⅲ区	柱穴・小穴（SP）	SP-301～305	5
Ⅳ区	自然流路（SR）	SR-401	1
	柱穴・小穴（SP）	SP-402・403	2
Ⅴ区	自然流路（SR）	SR-502・505・506	3
	性格不明遺構（SX）	SX-507	1
	柱穴・小穴（SP）	SP-501	1
Ⅵ区	竪穴式住居（SC）	SC-612	1
	土壙（SK）	SK-615・616	2
	溝（SD）	SD-605・620	2
	自然流路（SR）	SR-601～603	3
Ⅵ区	柱穴・小穴（SP）	SP-604・606～611・613・614・617～619・621～	16
Ⅶ区南	溝（SD）	SD-605	1
Ⅶ区	自然流路（SR）	SR-701・704・705	3
	柱穴・小穴（SP）	SP-703	1
Ⅶ区	土壙（SK）	SK-802	1
	自然流路（SR）	SR-801	1
Ⅸ区	自然流路（SR）	SR-901	1
Ⅹ区	自然流路（SR）	SR-1001	1
ⅩⅠ区	自然流路（SR）	SR-1101	1
ⅩⅡ区	自然流路（SR）	SR-1201	1
ⅩⅢ区	自然流路（SR）	SR-1301	1
ⅩⅣ区	遺構は出土していない。		
ⅩⅤ区	土壙（SK）	SK-1503	1
	柱穴・小穴（SP）	SP-1501・1502	2
ⅩⅥ区	遺構は出土していない。		
ⅩⅦ区	遺構は出土していない。		

床面で大型の緩やかな凹みと、SP-118～121の柱穴が出土している（写真79）。

SC-117　CV34区で出土した竪穴式住居。SC-116に切られ、外形はSC-116にほぼ平行し、幅約90cm、深さ10～15cmが残るのみ。床面でSP-122が出土している（写真79）。

SK-106　CZ34･35区、DA34･35区にまたがり、北側を排水管に切られ、南側は調査区外へと広がる土壙。東西約2.5m、南北確認幅0.8mで、深さは20～30cmと底面にやや凹凸がある。遺物は東半から多く出土し、弥生中期後葉の壺・甕や磨石が含まれている（写真76）。

SP-101　調査区東端CT34区で出土した柱穴。径約20cm、深さ約10cm。中央部に径約8cmの柱痕が残る。最上部から花崗岩を用いた磨石が出土するとともに、弥生土器甕口縁部片が出土している。

SP-102　CU34区出土の、径約20cm、深さ約7cmの柱穴。出土遺物はない。

SP-105　DB35区に所在した柱穴。先行の試掘調査（00802調査）6トレンチで重機掘削した際に東壁で確認したSP-4にあたる。東半は残存していたが、本調査重機掘削の際、基盤層がしまりの弱い砂礫層であったため掘りとばしてしまった。

SP-107　DA35区、東側と南側を攪乱で切られ、およそ北西1/4が残存する柱穴。深さ約30cmが残り、平面復元は径70～80cmに達する（写真74）。後述するSP-108とともに建物を構成する可能性が高い（写真76）。弥生土器甕胴部下半片、高坏円盤充填部片が出土している。

SP-108　CZ35区出土の柱穴。西側1/3を攪乱で切られるが、径約70cm、深さ約40cmを測る。柱痕跡が一部残り、柱穴底のレベルは27.10mで、SP-107と一致する（写真75）。出土遺物には、弥生土器壺胴部下半・底部片などがある。

SP-109　CY35区出土で、北半は建物地中梁による攪乱を受けている。径約25cm、深さ約12cm。遺物は出土していない。

SP-110　CY35区出土で、SP-111を切る。径約25cm、深さ約5cm。弥生土器細片が出土している。

SP-111　CY35区出土で、SP-110に切られ、長径約28cm、短径約18cm、深さ約3cm。弥生土器壺胴部片が出土している。

SP-112　CY34区出土。径約22cm、深さ約5cm。弥生土器細片が出土している。

SP-113　CY34区出土。SP-112に切られ、南壁は調査区外へと続く。長径約30cm、短径約20cm、深さ約

写真73　00804（文京36次）調査Ⅰ区表土掘削後
（西から）

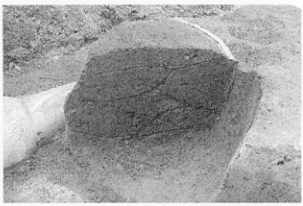


写真74　00804（文京36次）調査Ⅰ区 SP-107土層
（北東から）

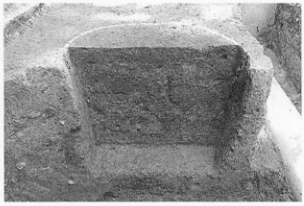


写真75　00804（文京36次）調査Ⅰ区 SP-108土層
（西から）

写真77　00804（文京36次）調査Ⅰ区 SP-115土層
（北西から）

写真76　00804（文京36次）調査Ⅰ区 SK-106・
SP-107・108完掘　（東から）

5cm。弥生土器細片と炭化物が出土している。

SP-114　CX34区出土。先行の試掘調査（00802調査）5トレンチで平面検出していたSP-3にあたる。径約26cm、深さ約12cm。弥生土器細片が出土している。

SP-115　CX34区出土で、東側を排水桝、北側を排水管で撹乱され、南西約1/4が残るのみ。ただし、復元径は50～60cmと大型で、深さも50cmに達し、柱痕跡が残る。そして柱痕跡の上部には、口縁部を欠き東傾半身を排水桝撹乱で欠損しているものの、ほぼ正位に据え置かれたような状態で弥生土器壺が出土した（写真77）。

SP-118　CX34区のSC-123床面で出土した柱穴。径約18cm、深さ約5cmで、径約8cmの柱痕が残る。SC-116の主柱穴の可能性がある。

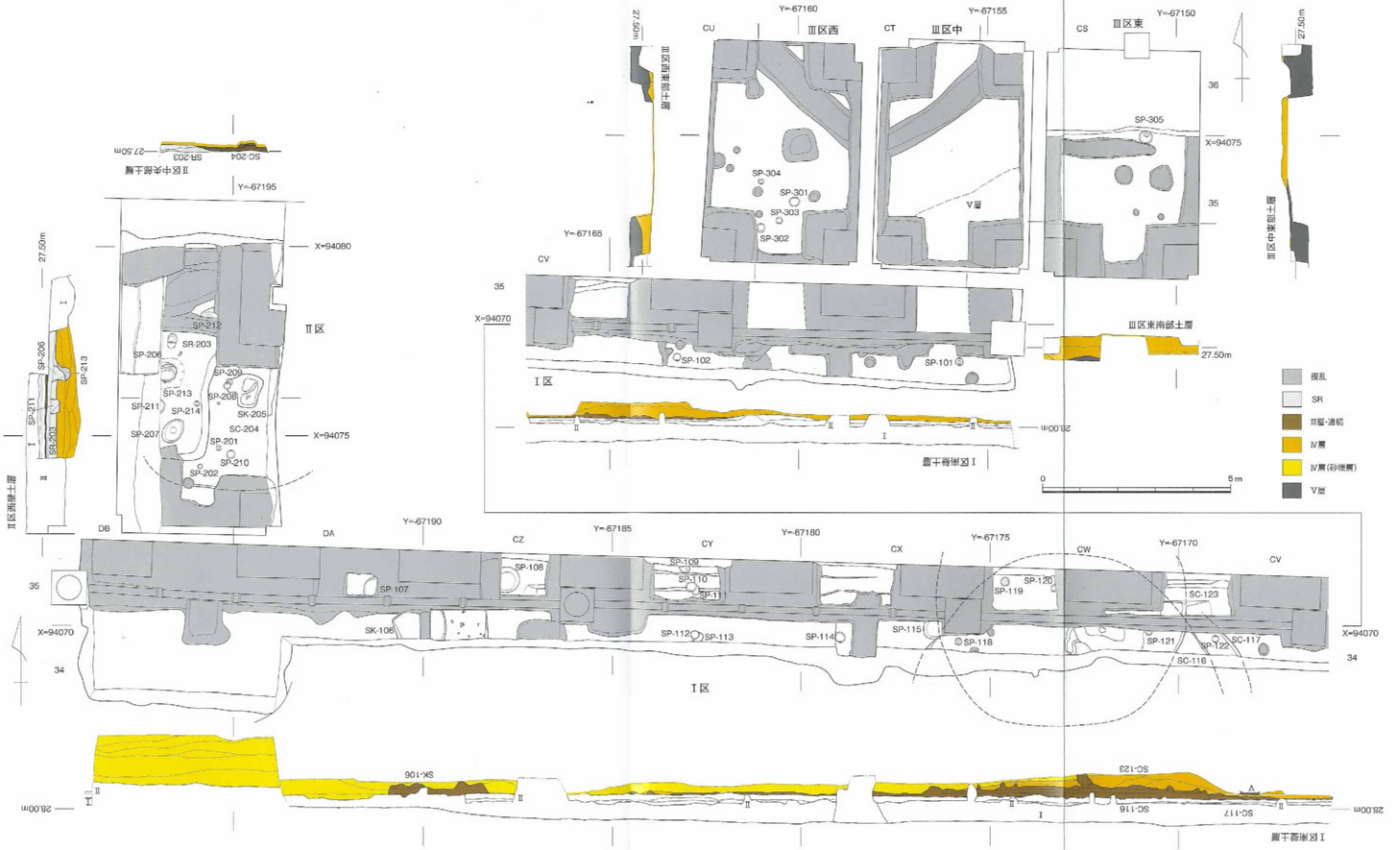


図25　00804（文京36次）調査Ⅰ～Ⅲ区実測図（縮尺1/100）

写真78　00804（文京36次）調査Ⅰ区 SC-116焼土・炭化物層（北西から）

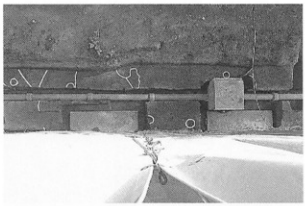


写真79　00804（文京36次）調査Ⅰ区 SC-116・117・123完掘（北から）

写真80　00804（文京36次）調査Ⅰ区南壁（CU区）土層（北西から）

写真81　00804（文京36次）調査Ⅰ区西端砂礫層断割（北東から）

SP-119　CW35区のSC-123床面で出土した柱穴。径約22cm、深さ約６cmで、径約10cmの柱痕が残る。SC-116の主柱穴の可能性がある。

SP-120　CW35区のSC-123床面で出土した柱穴。東半が攪乱で切られる。径約20cm、深さ約８cm。

SP-121　CW34区のSC-123床面で出土した柱穴。北側を攪乱で切られる。径約20cm、深さ約４cm。

SP-122　CV34区のSC-117床面で出土した柱穴。東半が攪乱で切られる。径約18cm、深さ約４cm。弥生土器甕口縁部小片が出土している。

(2)　Ⅱ区（図25、写真82～86）

Ⅱ区は、共通教育管理棟南棟建物内部西寄りの１スパンに設置されるピットに伴う調査区。廊下を含んだ１スパンの東側約2/3にあたり、南側は外壁を隔ててⅠ区西端に接する。東西幅約３m、南北長８m、面積約24㎡を調る。周辺調査区との関係で、９月17・18日に表土掘削を行った後、９月30日から10月２日、17日から22日に調査を行った。

建物内部での重機掘削により、その排気ガスに苦慮しながら、城北団地基本層序のⅠ・Ⅱ層を取り除いたところ、建物柱基礎周囲と一部の攪乱を除いて、暗褐色砂質土が広がった。暗褐色砂質土を城北団地基本層序Ⅲ層として少しずつ掘り下げ、遺構検出を行ったところ、竪穴式住居１棟（SC-204）、その中央土壙１基（SK-205）、流路堆積（SR-203）、そして柱穴11基（SP-201・202・206～214）が出土した（写真82）。これらの調査後、西壁際のⅣ層を断ち割ったが、土壌化層あるいは土器・炭化物などは出土しなかった（写真86）。

SR-203　調査区内のⅢ層を全体に数cm程度掘り下げたところ、調査区西側約半分に、砂粒・砂礫を多く含んだ水性堆積が広がり、これをSR-203とした。埋土厚さは20cm前後で、北側に向かってやや薄くなる（写真83）。底は基本的にⅣ層に達しており、底面でSP-206・207・211～214が出土した。ただし、これらのうち、SP-206・211は西壁土層でSR-203を切り込み、SP-213はSR-203に先行することが明らかである。SR

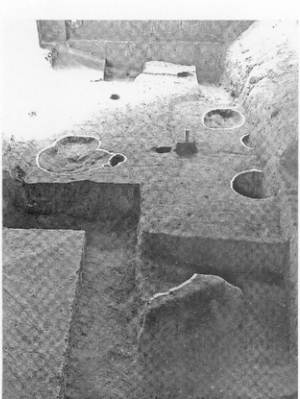


写真82　00804（文京36次）調査Ⅱ区完掘（北から）

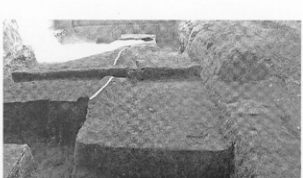


写真83　00804（文京36次）調査Ⅱ区 SR-203（北から）

写真84　00804（文京36次）調査Ⅱ区 SP-206・213
（東から）

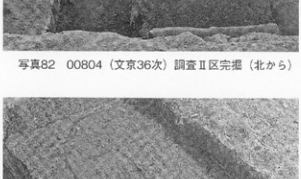


写真85　00804（文京36次）調査Ⅱ区 SK-205検出
（北西から）

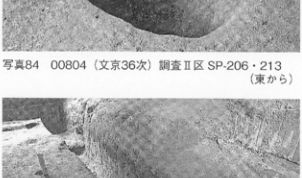


写真86　00804（文京36次）調査Ⅱ区西壁土層
（北東から）

-203からは、弥生中期後葉の土器が出土するとともに、同一素材を用いた柱状片刃石斧完品と扁平片刃石斧破片が出土している。

SC-204　SR-203に切られ、調査区南東側に広がる。調査区南端部でわずかに南辺の一部が出土し、調査区中央部東寄りに中央土壙SK-205が認められた。わずかな南辺は直線的であるが、本来の外形は中央土壙を中心に径５ｍ前後の円形と推測される。南辺部で残存深さ５㎝程度、中央土壙付近で10㎝前後。床面では中央土壙SK-205の他に柱穴・小穴（SP-208～210）が出土しているが、主柱穴とみられるのは、SR-203下面出土のSP-212である。SC-204からは、中央土壙SK-205も含めて、弥生中期後葉の土器が出土している。

SK-205　調査区中央部東寄りで出土したSC-204の中央土壙（写真85）。東西約100cm・南北約90cmで南西側がやや凹み、深さ10cm前後の浅い皿状。埋土最上部に厚さ２～４cmの炭化物層が薄く広がり、西側脇に小穴２基（SP-208・209）がある。埋土下部も黒みの強い砂質土である。

SP-201　Ⅲ層を掘り下げ中最初に検出した、やや色調の薄い埋土の小穴２基がSP-201と202である。SP-201はDB35区に位置し、径約12cm、深さ約３cm。

SP-202　SP-201と同じく、やや色調の薄い埋土の小穴。径約12cm、深さ約５cm。

SP-206　調査区中央部、西壁際で出土した柱穴。西壁土層から、SR-203上層下面からの掘り込みが確認でき、下部でSP-213を切っている（写真84）。復元径は40cm前後で深さ約30cm。弥生中期後葉の土器が出土している。

SP-213　SP-206の下部、SR-203を掘り切ったⅣ層上面で検出した。砂粒・砂礫を多く含んだ埋土からなり、とくに最下層は１～２cm大の円礫で構成される（写真84）。弥生中期後葉の土器が出土している。

SP-207　調査区南西部のSR-203下面で出土した柱穴。長径約70cm、短径約45cm、深さ約８cm。径約15cmの柱痕が認められる。

SP-208　SK-205西端部の小穴。SP-209を切る。径約17cm、深さ約14cm。

SP-209　SK-205西端部の小穴。SP-208に切られる。径約18cmで、２段掘りとなり最深部の深さは約７cm。

SP-210　調査区南部、SC-204床面で出土した柱穴。径約20cm、深さ約12cm。弥生土器片が出土している。

SP-211　調査区西壁際で東側の一部が出土した柱穴。西壁土層から、SR-203上層下面からの掘り込みが確認でき、同様のSP-206と組み合わさる可能性が高い。径は40cm前後と推測され、深さ約24cm。

SP-212　調査区北部のSR-203下面で出土した柱穴。南半を攪乱で切られるが、径50cm以上に復元でき、深さ約25cm。中央に径約15cmの柱痕が残る。SC-204の主柱穴となる可能性がある。弥生土器片が出土している。

SP-214　SR-203下面で出土した小穴。径約12cm、深さ約８cm。弥生土器片が出土している。

(3) Ⅲ区（図25、写真87～89）

Ⅲ区は、共通教育管理棟南棟建物内部東寄りの３スパン分に設置されるピットに伴う調査区である。スパン間の壁布基礎あるいは壁を残したままの調査で、３ブロックに分断され、西からⅢ区西（写真87）、Ⅲ区中（写真88）、Ⅲ区東（写真89）とした。Ⅲ区東はスパン内のおよそ南2/3が調査範囲で、Ⅲ区中とⅢ区東の間がちょうどⅠ区東辺に相当する。Ⅲ区総面積は64㎡。調査は９月16日から26日の間である。

城北団地基本層序のⅠ・Ⅱ層を取り除いたところ、建物柱基礎周囲と一部の攪乱を除いて、教室床下には未攪乱層が残る。ただしⅢ層は存在せず、Ⅰ・Ⅱ層直下でⅣ層が現れ、Ⅲ区中の南東部ではⅤ層が現れた。これらの上面で、一部遺構の残存を確認した。出土したのはSP-301～305の柱穴・小穴５基のみである。また、一部断ち割りを行ったⅣ層からも、土壌化層や遺物は出土していない。

SP-301　Ⅲ区西、CU35区出土の小穴。径約28cm、深さ約10cm。土器細片が出土している。

SP-302　Ⅲ区西、CU35区出土の小穴。長径約23cm、短径約20cm、深さ約７cm。

SP-303　Ⅲ区西、CU35区出土の小穴。径約18cm、深さ約６cm。

SP-304　Ⅲ区西、CU35区出土の小穴。径約15cm、深さ約３cm。弥生土器片が出土している。

SP-305　Ⅲ区東、CS35区出土の柱穴。径約35cm、深さ約18cmで、長径約18cm・短径約14cmの柱部分が約５cm、さらに一段深くなっている。

(4) Ⅳ区（図26、写真90～92）

Ⅳ区は、共通教育管理棟東棟南部に位置する１スパン分のピットに伴う調査区。南北約４m、東西約６m、面積約24㎡である。東側は外壁を挟んでⅤ区に接し、西側は廊下部分を挟んでⅦ区に隣接する。調査は９月19日から24日、29日から10月14日にわたって行った。

城北団地基本層序のⅠ・Ⅱ層を取り除いたところ、建物柱基礎周囲と、調査区中央部やや西寄りに東西方向のやや弓弧を描いた溝による攪乱がみられたが、ここでも教室床下に未攪乱層が残っていた（写真90）。暗褐色から黒褐色の砂質土であり、城北団地基本層序のⅢ層として掘り下げて遺構検出を行ったが、調査区内全域が流路内堆積と判明し、SR-401とした（写真91）。調査後にⅣ層を一部断ち割ったが、15～35cm程度と薄く、土壌化層や遺物などはみられなかった。

SR-401　調査区ほぼ全域に広がるが、西流する流

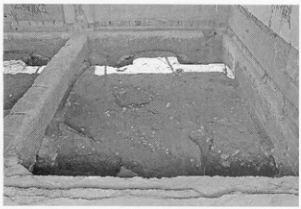


写真87　00804（文京36次）調査Ⅲ区西遺構検出（北から）

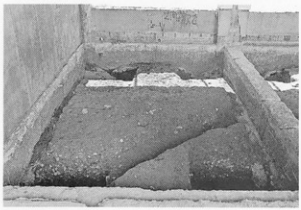


写真88　00804（文京36次）調査Ⅲ区中完掘（北から）

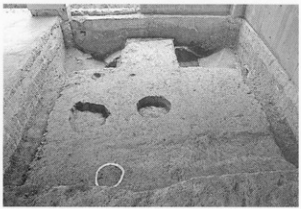


写真89　00804（文京36次）調査Ⅲ区東遺構検出（北から）

路の北岸から最深部にあたる。底面は凹凸があり、一部分流をなすような起伏も認められ、これに伴うとも見える小穴あるいは杭跡が底面で2基認められた。浅い溝の両側で対峙するSP-402・403である。SR-401埋土は、最上層が黒褐色のシルト質土で、その下に通常のⅢ層より明らかに色調の薄い灰黄褐色砂質土がある。そして、最下層に褐灰色の砂礫層が堆積するが、北側やや高位では薄く、南側では10～15cmと厚く、10cm大の円礫を多く含んでいる（写真92）。遺物はいずれの層からも多く出土し、弥生中期後葉とみられる。なお、SR-401の東側上流にあたるのが、Ⅴ区SR-506、西側下流がⅦ区SR-706である。

SP-402　SR-401底面の浅い溝状の落ち込みの北側斜面で出土した小穴。落ち込みを挟んで、SP-403と対峙する位置にある。径約8cm、深さは北側高位から約10cm。埋土は暗褐色砂質土で粘性がややある。

SP-403　SP-402の南側、浅い溝状の落ち込みを挟んだ位置で出土した小穴。径約7cm、深さ約7cm。埋土は暗褐色砂質土で粘性がややある。

(5) Ⅴ区（図26、写真93～97）

Ⅴ区は、共通教育管理棟東棟南部の建物東側外壁に接した耐震補強基礎設置工事に伴うもので、南北幅約2.7m・東西長約30mを測り、面積は約81㎡。調査期間は10月2日から17日である。

城北団地基本層序のⅠ・Ⅱ層を重機で掘り下げ、管路と建物余掘りを丁寧に手作業で取り除くと、建物柱基礎周囲に撹乱が深く及び、建物に平行する管路による撹乱などもあって、遺構およびⅣ層以下の残りは良くない（写真93）。東部のCQ40～42区では、Ⅰ層ないし薄いⅡ層の下でⅣ層が出土し、遺構は小穴SP-501を確認したのみである。中央CQ39区周辺では撹乱が深く及ぶが、流路内堆積の一部が残り、SR-502とした。CQ38区以南でも流路内堆積が広がり、壁面土層からSR-505とSR-506の2単位が見いだせ、さらに調査区南端部では、流路内堆積とは異なる埋土の遺構がみられ、SX-507とした。これらの遺構の調査後に、Ⅳ層を重機で断ち割ったが、土壌化層や遺物などはみられなかった（写真97）。

SP-501　調査区北端近く、CQ41区のⅣ層上面で出土した小穴。径約8cm、深さ約5cm。出土遺物はない。

SR-502　CQ38・39区出土の西流する流路。北部は、撹乱が激しいことと、Ⅳ層が薄くⅤ層が高まる基盤であったため平面検出を誤り、東壁土層での確認となった。最深部から南側は辛うじて平面的にも認識でき、SR-505の堆積が薄く被った下でSR-502南岸の一端を認めた。埋土は砂礫を多く含み、下部には20cm大の塊

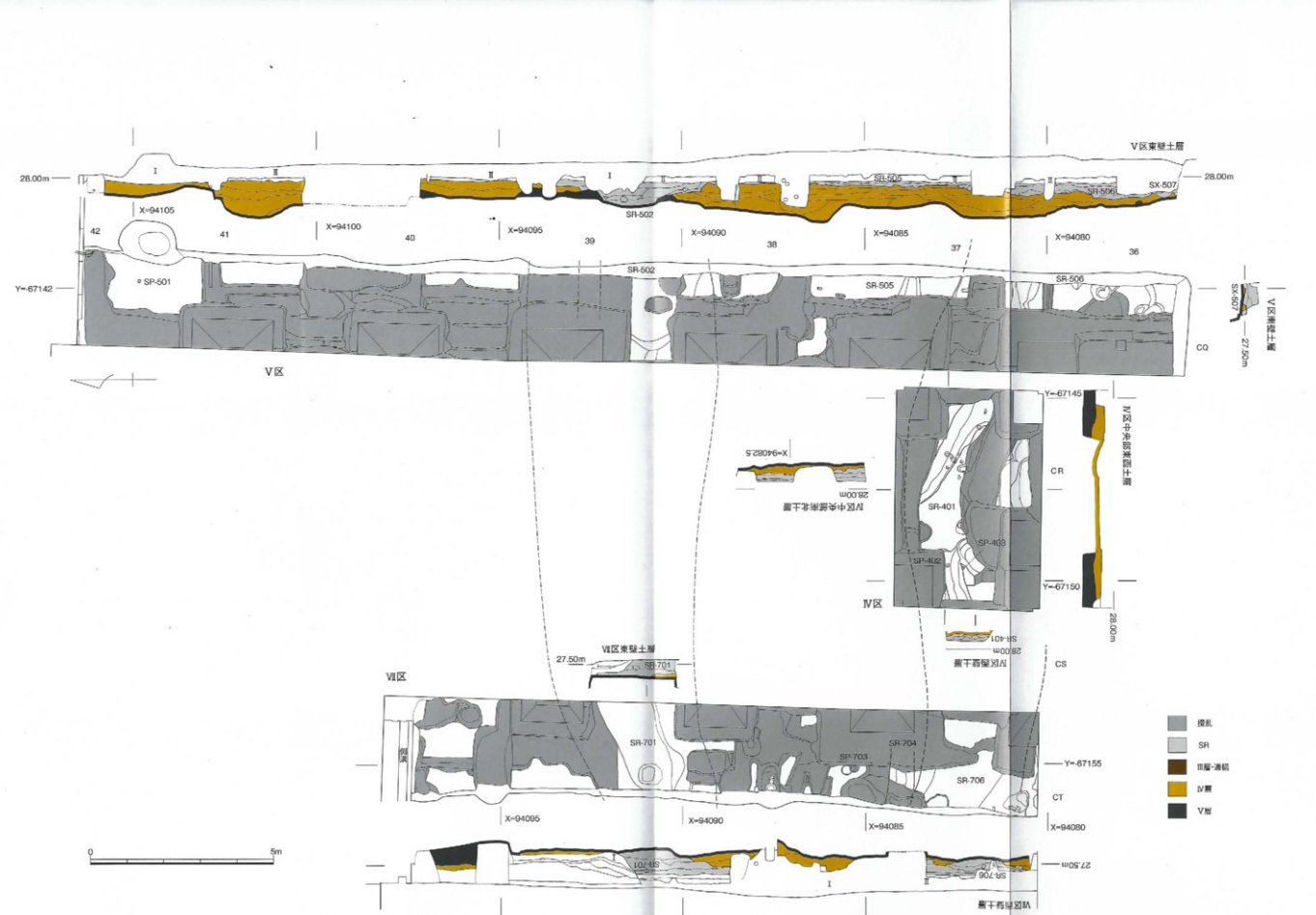


図26　00804（文京36次）調査Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ区実測図（縮尺1/100）

写真90　00804（文京36次）調査Ⅳ区表土掘削後（東から）

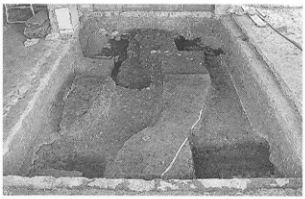


写真91　00804（文京36次）調査Ⅳ区遺構検出（東から）

写真92　00804（文京36次）調査Ⅳ区 SR-401（東から）

石もみられる（写真94）。出土遺物には、撹乱出土が混じるものの、弥生前期土器があり、中期後葉の土器はみられない。西側Ⅶ区のSR-701に連なるとみられる。

SR-505　CQ37・38区の、Ⅰ・Ⅱ層下、Ⅳ層の上に5～20cm程度と薄く堆積する砂質あるいは砂礫質土。底面の凹凸はあまりない。北側はSR-502の上に、南側はSR-506の上に被る。凹線文をもつ弥生中期後葉の土器が出土している。

SR-506　CQ36・37区のSR-505下で出土した流路内堆積。北岸の一端を認めたが、南側は調査区外へと及んでいる。埋土は最上部に黒褐色のシルト質土が溜まり、下部に灰黄褐色砂質土、最下部に褐灰色砂礫層が堆積し、深さ約40cmに達する（写真95・96）。埋土の特徴そして位置から、Ⅳ区SR-401の東側上流部にあたる。弥生中期後葉の土器が比較的多く出土している。

SX-507　調査区南端部は、南東－北西方向の溝状の撹乱が深くに及び、それと柱基礎に挟まれた南壁際部が三角形状に残るに過ぎなかった。撹乱掘り下げ時から遺物が多く出土するとともに、SR-506からも多くの遺物が出土し、SR-506掘削後に東壁および南壁を精査したところ、異なる堆積単位が認められたため、これをSX-507とした。SR-506最下部の砂礫層下に位置する別単位の流路内堆積とみられる。SX-507として取り上げた遺物はないが、SR-506および周辺撹乱出土遺物に、弥生中期後葉以外の目立ったものはない。

(6)-1　Ⅵ区（図27、写真98～112）

Ⅵ区は、共通教育管理棟中央棟南側外壁に接した耐震補強基礎設置工事に伴うもので、南北幅約3m・東西長約57.5m、面積約172㎡を測る。これに要した調査期間は10月22日から11月21日のちょうど1ヶ月。

城北団地基本層序のⅠ・Ⅱ層を重機で取り除き、管路と建物余掘りを丁寧に手作業で取り除くと（写真98）、調査区東部では、一部城北団地基本層序Ⅲ層が広がるが、基本的にはⅣ層が出土し、Ⅲ層に近似する埋土の遺構が検出できた（写真100）。一方、調査区西部では、Ⅳ層上面でⅢ層とは異なる流路内堆積

写真93　00804（文京36次）調査Ⅴ区表土掘削後
（南から）

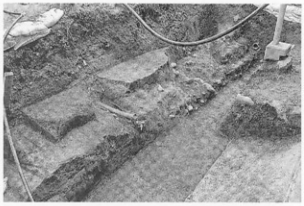


写真95　00804（文京36次）調査Ⅴ区 SR-506検出
（北西から）

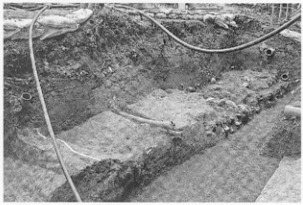


写真96　00804（文京36次）調査Ⅴ区 SR-506
（北西から）

写真94　00804（文京36次）調査Ⅴ区 SR-502
（北西から）

写真97　00804（文京36次）調査Ⅴ区南壁土層
（南西から）

が広がった（写真99）。出土した遺構は、流路3単位（SR-601～603）、住居1棟（SC-612）、溝2条（SD-605・620）、土壙2基（SK-615・616）、柱穴・小穴16基（SP-604・606～611・613・614・617～619・621～624）である。

これらの遺構を掘り下げた後、西部の工事掘削計画深度に達していた流路底のⅣ層以外について、南壁際で断ち割りを行い、Ⅴ層上面を検出した（写真101）。Ⅳ層内に土壌化層は認められなかったが（写真111）、CX42区とDA42区のⅣ層中から縄文土器が出土した（写真112）。

SR-601　DA～DD42区の、調査区西部約1/3に及ぶ流路内堆積（写真102）。Ⅱ層の下で、Ⅲ層を切り込んだ遺構として東岸の一部を当初認めていたが、Ⅲ層

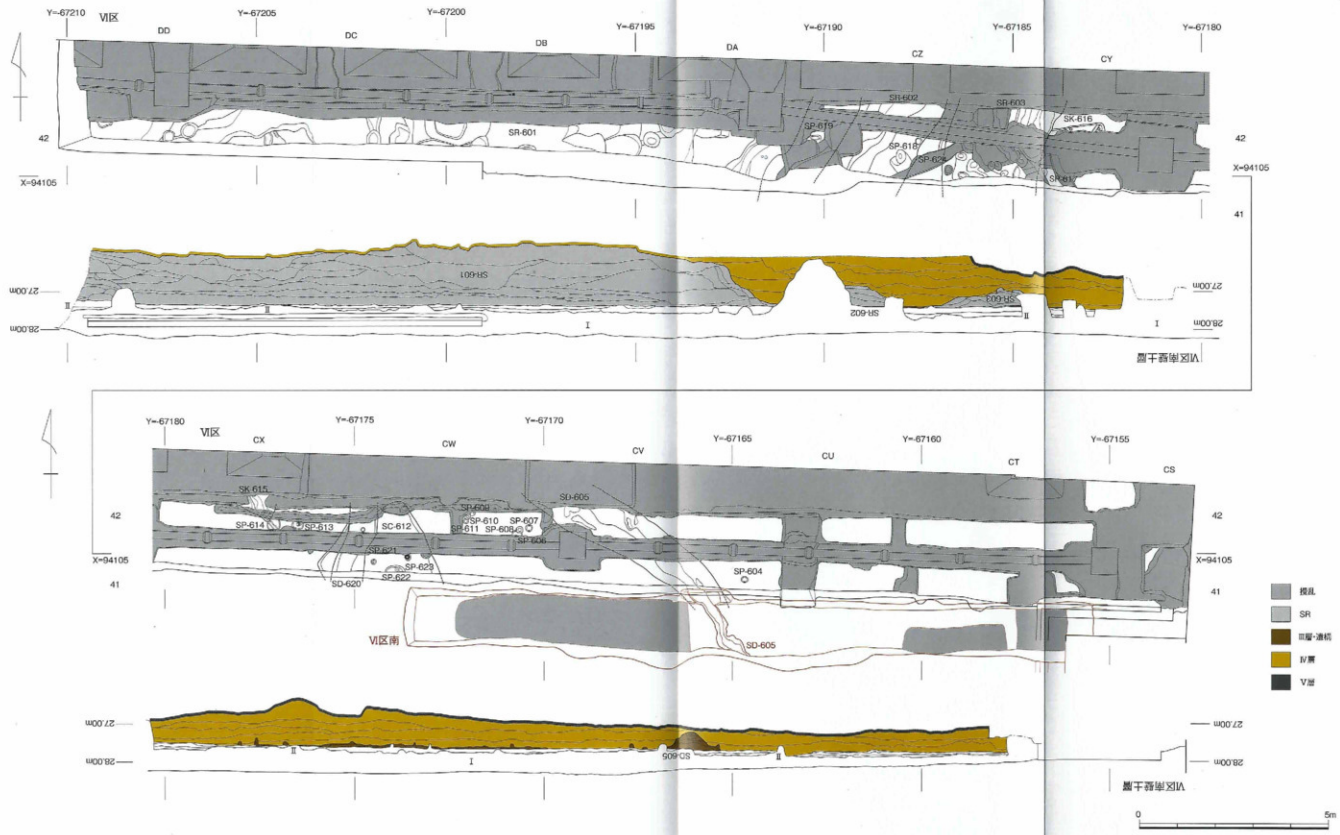


図27　00804（文京36次）調査Ⅵ区・Ⅵ区南実測図（縮尺1/100）

とした土層は流路落ち際に溜まり込んだ堆積であることが後に判明した（写真104）。東岸のⅣ層上面は標高約27.35mで、そこから一気に約100cm落ち込み、凹凸の激しい底面は25.8～26.2mで推移する（写真103）。ただし、底面の西側への上昇はみられず、流路範囲はかなり西側に広がると推測される。埋土は、最上部に2～5㎜大の砂礫を多く含む砂礫質土があり、水田耕作土を含む可能性がある。また、調査区西端部では、砂礫質土を切り込む砂・砂礫層があり、別単位の流路あるいは溝が存在した可能性もある。砂礫質土出土遺物には瓦器片があり、中世まで降る。砂礫質土の下は、砂層・砂礫層が厚く堆積し、砂・砂礫層、下部の砂層、最下部の砂礫層に分けて遺物を取り上げた。いずれも中世に降る遺物は出土せず、砂・砂礫層には安定して古墳時代後期の須恵器がみられる。下部の砂層では、調査区西端でのみまとまって古墳時代後期の須恵器が混じる他は、須恵器出現以前の土師器・弥生土器である。20cm大の塊石を含む最下部の砂礫層でも、須恵器は例外的に混じるだけで、弥生土器と古墳時代前期の土器が多く出土している。

SR-602　CZ41区出土の流路。Ⅲ層を切り込む堆積で、北側攪乱際で流路東西両岸を確認できるが、南壁際では西側に大きな攪乱が及んでいる。北東－南西方向に傾き、SR-601・603が平行する。幅約2m、深さ約55cmを測る。埋土は、最上部に3㎜以下の粗砂・砂礫からなる層があり、砂質土を挟んで、下部に微細砂を主体とする砂層が堆積する（写真105）。東側斜面でSP-618が出土している。出土遺物には弥生後期初頭から前葉の土器がある。

SR-603　CY・CZ41区出土の流路。やはりⅢ層を切り込む堆積で、南壁際で西岸を、北側攪乱際で東岸を確認できるものの、広い範囲に攪乱が及んでいる。それでも、幅約2.5m、深さ50cmの、SR-601・602に平行する北東－南西方向の流路が復元できる。東岸部ではSK-616を、西岸でSP-624を切っている。埋土は最上部にシルト質土の溜まりがあり、底部付近以外は1～10㎜大の砂・砂礫層が厚く堆積している（写真106）。遺物は弥生土器片が少量あるのみ。

SC-612　Ⅰ・Ⅱ層掘削後、CW41・42区を中心に広がった暗褐色砂質土をⅢ層として掘り下げ、平面検出した。CW41・42区、CX41・42区にまたがる、およそ45度傾いた方形ないし長方形状で、竪穴式住居の一端とした。北部は攪乱により切られるが、南西辺の一部と北東辺から、北西辺約2.8m、北東辺約2.2m以上に復元される。深さは5～10cmが残るのみ。床面でSD-620、SP-621～623が出土したが、南壁土層の精査により、SD-620とSP-622はSC-612を切っている（写真107）。出土遺物は、SD-620、SP-621～623を含んだ取り上げで、弥生土器細片がある。

SD-605　CV41・42区のⅣ層上面で出土した溝（写真109）。中央を北西－南東方向に伸び、幅1m前後で、調査区内で約3mが出土したことになる。深さは50～55cmと深く、埋土は上部がシルト質の強い黒褐色砂質土で、中部が砂質土、そして下部は砂・砂礫層となる（写真110）。弥生後期初頭から前葉の土器が出土している。

SD-620　CW41・42区、CX41・42区にまたがる溝状の落ち込み。掘り下げ時にはSC-612と一括していたが、南壁土層の確認からSC-612を切る遺構として分離した。東西幅80cm前後、南北約1.5m以上、深さは10cm弱（写真107）。SC-612、SP-621～623を含んだ取り上げで、弥生土器細片が出土している。

SK-615　CX42区で出土した落ち込み。南端を頂点に三角形状を呈するが、北側を攪乱で切られ、広がりの詳細は不明。深さは最大22cmを測る。埋土は砂層や砂質シルトが重なる水性堆積で、流路が南に拡張した最南部にあたる可能性もある。弥生土器細片が出土している。

SK-616　CY42区で南側を攪乱で、西側をSR-603で切られた土壙。やや東側で北に振った約1.4mの直線的な北辺と北東隅部があるが、南北は最大20cm幅が残るのみ。埋土は暗褐色砂質土。深さ約10cmで、底面には小穴あるいは溝状の凹凸がある（写真108）。弥生土器細片が出土している。

SP-604　SD-605東側、CU41区のⅣ層上面で出土した小穴。東西長径約20cm、南北短径約17cm、深さ約15cm。埋土は砂粒をほとんど含まない暗褐色シルト。遺物は出土していない。

SP-606　SC-612とSD-605の間、CW42区のⅣ層上面出土の小穴。径約18cm、深さ約15cm。埋土は暗褐色砂質シルト。遺物は出土していない。

SP-607　SC-612とSD-605の間、CW42区のⅣ層上面出土の小穴。SP-608を切る。1辺約18cmの隅丸方形で深さ約3cm。埋土は暗褐色砂質シルト。遺物は出土していない。

SP-608　SC-612とSD-605の間、CW42区のⅣ層

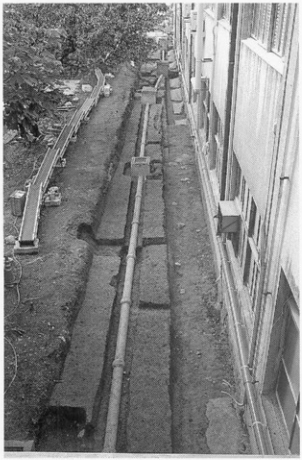


写真98　00804（文京36次）調査Ⅵ区表土掘削後
（東から）

写真101　00804（文京36次）調査Ⅵ区完掘（東から）

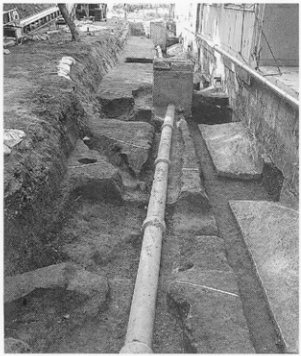


写真99　00804（文京36次）調査Ⅵ区西半遺構検出
（東から）

写真100　00804（文京36次）調査Ⅵ区東半遺構検出
（東から）

写真102　00804（文京36次）調査Ⅵ区 SR-601
（東から）

写真103　00804（文京36次）調査Ⅵ区 SR-601土層
（北東から）

写真104　00804（文京36次）調査Ⅵ区 SR-601東岸土層
（北西から）

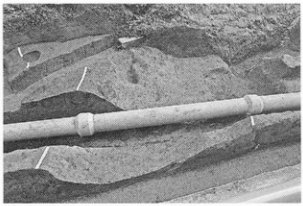


写真105　00804（文京36次）調査Ⅵ区 SR-602
（北から）

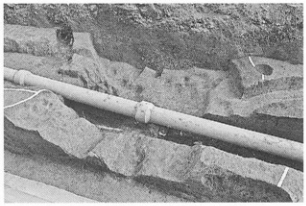


写真106　00804（文京36次）調査Ⅵ区 SR-603
（北から）

上面出土の小穴。SP-607に切られ、南半は撹乱により欠失。径約28cm、深さ約5cm。埋土は暗褐色砂質シルト。遺物は出土していない。

SP-609　SC-612とSD-605の間、CW42区のⅣ層上面出土の小穴。北側を撹乱で欠く。径約16cmで深さ約17cm。埋土は暗褐色砂質土。遺物は出土していない。

SP-610　SC-612とSD-605の間、CW42区のⅣ層上面出土の小穴。SP-611を切る。東西長径約16cm・南北短径約13cm、深さ約7cm。埋土は暗褐色シルト。遺物は出土していない。

SP-611　SC-612とSD-605の間、CW42区のⅣ層上面出土の小穴。SP-610に切られる。径約13cm、深さ約20cm。埋土は黒褐色砂質シルト。遺物は出土していない。

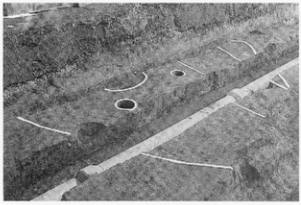


写真107　00804（文京36次）調査Ⅵ区 SC-612他
（北東から）

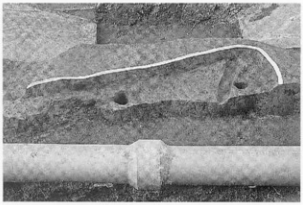


写真108　00804（文京36次）調査Ⅵ区 SK-616
（南から）

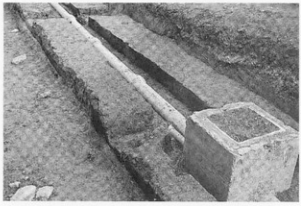


写真109　00804（文京36次）調査Ⅵ区 SD-605検出
（北西から）

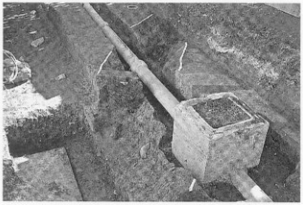


写真110　00804（文京36次）調査Ⅵ区 SD-605
（北西から）

写真111　00804（文京36次）調査Ⅵ区南壁土層
（北西から）

写真112　00804（文京36次）調査Ⅵ区Ⅳ層土器出土状況
（北東から）

SP-613　SC-612西側、CX42区のⅣ層上面出土の小穴。径約30cm、深さ約７cm。埋土は暗褐色砂質シルト。遺物は出土していない。

SP-614　SC-612西側、CX42区のⅣ層上面出土の小穴。径約35cm、深さ約７cmで、北西－南東方向に溝状に一段深い。埋土はオリーブ褐色砂質シルト。遺物は出土していない。

SP-617　SR-603東岸のⅣ層上面で出土した小穴。北東側1/2をSR-603で切られる。径約20cm、深さ約10cm。遺物は出土していない。

SP-618　SR-602の東側斜面で出土した小穴。径約18cm、深さは高位の西側から約15cm。遺物は出土していない。

SP-619　SR-601とSR-602の間、撹乱下面のⅣ層

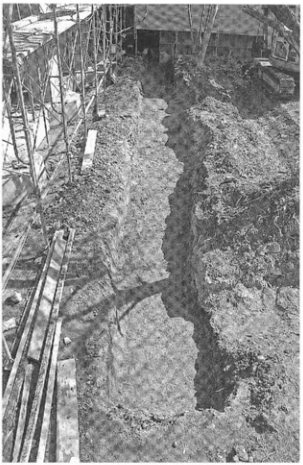


写真113　00804（文京36次）調査Ⅵ区南重機掘削後全景（西から）

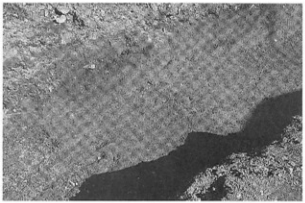


写真114　00804（文京36次）調査Ⅵ区南 SD-605検出（南西から）

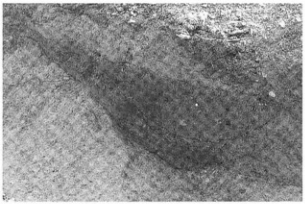


写真115　00804（文京36次）調査Ⅵ区南 SD-605土層（北から）

上面で検出した小穴。東西約30cm、北側は撹乱が及び南北15cm以上。深さは約８cmで、南西側が約13cmと一段深い。遺物は出土していない。

SP-621　CW41区のSC-612床面で出土した小穴。SC-612との切り合い関係は不明。径約13cm、深さは西側に一段深く約７cm。SP-621出土として取り上げた遺物はない。

SP-622　CW41区のSC-612床面で出土した柱穴。南壁土層の精査からSC-612を切る。東西約53cm、南北約17cmの範囲が出土したのみで、深さは約６cm。その内側に径約12cm、深さ約10cmの小穴がある。SP-622出土として取り上げた遺物はない。

SP-623　CW41区のSC-612床面で出土した柱穴。SC-612との切り合い関係は不明。径約14cm、深さ約20cm。やや西によって径７cmの柱痕が認められる。SP-623出土として取り上げた遺物はない。

SP-624　SR-603西岸で、SR-603に東半を切られて出土した小穴。東西約18cm、南北約28cmの範囲が残るのみ。遺物は出土していない。

(6)-2　Ⅵ区南（図27、写真113～115）

掘削深度が浅く工事立会が指示された工事のうち、Ⅵ区東部の南側に接して擁壁工事が行われた際、Ⅳ層上面が削られ、一部遺構の破壊される事態が生じた。2009年２月12日のことである。掘削工事に対して、基準となる現地表（設計ＧＬ）の認識に齟齬が生じていたためで、これを訂正するとともに、以後の掘削工事について埋蔵文化財に影響が及ばないことを、現地で施設基盤部・施工業者と再確認した。その上で、すでに掘削の及んでしまった範囲を精査し、残る遺構を調査することとした。Ⅵ区南調査区とし、２月16日に調査を行った。

重機掘削の及んだ範囲は、南北幅1.5m前後、東西長約18mの約27㎡。掘削底面を精査したところ、西部は大きな撹乱範囲内に位置するが、東部と西端部ではⅣ層に掘削の及んでいることを確認した（写真113）。

そして、掘削底面のⅣ層上面に残る遺構として、溝1条を検出した（写真114）。位置から、Ⅵ区で出土したSD-605の南東側延長部であり、遺構名はSD-605をそのまま用いることとした。これ以外の遺構の残存は認められず、壁面土層でもⅡ層を確認できなかった。

SD-605 Ⅵ区CV41・42区で出土したSD-605の南東側延長部分、長さ約1.8mが出土した。ただし、検出溝幅は30～50cm、深さ5cm程度が残ったに過ぎず、南壁で40cm以上の削平が確認できる（写真115）。弥生土器小片が出土している。

(7) Ⅶ区（図26、写真116～118）

Ⅶ区は、共通教育管理棟東棟南部の建物西側外壁に接した耐震補強基礎設置工事に伴うもので、東西幅約2.5m・南北長約17mを測り、面積は約43㎡となる。調査は、11月21日から12月3日に行った。

城北団地基本層序のⅠ・Ⅱ層を取り除くと、管路と建物柱基礎周囲に攪乱が及び、とりわけ北半は攪乱が激しい。また、Ⅴ層が高位で出土しⅣ層が薄いため、攪乱・流路内堆土・Ⅴ層の判別が十分でないまま掘り下げてしまった範囲がある。出土した遺構は、流路3単位（SR-701・704・705）と小穴1基（SP-703）である（写真116）。また、薄いⅣ層から出土遺物はない。

SR-701 CS38・39区、CT38・39区の、Ⅱ層下で出土した流路内堆積。西流する流路の南岸は、断続的ながら東北東－西南西方向に確認できたが、北岸はⅠ層で大きく攪乱され不明。ただし、辛うじて南岸にほぼ平行する底面の立ち上がりラインを辿ることができ、本来は流路南北幅を3m前後と推測できる。埋土は、最上部に砂質シルトが溜まり、下部に砂礫質土層・砂礫層が堆積し、深さは70cmに達する（写真117）。弥生前期の土器が出土しており、東側Ⅴ区のSR-502に連なるとみられる。

SP-703 CT38区出土の小穴。Ⅰ層下のⅣ層上面で検出した。埋土はにぶい黄褐色砂質土。径約25cm、深さ約4cm。出土遺物はない。

SR-704 CT37区のⅡ層下で出土した流路内堆積。Ⅳ層上面で南側SR-706と区別したが、上部での切り合い関係は不明。東西を攪乱で切られ、検出東西長は40～50cm、南北幅約70cm、深さ約20cm。埋土は上部が暗灰黄色砂質土、下部が黄灰色砂質土（写真118）。SR-704出土と取り上げた遺物には、弥生中期後葉から後期前葉の弥生土器片が少量と、分銅形土製品1点がある。

SR-706 調査区南端のCS・CT37区で出土した流路内堆積。北側SR-704との先後関係は不明。南北幅は約2.8m、深さ約40cmを測る。埋土は、最上部に灰黄褐色砂質土があり、上部にやや厚く黒褐色砂質土が溜まり、その下は再度灰黄褐色砂質土となり、最下部に拳大前後の円礫を多く含む褐灰色砂礫質土が堆積する（写真118）。弥生中期後葉の土器が出土している。Ⅴ区SR-506、Ⅳ区SR-401が上流部にあたる。

(8) Ⅷ区（図28、写真119～124）

Ⅷ区は、共通教育管理棟東側玄関寄基礎工事に伴う調査区で、南北約5m、東西約6.5m、面積約33㎡を測る。Ⅴ区北端の約5m北に位置する。12月4日から16日に調査を行った。

重機により城北団地基本層序Ⅰ・Ⅱ層を取り除くと、現車寄基礎に伴い、調査区西部は攪乱が及び、また建物に平行して旧汚水管のヒューム管埋設に伴い幅約80cmの溝状攪乱が、調査区中央部を南北に縦走するが、比較的浅い位置でⅢ層あるいは遺構埋土とみられる暗褐色砂質土が出土した（写真119）。暗褐色砂質土を当初は城北団地基本層序Ⅲ層、あるいはⅢ層下部のSR最上層として掘り下げたが、最終的に壁面での確認により、すべてSR-801埋土の最上層にあたると判断した。調査区南側は、緩やかにSR-801に向かって傾斜し、調査区北2/3が明確なSR-801の落ち込み内に位置する（写真120）。SR-801調査後に、Ⅳ層を全面で掘り下げたが、出土遺物はなく、土壌化層も認められなかった（写真124）。

SR-801 ほぼⅧ区全面に展開する流路。明確な落ち込みの南岸は、東南東－西北西方向であり、これに対応する北岸は調査区外に位置する。底面はⅣ層下のⅤ層に達し凹凸が激しく、最深約80cmを測る。埋土は上部に砂質土があるが、下部に砂層が厚く堆積し、最下層には1～20cm大の円礫を多く含む砂礫層がある（写真121）。出土遺物は、弥生後期初頭までの土器が下部の砂層・砂礫層から多く出土し、とりわけ下部の砂礫層北壁際では、比較的大型の土器片やミニチュア壺の完形品がまとまって出土している（写真122・123）。

SK-802 CP43区の、SR-801の明確な落ち込みよりは南側高位で出土した土壙。SR-801埋土の上層が